

月の輪遺跡群 II

—月の輪上遺跡（B地区）—

1981

富士宮市教育委員会

月の輪遺跡群 II

—月の輪上遺跡（B地区）—

1981

富士宮市教育委員会

序

月の輪遺跡群は昭和45年～47年の星山放水路施設建設に伴う事前調査によって、月の輪平遺跡、月の輪下遺跡、南部谷戸遺跡が、昭和52年の宅地造成工事の緊急調査によって月の輪上遺跡の発掘調査が実施されています。これらの遺跡については、すでに発掘調査報告書を刊行するとともに、積極的な保護、保存を図ってまいりました。しかしながら高度経済成長とともに核家族化は進展し開発の波は富士宮市にも押し寄せ、自然に満ちた人文環境もその衰いを大きく変貌させております。

遠く我々の先祖が、自然に逆らうことなく、自然の恵みを大切にし、自然そのものを最大限に活用し、今日まで保ってきました美しい自然、すなわち歴史が一瞬にして帰らぬものとなってしまう現況には看過できないものであります。

このため万全な埋蔵文化財保護対策の再検討が急務となっており全国的に共通する課題であります。このたびの月の輪上遺跡の発掘調査報告書の刊行は、そうした埋蔵文化財保護対策の一環であります。しかし、本来の文化財保護行政のもつ意味は、破壊される遺跡への対応のみならず、遺跡の保護、保存にあろうと思います。積極的な文化財保護への対応が地域の知的、かつ文化的な生活環境を保全するものであり、今後の市民生活の中に根付いた文化行政として大切に生かしていくかねばならないと思います。

本書が本市のみならず、ひろく古代社会究明の資となり、学術研究の一助となることを切望いたしますのであります。終りにこの発掘調査、ならびに整理・執筆作業に直接、間接に御指導、御尽力を賜わりました関係各位に対しまして、深い感謝と敬意を表します。

昭和56年3月

富士宮市教育長 塩川 隆司

例 言

1. 本書は、昭和55年10月29日より12月27日まで、約2ヶ月間にわたって発掘調査が実施された静岡県富士宮市星山字月の輪995-1番地他に所在する月の輪上遺跡-B地区-の調査報告書である。
2. 発掘調査は、月の輪上遺跡緊急調査事業として国および静岡県の補助を得て、富士宮市教育委員会が実施した。
3. 測図、および調査資料の整理は、富士宮市教育委員会技術員が主体として実施し、一部作業員の協力を得た。
4. 本書の執筆は富士宮市教育委員会技術員と加納俊介（筑波大学博士課程）が担当し、それぞれ執筆者名を文末に記した。
5. 本書の編集は富士宮市教育委員会技術員が行った。印刷、出版に関する事務は富士宮市教育委員会があたった。
6. 発掘調査による資料は全て富士宮市教育委員会で保管している。
7. 発掘調査体制は、次のとおりである。

調査主体者 塩川隆司（富士宮市教育長）

調査員 渡井一信（富士宮市教育委員会技術員）

調査補助 馬飼野行雄（富士宮市教育委員会技術員）

伊藤昌光（富士宮市教育委員会嘱託）

作業員 加納俊介・井出紀夫・木川知子・深沢由美子・吉野順子・佐野秋男・望月秀雄・友野勝・望月千代子・渡辺きみ江・野村信子・渡辺房子・青野摩耶子・続八重子・土井満里子・滝口たけ子・杉田ます子・小野田芳恵・木下朋子・芦川美智子・飯室久子・石川篤

事務局 諏訪重夫・佐野久雄・後藤章・渡辺孝秀（富士宮市教育委員会社会教育課）

目 次

序

例言

| | |
|-------------------------|----|
| I 遺跡の位置と環境 -月の輪遺跡群について- | 1 |
| 1 位置と環境 | 1 |
| 2 月の輪遺跡群 | 1 |
| 3 月の輪遺跡群を構成する遺跡 | 4 |
| 4 村落をとらえるために | 6 |
| II 調査の概要と経過 | 7 |
| III 調査の結果 | 10 |
| 1 遺構 | 10 |
| (1) 弥生時代 | 10 |
| (2) 歴史時代 | 31 |
| 2 遺物 | 37 |
| (1) 繩文時代 | 37 |
| (2) 弥生時代 | 38 |
| (3) 歴史時代 | 45 |
| 3 駿河湾東部の弥生土器編年のための覚書 | 52 |
| (1) 月の輪上遺跡出土の弥生土器 | 52 |
| (2) 駿河湾東部における後期弥生土器の実態 | 56 |

挿 図 目 次

| | |
|----------------------|----|
| 第1図 位置図 | 1 |
| 第2図 月の輪遺跡群断面図 | 2 |
| 第3図 月の輪遺跡群地形図 | 3 |
| 第4図 調査区全体図 | 9 |
| 第5図 竪穴住居跡01・02・16実測図 | 10 |
| 第6図 弥生時代遺構全体図 | 11 |
| 第7図 竪穴住居跡03実測図 | 13 |
| 第8図 竪穴住居跡04実測図 | 14 |
| 第9図 竪穴住居跡05実測図 | 15 |

| | | |
|------|---------------------|----|
| 第10図 | 豎穴住居跡06実測図 | 16 |
| 第11図 | 豎穴住居跡07実測図 | 16 |
| 第12図 | 豎穴住居跡08実測図 | 17 |
| 第13図 | 豎穴住居跡09・17実測図 | 18 |
| 第14図 | 豎穴住居跡11・12実測図 | 19 |
| 第15図 | 豎穴住居跡13実測図 | 20 |
| 第16図 | 豎穴住居跡14・15・19実測図 | 21 |
| 第17図 | 豎穴住居跡18実測図 | 22 |
| 第18図 | 溝状遺構20実測図 | 23 |
| 第19図 | 掘立柱建物跡21実測図 | 25 |
| 第20図 | 掘立柱建物跡22実測図 | 26 |
| 第21図 | 掘立柱建物跡23実測図 | 26 |
| 第22図 | 豎穴住居跡10・掘立柱建物跡26実測図 | 31 |
| 第23図 | 掘立柱建物跡24実測図 | 32 |
| 第24図 | 歴史時代遺構全体図 | 33 |
| 第25図 | 掘立柱建物跡25実測図 | 34 |
| 第26図 | 掘立柱建物跡27実測図 | 35 |
| 第27図 | 掘立柱建物跡28実測図 | 35 |
| 第28図 | 掘立柱建物跡29実測図 | 35 |
| 第29図 | 円形土坑42実測図 | 35 |
| 第30図 | 縄文時代石器実測図 | 37 |
| 第31図 | 鉄釘実測図 | 45 |
| 第32図 | 弥生土器実測図(1) | 46 |
| 第33図 | 弥生土器実測図(2) | 47 |
| 第34図 | 弥生土器実測図(3) | 48 |
| 第35図 | 弥生土器実測図(4) | 49 |
| 第36図 | 弥生土器実測図(5) | 50 |
| 第37図 | 弥生土器実測図(6) | 51 |
| 第38図 | 弥生土器拓影図 | 54 |
| 第39図 | 月の輪上遺跡（水道工事）出土土器実測図 | 57 |
| 第40図 | 泉遺跡出土土器実測図 | 59 |

挿表目次

| | | |
|------|-------------|----|
| 第1表 | 月の輪遺跡群相関表 | 6 |
| 第2表 | 竪穴住居跡計測表 | 27 |
| 第3表 | 弥生土器個体説明(1) | 38 |
| 第4表 | 弥生土器個体説明(2) | 39 |
| 第5表 | 弥生土器個体説明(3) | 40 |
| 第6表 | 弥生土器個体説明(4) | 41 |
| 第7表 | 弥生土器個体説明(5) | 42 |
| 第8表 | 弥生土器個体説明(6) | 43 |
| 第9表 | 弥生土器個体説明(7) | 44 |
| 第10表 | 弥生土器個体説明(8) | 45 |
| 第11表 | 月の輪遺跡群の土器分類 | 53 |

図版目次

| | |
|------|-------------------------------------|
| 図版第1 | A. 歴史時代遺構全景 B. 弥生時代遺構全景 |
| 図版第2 | A. 歴史時代遺構近景 B. 弥生時代遺構近景 |
| 図版第3 | A. 竪穴住居跡01床面 B. 竪穴住居跡01・02・16掘り方 |
| 図版第4 | A. 竪穴住居跡03床面 B. 竪穴住居跡03掘り方 |
| 図版第5 | A. 竪穴住居跡04床面 B. 竪穴住居跡04掘り方 |
| 図版第6 | A. 竪穴住居跡05床面 B. 竪穴住居跡05掘り方 |
| 図版第7 | A. 竪穴住居跡07床面 B. 竪穴住居跡07掘り方 |
| 図版第8 | A. 竪穴住居跡06床面 B. 竪穴住居跡08床面 |

- 図版第9 A. 竪穴住居跡09・17掘り方
B. 竪穴住居跡10・掘立柱建物跡26掘り方
- 図版第10 A. 竪穴住居跡11床面
B. 竪穴住居跡11掘り方
- 図版第11 A. 竪穴住居跡12床面
B. 竪穴住居跡12掘り方
- 図版第12 A. 竪穴住居跡13掘り方
B. 竪穴住居跡14・15・19床面
- 図版第13 A. 竪穴住居跡14・15・19床面
B. 竪穴住居跡14・15・19掘り方
- 図版第14 A. 竪穴住居跡18床面
B. 竪穴住居跡18掘り方
- 図版第15 A. 掘立柱建物跡21掘り方
B. 掘立柱建物跡22掘り方
- 図版第16 A. 掘立柱建物跡23掘り方
B. 円形土塀42検出状況
- 図版第17 溝状遺構20遺物出土状況
- 図版第18 A. 溝状遺構20遺物出土状況
B. 溝状遺構20完掘状況
C. 溝状遺構20出土土器
D. 溝状遺構20出土土器
- 図版第19 出土土器(1)
- 図版第20 出土土器(2)
- 図版第21 出土土器(3)
- 図版第22 出土土器(4)
- 図版第23 出土土器(5)
- 図版第24 A. 繩文時代石器、および弥生時代土製勾玉
B. 歴史時代遺物
- 図版第25 月の輪上遺跡（水道工事）出土土器
- 図版第26 泉遺跡出土土器

I 遺跡の位置と環境 一月の輪遺跡群について—

1 位置と環境

月の輪上遺跡は静岡県富士宮市星山字月の輪に所在する。東西300m、南北500m、面積15,000m²が推定される。本市にとって代表的な遺跡である。

月の輪上遺跡は昭和52年に宅地造成工事の事前調査として、本調査区より北へ200m程した地点の約800m²が調査され、古墳時代初頭の竪穴住居跡4棟が得られている。今回の調査は月の輪上遺跡の包蔵が推定される南辺にあたり、字月の輪995-1番地他、約2,000m²が対象となった。したがって、調査の混乱を防ぐため、前回の調査区を「A地区」、本調査区を「B地区」と呼称することとした。

月の輪上遺跡はひろく一月の輪遺跡群に属する。月の輪遺跡群は地質学上「星山丘陵」と総称される台地上に位置する。星山丘陵は古富士火山の噴出泥流が基盤となり、南端は富士川を挟んで岩渕丘陵に接する。西端は安居山断層を境に別所疊層を基盤とする羽鍋丘陵に連なり、北端は大宮断層にそって流下する潤井川によって市街地と区画される。この潤井川は洪積世には、本丘陵のほぼ中央に大きく発達した浸食谷（星山谷）を南下して富士川に流入していたと考えられ、流路変更後も一種の溺れ谷が形成されていた。この古潤井川の活動が両岸に河岸段丘を発達させ、さらにその上部に古富士泥流が覆ったため、地質学的にも複雑な様相を呈している。

この古潤井川の氾濫原、あるいは河岸段丘上、さらには台地上に多くの遺跡、いわゆる月の輪遺跡群が形成されているのである。

2 月の輪遺跡群

月の輪遺跡群に包括される諸遺跡は、月の輪上遺跡・月の輪平遺跡・月の輪下遺跡・五反田遺跡・南部谷戸遺跡・坊地上遺跡・坊地下遺跡・坊地南遺跡の8遺跡が考えられている。8遺跡は古潤井川（星山谷）両岸に、東西・南北とも約700~800m前後の距離を測る範囲に集中する。詳細に観察すると、両岸の台地上に月の輪上遺跡・月の輪平遺跡・坊地上遺跡・坊地南遺跡の各遺跡が、氾濫原に残った泥流からなる



第1図 位 置 図

独立小台地や、河岸段丘上、いわゆる谷底低位面に月の輪下遺跡・南部谷戸遺跡・坊地下遺跡・五反田遺跡が位置しており、全体としては、星山丘陵上に位置して台地上に占地する遺跡群と、沖積地内に位置する遺跡群とは、おのづから異なる性格を有するであろうことが指摘されている(富士宮市教育委員会 1981)。

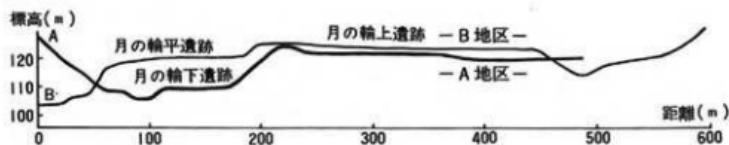
ここでは広域にとらえられた月の輪遺跡群に対して、星山谷を相対するという占地条件から、左岸に位置する月の輪上遺跡・月の輪平遺跡・月の輪下遺跡の3遺跡を『月の輪遺跡群』と限定してとらえておきたい。

上述した月の輪遺跡群に地形的な考察を加えると、月の輪上遺跡は星山谷北端部を一面に占めている。前述したように約15,000m²の包蔵推定面積は中央に平坦面より比高5m程を測る小丘をとりまき、北側に向って徐々に標高を減じて、約400m程で古潤井川冲積地へ没する。東側は若干窪みを有する浸食谷が南北両側から形成され、それから標高を急激に増して他台地となる。南側は標高144.2mを測る規模の大きい小丘によって区画され、西側は古潤井川による浸食によって崖地形が形成されている。したがって、独立丘陵の背の部分一帯が遺跡包蔵地となって、北側に開口する、いわゆる馬蹄形状の地形のなかに存在することとなる。微細な地形傾斜は東側に下る。

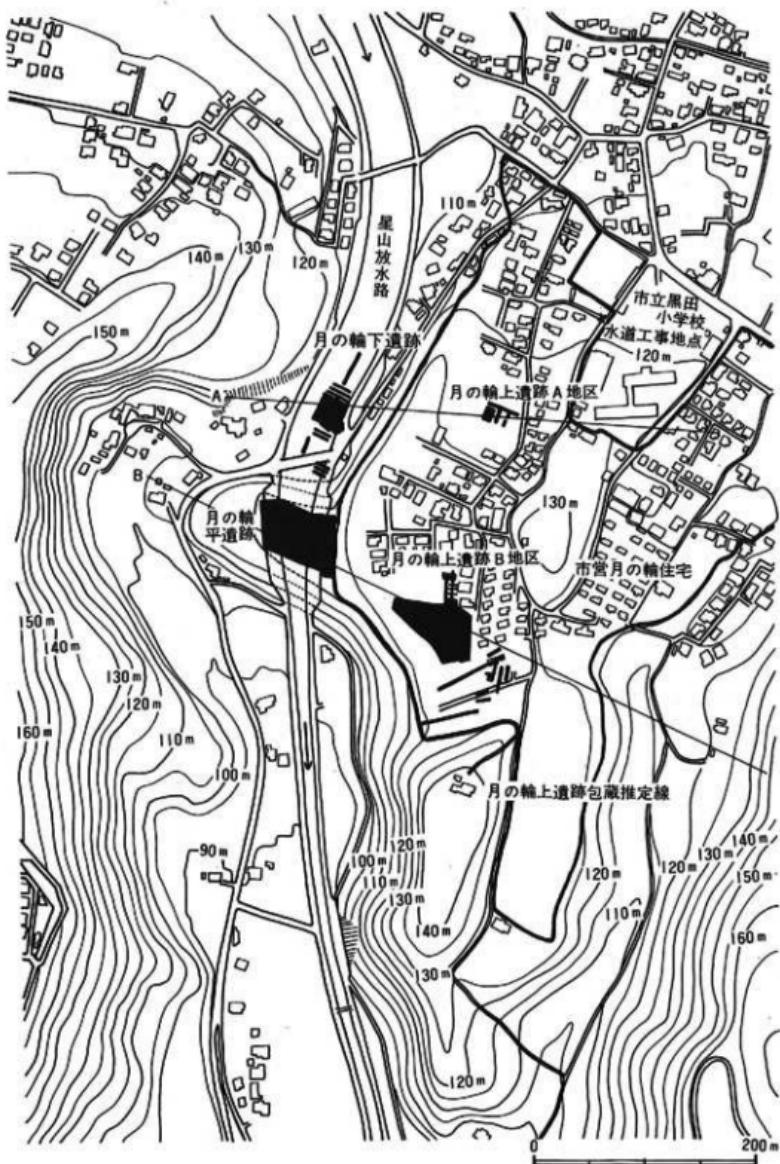
月の輪平遺跡は月の輪上遺跡の西側中央部分より西側に約150m程冲積地にせり出した舌状台地である。古潤井川が形成した河岸段丘上に古富士泥流が堆積したもので、月の輪上遺跡より5m程下っている。台地上は平坦面を呈して、東西100m、南北60m、面積約6,000m²が遺跡包蔵範囲として把握され、そのうち東半部約3,000m²が昭和45年～47年にかけて星山放水路施設建設のための事前調査が実施された。

月の輪下遺跡は月の輪平遺跡が占地する舌状台地の北側裾部から、月の輪上遺跡の西側崖下に沿った下部河岸段丘上に位置する。月の輪上遺跡より約15m、月の輪平遺跡より約10mの比高をもつ。その包蔵範囲は南北150m、東西40m、面積6,000m²を測る南北に細長い遺跡である。月の輪平遺跡と同様に星山放水路施設建設のため、西側約5,000m²程が調査され、現在は帶状に若干が残存するにすぎない。星山放水路を相対して正面から北にむけて坊地の3遺跡が存在する。

したがって、月の輪遺跡群を断面に落せば、階段状となる地形上に、上部から月の輪上遺跡、月の輪平遺跡、月の輪下遺跡が存在することとなる。これを平面的にとらえると、崖地形によっ



第2図 月の輪遺跡群断面図



第3図 月の輪遺跡群地形図

て分断されるものの、その連續性は充分に理解され、月の輪遺跡群は南北500m、東西450mの広大な遺跡群の想定を考えねばならない。

3 月の輪遺跡群を構成する遺跡

月の輪遺跡群内の遺跡は過去の積み重ねた発掘調査の結果、充分では無論ないが、明らかにされる部分も少なくない。

ここで、過去の発掘調査によって得られた結果を個別に記載して、月の輪遺跡群内の遺跡を把握してみたい。

(1) 月の輪下遺跡 古墳時代初頭—竪穴住居跡4棟・不定円形土塙1基・集石遺構11基—

月の輪下遺跡は本遺跡群のなかにあって極めて特殊な集落と言わざるを得ない。竪穴住居跡構造は一様に方形プランを呈するとともに、月の輪平遺跡、月の輪上遺跡A・B両地区に普遍である「床面の二重構造」(月の輪遺跡群I 参照)をもたず、さらに、柱穴が6本という特徴を有していた。また、第1~3号竪穴住居跡は廐直後に住居跡プラン内に集石遺構が構築される。集石遺構は散在するもの、敷き詰められたもの、積み重ねられたものに大別されて、それは遺跡全面に及ぶ状況であった。第4号竪穴住居跡は床面積5.1m²の小型住居跡であって、月の輪平遺跡の結果からすれば小竪穴遺構の規模であり、一般住居機能を有さないと判断されたものであった。さらに、竪穴内部に存在する地山巨礫は一般住居機能の不可能性を助長するものであって、床面の焼土、埋土内の焼土粒・炭化物、上面の焼土の存在は特異としか言い表せなかった。そうした埋土内、上面に焼土をもつ同様の性格を有して、集落中央部には巨大な円形土塙も存在して、あらためて特殊であり、非実用的要素を多分に含んだ集落であったことは言うまでもない。集落の存続期間は古墳時代初頭の比較的新しい極く限られた時期であった。

(2) 月の輪平遺跡 弘生時代終末期—古墳時代初頭—竪穴住居跡86棟・掘立柱建物跡2棟・特殊遺構2基—

月の輪平遺跡は調査面積が3,000m²程度であったにもかかわらず86棟の竪穴住居跡が重複しあって検出された。この重複の激しさのなかで、6時期以上の集落の変遷が推測されて、それは各時期とも5~6棟からなる2~3単位集団が大型住居跡1棟を中心として移動した軌跡であって、最終末期に大型住居跡が消滅し、住居跡規模が均等化していくことが指摘された。

さらに、集落内部に検討を加えて、竪穴住居跡は規模、付属施設、位置関係から大型住居跡6棟、一般住居跡68棟、小竪穴遺構12棟の3類に区分されるが、それはそれぞれ機能の差をもつものであって、特に炉・柱穴を欠いて、一般住居機能を有しない小竪穴遺構が集落外縁に点在して、単位集団ではなくて、集落全体と対応する状況から、居住施設ではなくして、貯蔵・収藏施設等の機能をもつことが推測された。竪穴住居跡の形状は胴張隅丸形プランを呈する住居跡が重複関係、ならびに出土土器から古い段階に位置付けられ、いわゆる「床面の二重構造」がC類で方形プランを呈する住居跡が新しい段階に位置することが知れた。等々、集落復原にむけて数々の検討がなされた。激しい重複関係からすれば、かなり無理な検討であったが、一応の成果として認

めたい。

(3) 月の輪上遺跡－A地区－ 古墳時代初頭－竪穴住居跡4棟－

月の輪上遺跡－A地区－は月の輪上遺跡包蔵推定範囲のはば中央部分にあたり、竪穴住居跡4棟が検出された。出土土器から月の輪平遺跡とある時期に併存していたと思われる。検出された4棟の竪穴住居跡の規模は月の輪平遺跡で指摘された小形住居跡に属して、小調査範囲であったが、月の輪平遺跡に比して散在的であった。月の輪平遺跡ではそうした小形住居跡が南東部分に集中する傾向が伺われることから、それに対応する占地形態を示していると言えるかも知れない状況であった。

(4) 月の輪上遺跡－B地区－ 弥生時代後期後半－竪穴住居跡18棟・溝状遺構1基・掘立柱建物跡3棟－

月の輪上遺跡－B地区－は月の輪上遺跡包蔵推定範囲の南西辺にあたり、本調査区より約50m程南に位置する小丘間の約5,000m²は昭和52年10月に遺跡確認調査が実施されて、現地表より1～3m程窪む旧地形が確認され、遺物、遺構とも確認されなかったことから、一種の湿地帯であったことが認められて、月の輪上遺跡－B地区－は遺跡最南端に位置することが知れた。

検出された竪穴住居跡は月の輪平遺跡の検討に基づいて、規模別に大型住居跡1棟、一般住居跡12棟、小竪穴遺構1棟に分けられた。これを月の輪平遺跡と対照すると、大型住居跡1棟に対して一般住居跡19棟、小竪穴遺構2棟となることから、竪穴住居跡規模はほぼ同様の数値が得られた。

さらに、一般住居跡内にも7～10m²に集中する小形住居跡群と、17～35m²の規模的に一般的な住居跡群に分れて、10～17m²内の規模に納まる竪穴住居跡が存在しなかった。これに関して注目されるのは、月の輪平遺跡、月の輪上遺跡－A地区－と同じく月の輪上遺跡－B地区－でも小形住居跡が集落の特定の場所に集中して検出されたことである。規模的に一般的な住居跡より大きな隔たりをもち、位置関係に特徴をもつ小形住居跡には他と区別されべき役割の存在が想定されるかも知れない。

竪穴住居跡の分布は大型住居跡が調査区中央に位置して、一般住居跡がそれを境いに環状となって南北2群に分離されている様相が見受けられた。環状となって占地する一般住居跡の中央に作られる広場は10～20mとなって、その配置形態は月の輪平遺跡に合致するものであった。月の輪平遺跡の重複関係は見られず、重複関係、掘立柱建物跡の検出数等から、2～3期の集落変遷が考えられる状況であった。

竪穴住居跡の形状は胴張隅丸形が10棟、隅丸形が4棟、他は形状を把握されない状況にあったが、方形は認められなかった。胴張隅丸形は月の輪平遺跡においても、出土土器、重複関係から古い段階に位置し、方形が新しい段階に位置するという、従来の知見と矛盾しない状況が把握され、月の輪上遺跡－B地区－も弥生時代後期後半の竪穴住居跡形状を呈するものであった。

竪穴住居跡は一様に『床面の二重構造』を有していた。月の輪平遺跡では『床面の二重構造』による新旧関係は重複が激しいことから明確とされなかったが、それでもB類が古い段階に位置

するであろうことは予想された。月の輪上遺跡－B 地点－では確認される16棟中、9棟にB類が認められて、『床面の二重構造』B類は古い段階に胴張隅丸形住居跡に施されたものと理解されるものであった。

掘立柱建物跡3棟が調査区中央を南北に列状に検出された。それらは竪穴住居跡との重複関係から少なくとも2棟が1期に存在していた。形状はいずれも間口2間×奥行1間で、柱穴規模は径60~80cm、深さ50~80cmを測り、掘立柱建物、なかでも高床倉庫の機能を想定するに充分であった。

ところで、これと比較するとき、月の輪平遺跡に認められた掘立柱建物跡の形状は間口1間×奥行1間、柱穴規模は径30~50cm、深さ20~30cmを測り、それは月の輪上遺跡－B地区－に検出された中世掘立柱建物跡に類似するものである。月の輪平遺跡より検出された掘立柱建物跡に再検討を加えると、第1号掘立柱建物跡周辺には焼土跡、小堆群が位置して、さらに第2号掘立柱建物跡と想定した柱穴内に高杯・器台・S字口縁台付甕等、限られた器種が集中して配置されていた状況から、上屋構造の相違とともに機能の違いをも予想せねばならぬかも知れない。

溝状遺構が竪穴住居跡、掘立柱建物跡群より北側に約30m程離れて検出された。検出面積が限られたことから性格論求には及ばなかったが、今後の月の輪上遺跡の集落構造追求に大きな意味をもつであろうことは言うまでもない。

(5) 月の輪上遺跡－水道工事による採集資料－弥生時代後期後半

月の輪上遺跡－B地区－より北へ約300m程向った市立黒田小学校西側の水道工事中に壺・甕が検出された。この地点は月の輪上遺跡の包蔵推定範囲の北辺にあたり、月の輪上遺跡－B地区－と占地的に対応する地区である。出土状況は黒色スコリア土の落ち込み内に壺・甕が集中して検出されており、住居跡等の遺構の可能性を有するものであった。出土土器は月の輪上遺跡－B地区－と同時期の所産であった。したがって、月の輪上遺跡の弥生時代後期後半における集落の広がりは予想以上に広域なものであると言えよう。（第39図 参照）

4 村落をとらえるために

村落を対象とするには集落に加えて生産の場を検討することが必須である。弥生・古墳時代といえば伊ナ作中心の農耕社会をまず思い浮べる。明治時代の地籍図を参照すれば、もっとも近い水田は遺跡群北端に位置する月の輪上遺跡－水道工事による採集資料－地点よりさらに北へ約

| 遺跡 | 時代 | |
|----------|-----|-----|
| | 後半 | 末葉 |
| 月の輪下 | | |
| 月の輪平 | | |
| 月の輪上－A－ | | ■■■ |
| 月の輪上－B－ | ■■■ | |
| 月の輪上(水道) | | |

300m程下った潤井川流域の湿地帯内に求めねばならない。ところが、北へ約200m程した中間に、おそらく同時期の五反田遺跡と南部谷戸遺跡（弥生時代後期末葉の集落を確認）が存在している。いわゆる高地性集落とは認められない本遺跡群が、生産の場を大きく離れて占地される必然性は何であったのか、畑作等の違った生業形態を含めて考究すべき問題は多い。

第1表 月の輪遺跡群相関表

この時代の集落は墓地を伴なうのが通例である。しかし、前述した南部谷戸遺跡に古墳時代初頭の方形周溝墓群が確認されているのみで、本遺跡群内にはいまだに発見されていない。

もっとも姿を現わしている集落の場合でも、時期として弥生時代後期後半から古墳時代初頭に含まれ、それ以前、以後は判然としない。また、その時期内における遺跡群としての連関も、全容を把握するまでには至っていない。そうした現状で確認できることは次のような事であろう。

① 弥生時代後期後半には月の輪上遺跡-B地区-以外にも、水道工事によって採集された地点にも集落跡の存在が推測されて、少なくとも2地点から開始されている。

②それに後続する弥生時代終末期-古墳時代初頭の集落は月の輪平遺跡で確認される。その存続期間の前半には月の輪上遺跡-A地区-に別の集落の存在の可能性が強く、後半には特殊な性格をもつてであろう月の輪下遺跡が存在する。また、月の輪上遺跡-B地区-でS字状口縁台付甕片等が表採されているので、付近にこの時期の集落の存在の可能性もある。

③集落を構成する諸要素=大型住居跡・一般住居跡・小形住居跡・貯蔵施設=を備えて検出されたのは月の輪平遺跡と月の輪上遺跡-B地区-で、月の輪上遺跡-A地区-ではそのうちの小形住居跡だけを検出している。

④いわゆる貯蔵施設では小豎穴遺構と高床倉庫がある。前者(納屋?)は月の輪平遺跡、月の輪上遺跡-B地区-の両遺跡に検出される。しかし、権力関係を考察するうえで重要な後者のグラを検出できたのは月の輪上遺跡-B地区-だけで、集落の4分の3以上を発掘調査した月の輪平遺跡ではなお発見されていない。

(加納・馬飼野)

II 調査の概要と経過

月の輪上遺跡-B地区-の発掘調査は昭和55年10月29日~12月27日まで約2ヶ月間にわたって実施され、発掘調査面積は約1,900m²に達した。

発掘調査は調査区一帯に遺跡の包蔵が予想されたため、全面の表土を除去することで開始した。しかし、表土下層の状況に不自然を感じる部分が多いことから、調査区一帯に第1~6号トレチ、補助として8本のトレチを設定し、土層堆積状況の把握をすることにした。

その結果、調査区は西側高位部分が削取られ、削土が旧表土上に盛土されているとともに、北・南部分が広範囲に包含層が擾乱されており、それを繞うかのように帶状の擾乱溝、あるいは多くの「イモ穴」、「ゴミ穴」が掘られていて、調査区の3分の1程が擾乱されている状況が知られた。

トレチの状況は擾乱部分を除けば、表土層、大沢ラビリ層、黒褐色土層、栗色土層、一部に黒土帯、褐色ローム層と、本地域における一般的な土層堆積状況を示していた。第1~3トレチに、大沢ラビリ層を切って構築される竪穴住居跡が確認されたため、再度、盛土を除去し、大沢ラビリ層を露出させて遺構を追求することにした。なお、縄文時代遺構、遺物の包蔵は認められなかった。

大沢ラビリ層が露出された状況での遺構の検出は比較的容易であった。遺構は竪穴住居跡、柱

穴群（掘立柱建物跡）、円形土塙等が想定されて、埋土の状況に黒色スコリア土をもつものと、黒色有機質土をもつものの2類が知れた。これは後の検討、出土土器等から黒色スコリア土を埋土にもつものが弥生時代遺構、黒色有機質土を埋土にもつものが歴史時代遺構であることが知れた。

遺構は検出順に遺構番号を付け、竪穴住居跡01、掘立柱建物跡21、円形土塙跡30等と呼称して、遺構番号の前の遺構の性格を示すことにした。したがって、個々の遺構の検出番号ではない。

遺構の発掘は、まず、歴史時代遺構から実施した。柱穴群（掘立柱建物跡）と円形土塙跡が主体であり、前述したように、それらは埋土に黒色有機質土をもつことから、弥生時代柱穴群（掘立柱建物跡）と区別して検出に努めた。その結果、調査区中央部分に整然と並ぶ掘立柱建物跡が確認された。柱穴規模は径30~50cm、深さ20~90cmと貧弱であった。したがって、攪乱、もしくは竪穴住居跡埋土内に確認できない部分もあったが、ここでは6棟を認めた。円形土塙跡は調査区全域に散在して22基が検出された。規模は径100cm内外、深さ5~60cmを測って、遺物は確認されなかつたが、人頭大の礫数個が配された土塙2基が検出された。

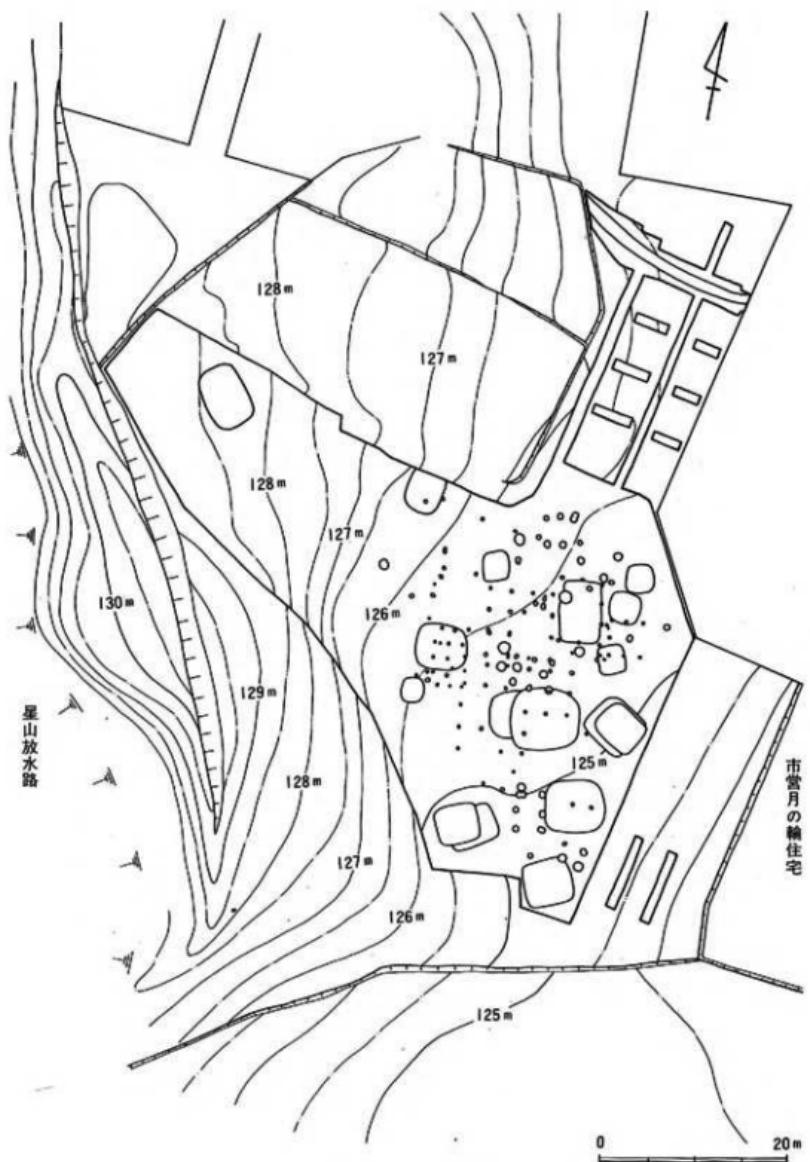
歴史時代遺構の発掘終了後、「弥生時代遺構の発掘に取りかかった。比較的重複関係をもたない例が多かったが、月の輪平遺跡で得た『床面の二重構造』追求もあって、基本的に黒色スコリア土の落ち込み範囲内に直行する1.2本の小トレンチを設定して、重複関係、床面下の状況の把握に努めた。その結果、竪穴住居跡全てが『床面の二重構造』を有して、2、ないし3棟が重複する3箇所が知れた。したがって、床面において柱穴の検出は困難であつて、掘り方において確認される場合が多かった。床面は大半の竪穴住居跡が炉を有していたことや、比較的堅い貼り床面を有していたため確認は容易であった。

竪穴住居跡は調査区中央から南東辺に集中して、中央部には大型住居跡が検出された。北西辺は広範囲に及ぶ攪乱によるものであろうか、散在的であったが、攪乱部分が斜面に相当することから、本来、分布的にも散在的であったと理解した。斜面をあがった部分（調査区最西端）に若干の平坦面が認められ、隣接する月の輪平遺跡との接点にあたるため調査を進めて、竪穴住居跡1棟を確認し、計19棟の竪穴住居跡を検出した。

竪穴住居跡外に規模の大きい柱穴が規格性をもつて検出されたため、精査を進めて、中央部、南辺部、北辺部に3棟の掘立柱建物跡を検出した。

溝状遺構は調査区北辺に検出された。それはすでに大沢ラピリ層が削取されて、黒褐色土層に黒色スコリア土が落ち込んだ状況で、再精査によって確認されたものであった。溝状遺構内には壺・甕等の土器が多量に出土して、発掘調査終半はこの発掘に終始した。

昭和55年12月27日に発掘調査を完了して、以後、報告書作成作業を継続し、昭和56年3月31日に本書を刊行した。(渡井)



第4図 調査区全体図

III 調査の結果

1 造構

(1) 弥生時代

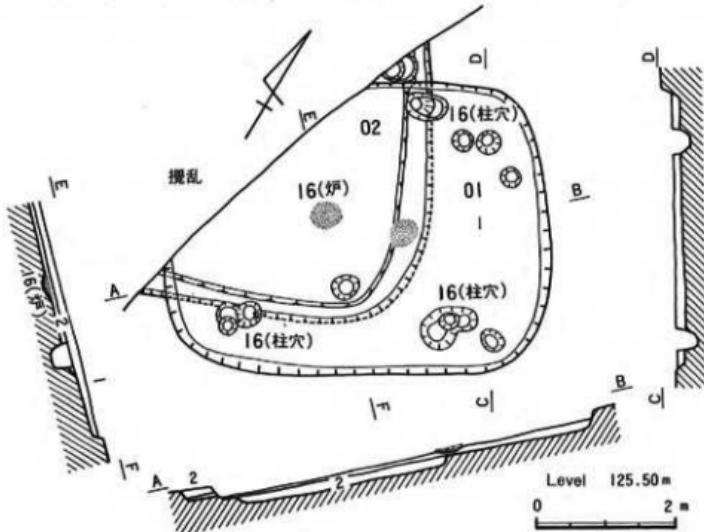
月の輪上遺跡－B地区－の弥生時代遺構は竪穴住居跡18棟、掘立柱建物跡3棟、溝状遺構1基であった。なお、竪穴住居跡に記述される床面構造A・B・C類は月の輪遺跡群Iに準ずるもので、A類－床面プランの外縁部に巾70~80cm程の周濠状掘り込みをもって中央部を方台状に高く残す。B類－床面プランの外縁部を平坦に残して、その内側より周濠状掘り込みをA類同様にもつ。C類－床面プラン全域を舟底状、ないしは平坦な掘り込みをもつ。と理解されたい。

① 竪穴住居跡

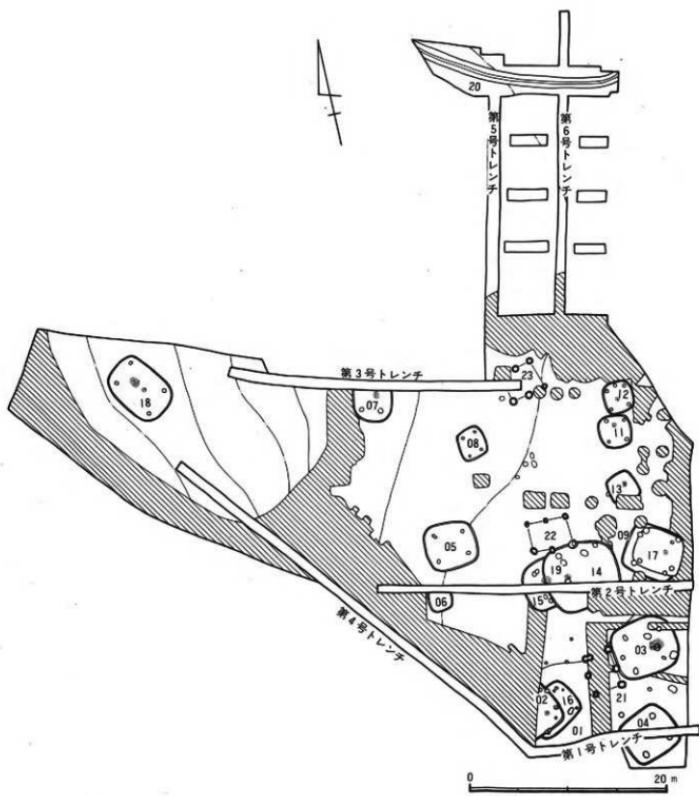
竪穴住居跡 01・02・16（第5図、図版第3）

竪穴住居跡01・02・16は調査区南端に掘立柱建物跡21に隣接して、3棟が重複して検出された。3棟とも西半部を擾乱によって削取されて、規模、形状を把握するに困難を呈した。新(→)旧関係は01→02→16であった。

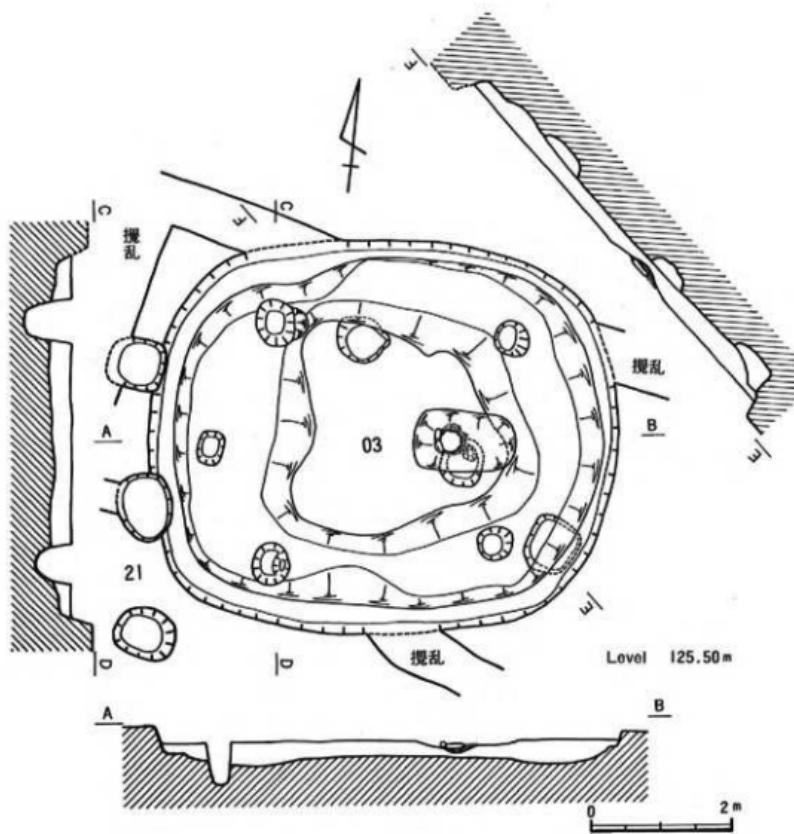
竪穴住居跡01は隅丸長方形を呈して、床面構造はC類であった。検出面が浅く、南壁は1~3cm程残存する程度であった。床面は比較的堅固な貼り床がなされ、中央北寄りに50×30cmの範囲で炉が確認された。柱穴は3本検出され、残りは擾乱されていた。柱穴規模は径30cm内外、深さ



第5図 竪穴住居跡 01・02・16 実測図



第6図 弥生時代遺構全体図

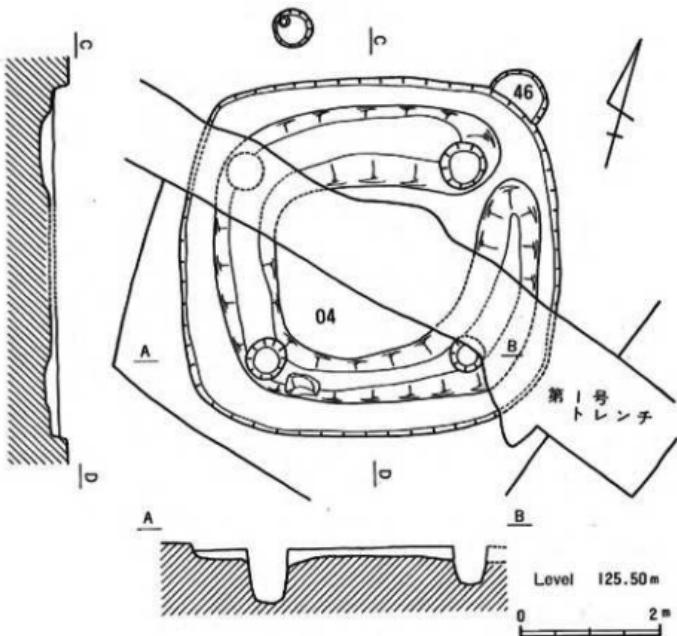


第7図 竪穴住居跡 03 実測図

も30cm程で貧弱であった。他に柱穴状ピットが北隅柱穴辺に2本検出された。

竪穴住居跡02は竪穴住居跡01の床面下に、2分の1以上を擾乱で失って検出された。形状は隅丸形らしく、床面構造はB類であった。床面は竪穴住居跡01に削取されており掘り方が残存するにとどまった。したがって、2本の柱穴は掘り方内に確認されて、径40cm、深さ15cm程を測った。

竪穴住居跡16は上述2竪穴住居跡の掘り方発掘中に検出された。炉、柱穴が残存するのみで規模、形状は把握されなかった。炉は擾乱されない3本の柱穴の中央部に位置するが、上部を竪穴住居跡02に削取されたため、竪穴住居跡02の床面構築土内には焼土が点散していた。残存する範囲は45×40cm程を測った。3本の柱穴はいずれも2段掘り的な構造をもち、規模は50~70cm、深さは40cm程を測った。



第8図 竪穴住居跡04実測図

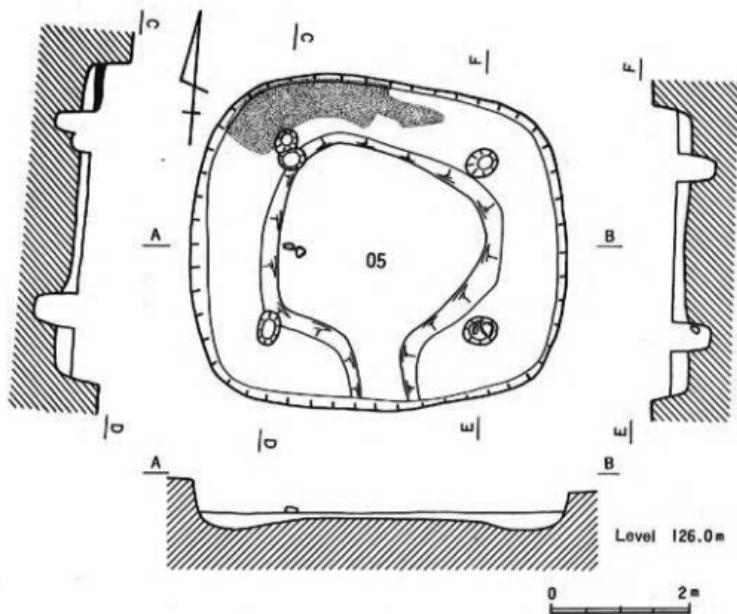
遺物は竪穴住居跡01に0101等の少量の土器片が検出されたに過ぎなかった。

竪穴住居跡03（第7図、図版第4）

竪穴住居跡03は調査区南寄りに掘立柱建物跡21と重複して検出された。新(→)旧関係は21→3であった。

比較的大形の竪穴住居跡で、胴張隅丸長方形、床面構造はB類であった。確認当初は帯状の掘溝がプラン内に存在していたが、掘り方までは及んでおらず、残存状況は良好であった。床面は堅固な貼り床がなされ、炉は掘り方と炉石2個を有して、中央東寄りに検出された。掘り方は140cm×70cm程の楕円形で、焼土の範囲は40×40cm程であったが、焼土上面には30cm程を測る偏平碟が覆うような状況で検出された。柱穴は4本検出された。径50~60cm、深さ50~60cmを測って規模の大きいものであった。さらに、西側柱穴間に径50×30cm、深さ60cmを測る柱穴状のピットが検出された。

掘り方内に径50~70cm、深さ（掘り方面より）20cm程の方形状を呈したピットが検出された。明らかに竪穴住居跡03より古いものであった。列状に並ぶことから、掘立柱建物跡の可能性も指摘されたが、対応するピットは確認されなかった。



第9図 竪穴住居跡05実測図

遺物は0301～3等が検出された。0303は床面上から検出された甕形土器の大形破片であったが、他は小破片で量的に多いとは言えなかった。

竪穴住居跡04（第8図、図版第5）

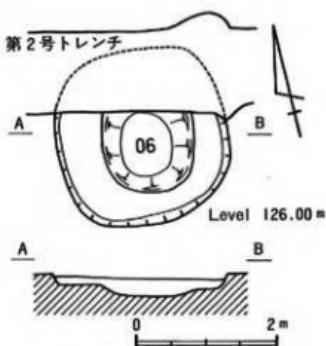
調査区最南端に検出された。中央部分をトレンチによって削取してしまったため、炉、柱穴1本を確認できなかった。

形状は胴張隅丸方形、床面構造はB類であった。床面は中央部分を削取してしまったが、かなり堅固な貼り床が認められた。柱穴は径50～60cm、深さ50～80cmを測り、他に比して深い形狀が目立った。

遺物は南東隅に土製勾玉が完形で検出された。他は0401・2等の少破片が床面、掘り方内より少量検出されたに過ぎなかった。

竪穴住居跡05（第9図、図版第6）

調査区中央西寄りに竪穴住居跡06と隣接して検出された。検出面より床面まで約50cm程を測る深い竪穴住居跡であった。胴張隅丸長方形、床面構造A類で、比較的整っていた。床面は部分的に堅い面もあったが、他に比して全体的に軟弱であった。炉は確認されなかつたが、中央西側に炉石と似かよる小礫2個が床面上に配されていた。他に焼土が北壁際に300×50cm程確認された。焼土

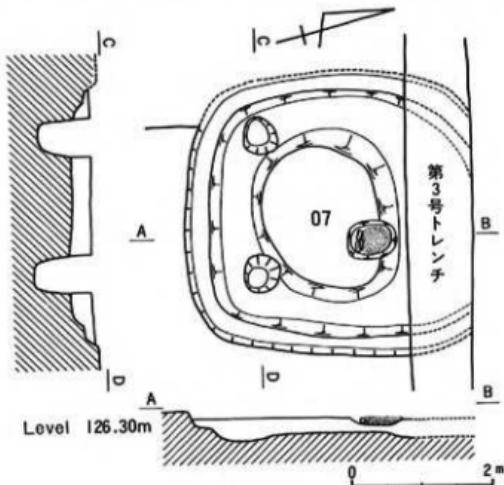


第10図 竪穴住居跡 06 実測図
跡29を認めた。

遺物は土器片が少量検出されたに過ぎなかったが、打製石斧が北壁中央の栗色土層露出面に遺存していた。出土層から縄文時代中～後期の所産と思われた。

竪穴住居跡 06 (第10図、図版第8)

竪穴住居跡05の南側に4m程離れて検出された。本遺跡で最少の規模を測った。北半部をトレーニチによって削取してしまったが、それでも炉は有しないと思われ、柱穴も同様と思われた。形状は胴張隅丸形が推定され、床面構造は広義のC類にあたるが、床面プランの外縁部を平坦に残



第11図 竪穴住居跡 07 実測図

の状況は埋土内に混入する程度で量的には多いと言えなかつたが、床面上にひろがることから、竪穴住居跡05廃棄と同時のものと思われた。他に同様の焼土は確認されなかつた。柱穴は4本柱であったが、北西隅の柱穴に浅い皿状のビットが検出された。副柱とすべきかは判断に迷つた。柱穴規模は径30~50cm、深さ50cm内外を測つた。南東隅の柱穴には補強礎と思われる礎2個が浮いた状況で検出された。

埋土上部には歴史時代の柱穴と思われるビットが群在していたが、検出状況が悪いこともあって、正確に把握されたか不安であったが、掘立柱建物

してから舟底状掘り下げてあることから、構築方法はB類に準ずるかも知れない。床面は非常に軟弱で日常使用された感じはなかつた。以上の状況は月の輪平遺跡に指摘された『小竪穴遺構』に類するとと思われた。

遺物は皆無に等しかつた。

竪穴住居跡 07

(第11図、図版第7)

調査区中央西寄りの斜面が平坦面に変ろうとする部分に検出された。竪穴住居跡18を占地状況から他集団と理解すると、最西端に位置すること

となる。

北半部をトレンチによって削取してしまい、さらに北壁は調査区外に達していた。西壁も床上部を擾乱されて失っていたが、床面下は良好に残存していた。胴張隅丸形が推定されて、床面構造はB類であった。床面は堅固な貼り床がなされて、炉は中央東北寄りに検出された。70×50cm程の楕円形、皿状の掘り方をもって、細長い炉石3個を伴っていた。焼土は炉石部分より北側に掘り方に充満していた。柱穴は南列の2本を検出した。径50cm程で70~80cmの深さをもって、他に比して頗強な感じを受けた。

遺物は埋土、床面、掘り方内より土器片が少量検出されたに過ぎなかった。

竪穴住居跡08(第12図、図版第8)

竪穴住居跡08は調査区の中央部に検出された。

近隣に遺構がなく、約15m程して竪穴住居跡05・07、掘立柱建物跡22・23が位置して、その中间にあたり単独的な存在に見える。規模は竪穴住居跡06に次ぐものであったが、前述した『小竪穴遺構』の設定よりは小形住居跡が適切であった。床面は比較的軟弱で、炉は確認されなかった。柱穴は4本検出された。径30cm程、深さ30~40cm程を測った。

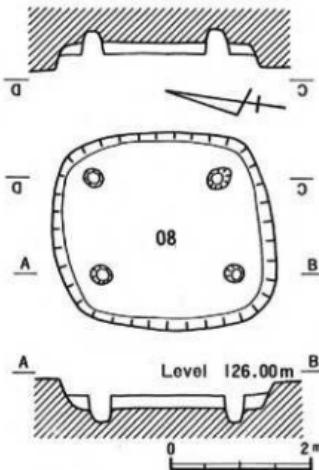
遺物は皆無に等しかった。

竪穴住居跡09・17(第13図、図版第9)

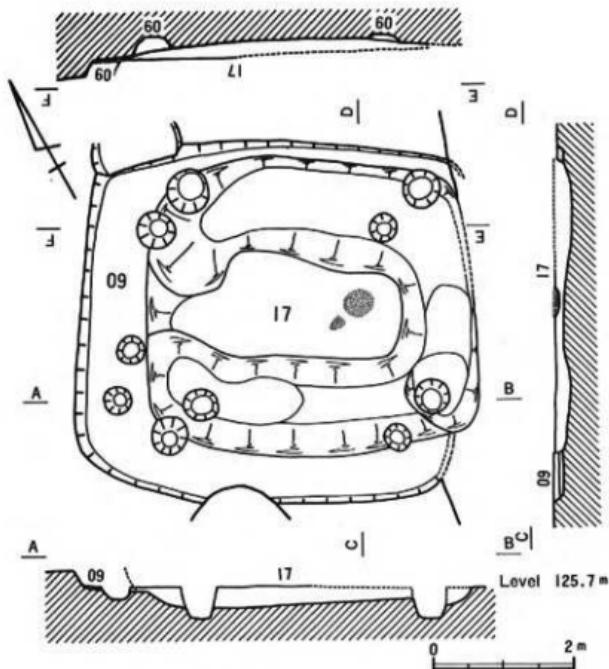
竪穴住居跡09・17は調査区の東端部中央に検出された。西側に竪穴住居跡14が隣接する。検出当初、竪穴住居跡09を対象としたため、範囲内に納まる竪穴住居跡17の存在に気付かず、壁を削取してしまった。新(→)旧関係は17→9であった。両竪穴住居跡とも東半部は擾乱されていた。

竪穴住居跡17は調査の過程、ならびに擾乱によって壁を検出することはできなかった。残存する掘り方、柱穴の配置から、床面構造B類が推測されて面積は25m²程を測ると思われた。床面も東南辺を擾乱されているとともに、堅い床面はもたない状況であった。炉は中央東寄りに検出された。30×20cm程の範囲と西寄りに小範囲に焼土をもつものであった。柱穴は竪穴住居跡09より規模が大きく区別された。径50~60cm、深さ40cm前後を測って4本が検出された。

竪穴住居跡09は竪穴住居跡17によって床面の大半を失っていた。形状は隅丸長方形で、床面構造はC類であった。柱穴は径30~40cm、深さ20cm程を測る浅い規模のものが4本検出され、さらに、南西隅の柱穴付近に同規模の2本の柱穴状ピットが検出され、そのうち1本の埋土内より脚部破片(0901)が検出された。



第12図 竪穴住居跡08 実測図



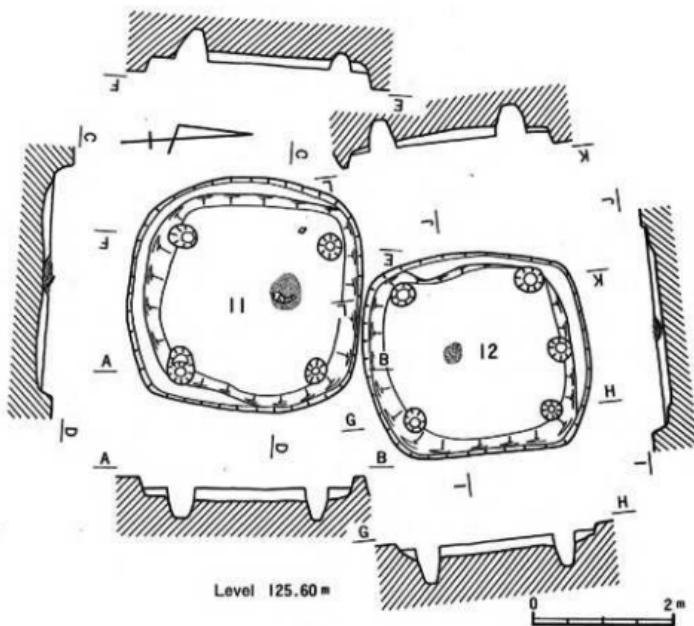
第13図 竪穴住居跡 09・17 実測図

遺物は上述の例や、竪穴住居跡17埋土、掘り方内より1701～4等が検出されたが、いずれも小破片で検出量は少なかった。

竪穴住居跡 II (第14図、図版第10)

調査区東寄りの竪穴住居跡分布範囲の北辺に検出された小形住居跡である。胴張隅丸形で、床面構造は北辺に平坦部を有さないが、全体的にはB類として扱った。竪穴住居跡12と壁を接する状況であって、褐色ブロック土によって壁を補強してあることから、竪穴住居跡12より新しく構築されたとして良いものであった。床面は比較的堅固な貼り床がなされていた。炉は中央北寄りに50×40cm程の範囲で確認された。比較的焼土は薄かったが、焼土内には壺大型破片(1102)が押し潰された状況で検出された。柱穴は4本が検出された。径30～40cm、深さは40～50cmであった。北西隅の柱穴が浅く25cm程度であった。南東隅の柱穴は2段掘り状に掘られていた。

遺物は前述した1102の他に北西隅の床面上に1101等検出される等、他に比して多いと言えたかも知れないが、絶対量としては少なかった。



第14図 竪穴住居跡 I1・I2 実測図

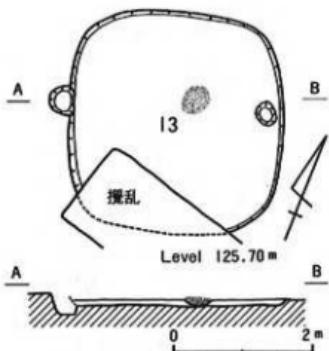
竪穴住居跡 I2 (第14図、図版第11)

竪穴住居跡I1の北側に壁を接して検出され、竪穴住居跡分布範囲の東列最北端に位置した。隔九長方形の 小形住居跡であった。床面構造は南東壁辺がC類的であったが、竪穴住居跡I1と同様にB類として扱った。床面は比較的軟弱で、炉は中央西寄りに確認された。範囲は25×20cm程を測る小規模のもので焼土も薄かった。柱穴は4本検出された。径30cm程で、深さは50cmを測って、深さが目立った。さらに、北列柱穴間に同規模の柱穴状ピットが検出された。

遺物は皆無に等しかった。

竪穴住居跡 I3 (第15図、図版第12)

調査区東寄りに竪穴住居跡09・17と竪穴住居跡I1の間に、それぞれ5m程離れて検出された胴張隔九形の 小形住居跡であった。検出面が浅いことから壁が削平されて、床面、および掘り方が残存するに過ぎなかった。床面は軟弱で、中央北東寄りに45×30cm程の範囲で炉が検出された。焼土は他に比して厚い状況であった。柱穴は認められず、埋土上より中世ピット、壁外に古墳期ピットが重複していた。



第15図 竪穴住居跡13実測図

堅固な貼り床がなされ、炉は中央西寄りに検出された。範囲は $50 \times 40\text{cm}$ 程を測り、堆積は厚かった。焼土内に細長い河原石が存在したが、炉石にしては小さく、不適當であった。柱穴を確認することはできなかったが、構築時より柱穴を有さなかったとは言えず、二重構造掘り方が深いことによって柱穴を検出できなかったとするのが妥当と言えた。

遺物は1401等の土器片が床面上、埋土等から検出されたが量的には少なかった。

竪穴住居跡15と竪穴住居跡19の床面断面を観察すると、重複によって除去されべき竪穴住居跡19の床面が残存して、その上部に竪穴住居跡15の床面が貼られており、北西壁が両竪穴住居跡に兼用されている状況から、それを連続した重複、すなわち「建替え」と判断した。

竪穴住居跡15・19は東半部の壁・床面を竪穴住居跡14によって削取され、さらに、トレンチ、掻乱によって西南辺も削取されて3分の1程を失っていた。形状は残存する壁、掘り方から胴張隅丸長方形が推測され、床面構造はB類であった。床面は両竪穴住居跡とも堅固な貼り床がなされていた。炉は中央西寄りに $80 \times 60\text{cm}$ の範囲で確認された。東辺を竪穴住居跡14によって削取されていることから、実質的な範囲は100cm程を測ったかも知れない。堆積は厚く、断面観察によれば、両竪穴住居跡に使用されていた。柱穴は径50~70cm、深さは50~60cm程を測って、竪穴住居跡15が4本、竪穴住居跡16が1本をトレンチによって削取されて3本が検出された。竪穴住居跡19の柱穴は一様に2段掘り的な形状を呈していて、建替えによるいわゆる「掘抜き穴」的な可能性も指摘された。

遺物は炉上部に1501が検出されたが、いずれも小破片で埋土、床面上、掘り方内より少量が検出されたに過ぎなかった。

竪穴住居跡18（第17図、図版第14）

調査区最西端に単独で検出された。もっとも隣接する竪穴住居跡07より20cm程離れて、しかも斜面を間におくことから、異なる単位に属する竪穴住居跡であるかも知れない。形状は胴張隅丸長方形、床面構造はB類で整った形状で、検出面より床面まで斜面側で約70cmを測る深い竪穴

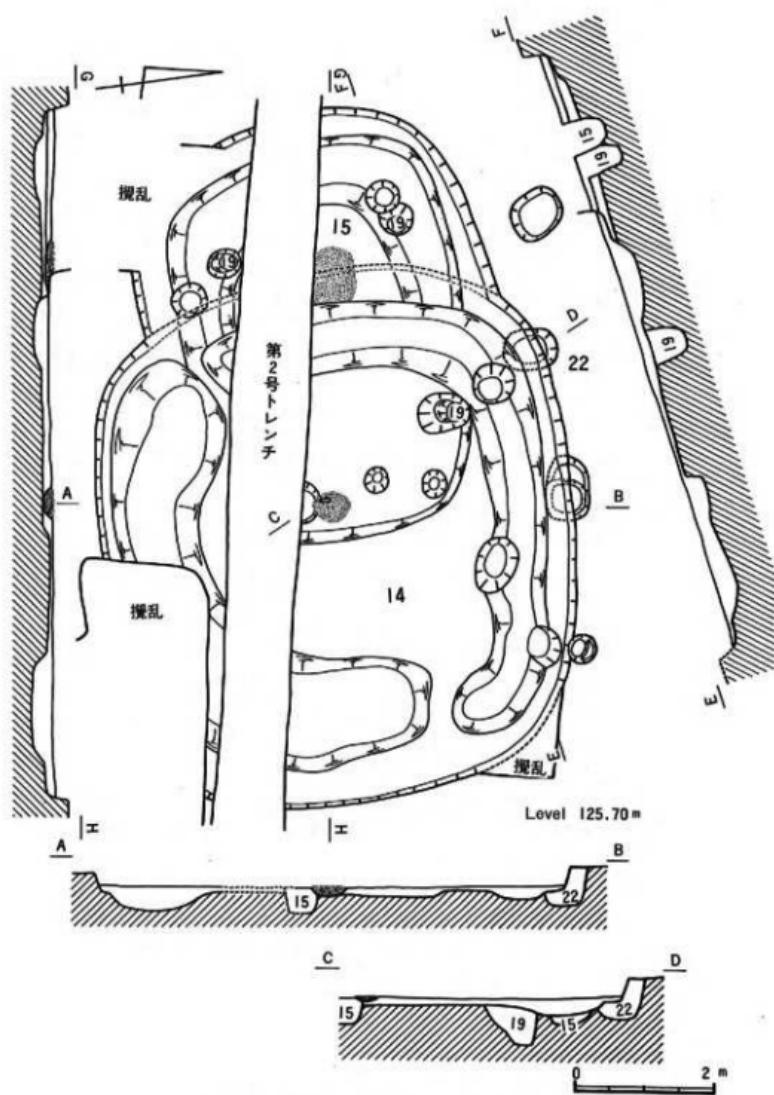
遺物は全く検出されなかった。

竪穴住居跡14・15・19

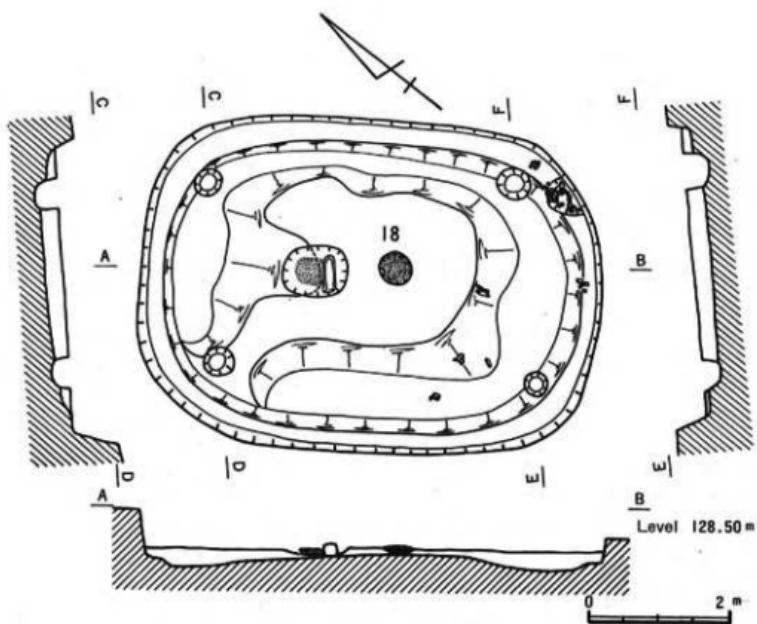
（第16図、図版第12）

調査区中央に竪穴住居跡3棟、掘立柱建物跡1棟が重複して検出された。中央をトレンチによって削取してしまい、さらに掻乱が広範囲に及んでいて、壁が削取されている部分が多くあった。新(→)旧関係は14→15→19、14→22であった。

竪穴住居跡14は床面積約50m²を測って、それは他住居跡より群を抜くものであって、いわゆる『大型住居跡』の特徴をそなえていた。形状は胴張隅丸長方形で、床面構造はB類であった。床面は堅



第16図 穂穴住居跡14・15・19実測図



第17図 豊穴住居跡 18 実測図

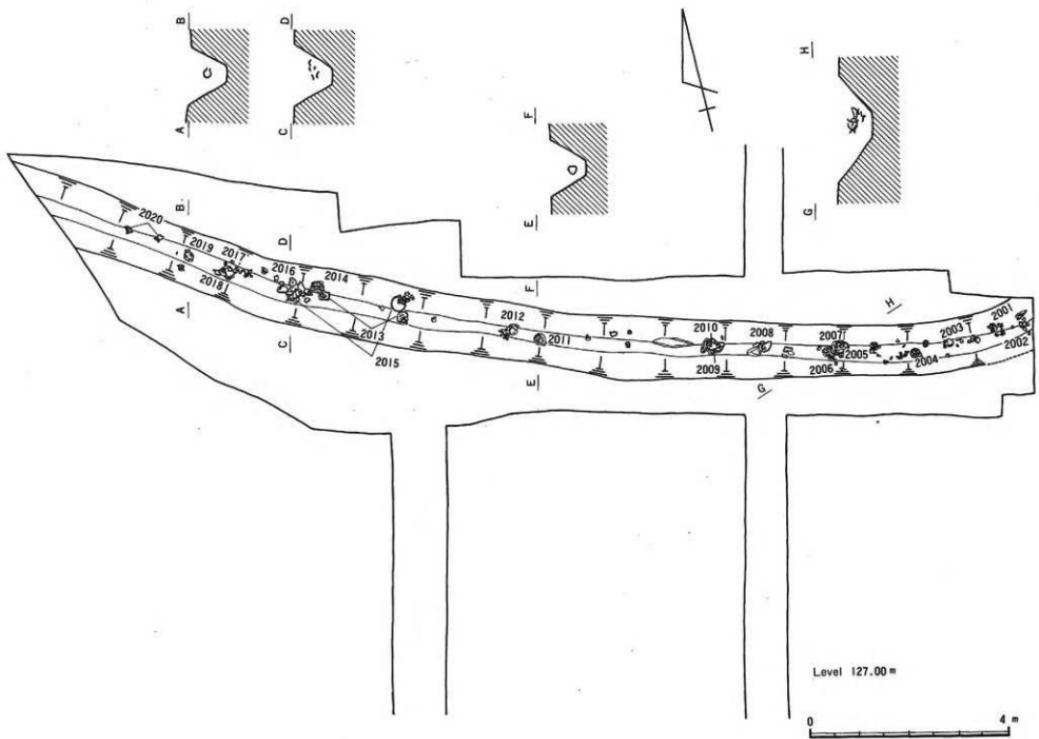
住居跡であった。床面は非常に堅固な貼り床がなされていたが、東南隅の柱穴付近には存在せず、壁際には径40cm程の皿状ピットが掘られて、ピット内部、及び周辺より壺、甕等の破片が集中して検出された。炉は中央部から北西寄りにかけて2箇所に確認された。中央部の炉は径40cmを測って、焼土は硬く厚かった。中央部北西寄りに確認された炉は90×70cm程の楕円形掘り方をもって、50×20cm程の四角柱礎1個が炉石として使用されていた。形状から砾石の再利用とも考えられたが使用痕はなかった。焼土は炉石より北西側に40×30cm程で堆積していたが、焼土は薄いものであった。柱穴は径40cm前後、深さ30cm程を測る4本が検出された。豊穴住居跡規模に比して柱穴規模は貧弱と言えた。

遺物は床面上、南東半部に土器片が検出された。前述した皿状ピット辺に集中的で、床面南東部に散在していた。1801~5等の壺、甕の大形破片、その他小破片であったが、他豊穴住居跡が皆無に等しい状況のなかでは異質であった。

② 溝状造構

溝状造構 20 (第18図、図版第17・18)

調査区最北端に検出された。もっとも隣接する掘立柱建物跡23まで約25m程の距離を隔てていた。その間約350m²程は、攪乱されて遺構の検出が不可能な地点もあったが、遺構は確認されな



第18図 溝状造構20実測図

かった。限られた調査区であったが、溝状遺構20付近には他の遺構は粗となるであろうことは言えて、単独的な存在であった。

規模は上場巾100~110cm、下場巾120~25cmを測り、溝底は平坦となった断面形「V」字状を呈していた。調査区内北端を東西方向に、若干北側へ彎曲しながら約20mが検出された。さらに、東西調査区外に延長することは確実であった。壁面はかなりの傾斜で直線的に褐色ローム層まで掘り込まれて、深さは検出面より80cm程を一樣に測った。したがって、地形傾斜が東へ低くなると同様に溝底レベルも西から東へ向って徐々に標高を減じていた。埋土は黒色スコリア土が主体で、下層に向かうにしたがって水分を含んで湿っぽくなる。黒色が一段と濃くなって粘性も富んでくることから、黒色有機質土内にスコリア粒子が混入した結果であったかも知れない。最下層には薄く褐色ブロック土を混えた黒色スコリア混入土が堆積していた。以上の埋土状況は砂質土はまったく確認されなかった。

遺物は土器が全てであったが、その全てが溝底より10~20cmに浮いた状況で検出された。明確な土層堆積状況下ではなかったが、土器検出レベル下の埋土は前述した湿り気を帯びた黒色スコリア土であった。

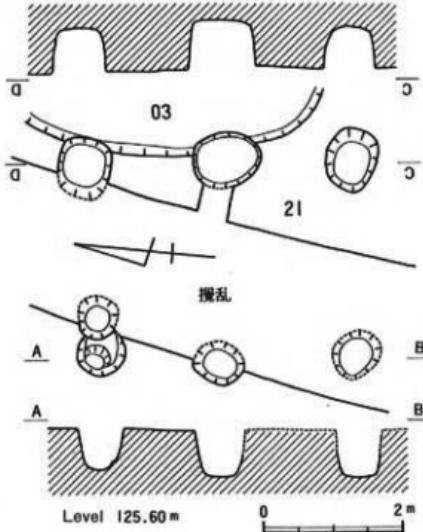
土器は壺・甕に限られて、土器溜り状に多量に検出され、その数30個体以上に及んだ。検出状況は粗密の差はあるが、1m程の間隔をもって、廃棄、もしくは配置されたようにも見られた。検出された土器には完形品は無かった。

③ 堀立柱建物跡

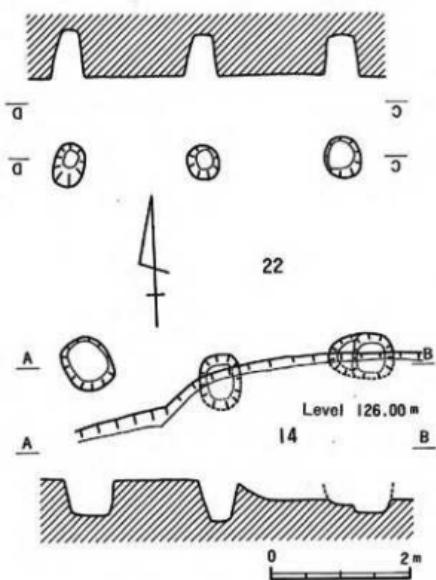
堀立柱建物跡21

(第19図、図版第15)

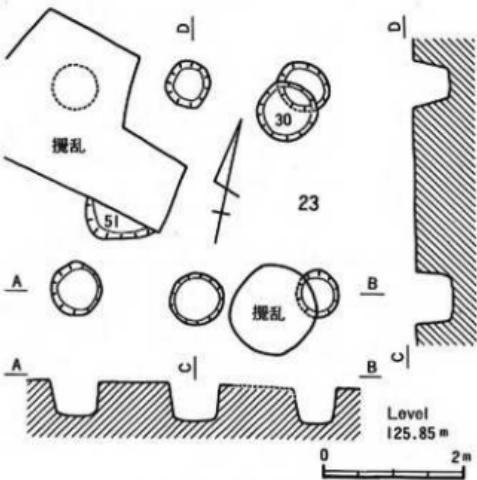
竪穴住居跡03の西壁に重複して検出された。新旧関係は堀立柱建物跡21が新しいものであった。中央に擾乱溝が走っていたが、掘り方下部が検出されて、間口2間×奥行1間の堀立柱建物跡であると判明した。柱穴は東列が太く、径70~90cm、深さ60~70cm程を測って、円形に近い方形を呈していた。西列は擾乱によつて平面形を捉えにくいくともあったが、径70cm程が推測されて規模は東列より若干貧弱にみえた。深さは同様であつて、断面形には一様に「U」字状を呈していた。棟向はほぼ南北にとつて、間口380cm、奥行270cmを



第19図 堀立柱建物跡21実測図



第20図 挖立柱建物跡 22 実測図



第21図 挖立柱建物跡 23 実測図

測った。間口柱間は北側より東列が200cm+180cm、西列が180cm+200cmであった。西列北柱穴に古墳時代ピットが内側に重複していた。柱穴内より遺物の出土は無かった。

掘立柱建物跡 22

(第20図、図版第15)

豊穴住居跡14の北壁に重複して検出された。新旧関係は掘立柱建物跡22が古いものであった。間口2間×奥行1間で、棟向はほぼ東西にとっていた。柱穴は豊穴住居跡14との重複もあったが、南列の規模が大きく、掘立柱建物跡21同様の構造を示した。規模は径70~90cm、深さ50~60cm程度を測って、円形に近い方形を呈していた。南列東柱穴は掘り抜き穴とも思われる二段掘りがなされていた。

北列柱穴は径50cm前後、深さ50~70cm程度を測って、方形よりも円形に近い形状であった。断面形は規模にとらわれることなく「U」字形を呈していた。建物規模は、間口400cm、奥行290cmを測って、間口柱間は南北列とも200cm+200cmであった。南列中柱が若干外側へずれ気味であった。柱穴内より遺物の出土は無かった。

掘立柱建物跡 23

(第21図、図版第16)

調査区中央北寄り、溝状遺構20を除けば検出遺構群の最北端に検出された。北列西柱穴を擾乱によって失なっているが、間

口2間×奥行1間の掘立柱建物跡と認めた。柱穴は径70cm前後、深さは50~60cmを測って、断面形は「U」字状であった。平面形は円形に近い。棟向はほぼ東西にとり、建物規模は間口350cm、奥行290cmを測った。間に柱間は南列で175cm+175cmであった。南列東柱穴が若干擾乱され、北列東柱穴に歴史時代円形土塹30が重複していた。遺物は南列西柱穴内より甕胴部破片が1点検出された。

④まとめ

月の輪上遺跡-B地区-に検出された弥生時代後期後半遺構について、ほぼ連続して古墳時代初頭末まで當なまれた月の輪平遺跡の集落分析に基づいて、比較対照してみたい。

豎穴住居跡について

月の輪上遺跡-B地区-で得られた豎穴住居跡を月の輪平遺跡で知れた豎穴住居跡規模にあてると、規模の確認されるなかで、大型住居跡1棟（遺構番号14-以下略）、一般住居跡12棟（01-05・07-09・11-13・15・19）、小豎穴遺構1棟（06）となる。月の輪平遺跡規模比率は大型住居跡1：一般住居跡9：小豎穴遺構2となり、一般住居跡数に若干の差をもつが、激しい重複によって規模が不定の住居跡が20棟程存在しており、しかも残存する壁、床面から一般住居跡が想定されることから、豎穴住居跡の規模別有り方は大過ないものと思える。

さらに、一般住居跡内においても小形住居跡の存在が指摘されて、規模が確認される34棟中、14棟が存在し、分布的には集落の外縁部に集中するものであった。これを助長するように、小範囲の発掘調査であったが月の輪上遺跡-A地区-では小形住居跡4棟のみが検出された。月の輪上遺跡-B地区-では14棟中、4棟（08・11-13）が認められ、比率的に同様の数値を示し、調査区中央北寄りから東辺にかけて、それらによって構成される1群を認めることができる。この

| 遺構番号 | アーチメント | （ ）解説 | ピット | 地盤 | 床面 | 壁面の 重複現象 (%) | 備考 | |
|------|-----------|--------|---------|--------|-----|--------------------|-----|----|
| | | | | | | | | |
| 1 | 530×265 | 25.1 | 須丸・長方形 | X-57-E | 4/5 | 3 | 2 | 有 |
| 2 | — | (須丸) | — | X-67-E | 1/3 | 2 | — | — |
| 3 | 635×341 | 25.5 | 須田須丸長方形 | X-67-E | 定番 | 4 | 1~3 | 無 |
| 4 | 535×460 | 25.7 | 須田須丸長方形 | X-57-E | 定番 | 2/3 | 3 | — |
| 5 | 535×457 | 25.8 | 須田須丸長方形 | X-67-E | 定番 | 4~1 | 無 | 無 |
| 6 | 235×(249) | 15.2 | 須田須丸長方形 | X-67-E | 2/3 | — | 無 | C |
| 7 | 1440×230 | 17.2 | 須丸・長方形 | X-57-E | 3/4 | 2 | — | 無 |
| 8 | 200×251 | 7.2 | 須丸・長方形 | X-67-E | 定番 | 1 | 無 | C |
| 9 | (200)×495 | (27.2) | 須丸・長方形 | X-67-E | 6/5 | 4 | 2 | — |
| 10 | 625×432 | 26.5 | 長方形 | X-67-E | 定番 | 無 | カット | — |
| 11 | 330×217 | 16.1 | 須田須丸長方形 | X-57-E | 定番 | 1 | 無 | B |
| 12 | 300×277 | 8.6 | 須丸・長方形 | X-57-E | 定番 | 1 | 無 | B |
| 13 | (180)×295 | (9.1) | 須田須丸長方形 | X-57-E | 4/5 | 無 | 無 | A? |
| 14 | 732×647 | 18.8 | 須田須丸長方形 | X-67-E | 4/5 | — | 有 | B |
| 15 | (400)×483 | (28.9) | 須田須丸長方形 | X-67-E | 1/2 | 3 | 有 | B |
| 16 | — | — | 須田須丸長方形 | — | 柱穴 | 3 | 有 | B |
| 17 | — | — | 須田須丸長方形 | — | 柱穴 | 4 | 有 | B |
| 18 | — | — | 須田須丸長方形 | — | 柱穴 | 4 | 有 | A? |
| 19 | 639×454 | 29.0 | 須田須丸長方形 | X-67-E | 定番 | 1 | 無 | 無 |
| 20 | — | — | — | 柱穴 | 4 | 無 | — | — |

第2表 豊穴住居跡計測表

状況は明らかに小形住居跡が、一般住居跡と区別されるべき機能・役割をもっていた可能性を指摘できるものであって、それとともに、1集落内における豎穴住居跡規模別分布の有り方にも同比率を示すことは、小形住居跡の結果もふまえて、居住空間が必然的にそうならざるを得ない何らかの事証、いわゆる居住人員数の差だけでは片付けられない問題が密んでいるように思える。

豎穴住居跡の形状は胴張隅丸形が10棟（03～06・11・13～16・18）、隅丸形が6棟（01・02・07～09・12）、他は形状を把握されない状況であったが、方形は皆無であった。したがって、胴張隅丸形が主体を占めた。月の輪平遺跡では隅丸形が主体となって、胴張隅丸形、方形が存在していた。豎穴住居跡規模にあてると、胴張隅丸形は概して大形住居跡が多く、隅丸形は普遍的であり、方形は小形住居跡に多く、規模、形状が似かよる傾向にあって、重複関係、出土土器等から胴張隅丸形が古い段階に、方形が新しい段階に位置することが知れた。この状況は従来の知見と矛盾しないものであって、月の輪上遺跡-B地区一の弥生時代後期後半の時期設定のなかで豎穴住居跡形状は妥当であった。

豎穴住居跡は一様に『床面の二重構造』をもって構築されていた。床面の二重構造については前述したA・B・C類があつて、月の輪平遺跡ではC類が33棟と多く、A類21棟、B類22棟と両類に差はなかった。これを豎穴住居跡規模にあてると、A類は小形～大型住居跡まで分散的で、B類は概して大形、大型住居跡に、C類は小豎穴遺跡、小形住居跡に多く、豎穴住居跡形状ではA類に隅丸形が、B類に胴張隅丸形が、C類に方形が、一様ではないが傾向としてあげられた。床面構造による新旧関係は重複住居跡が多かったこともあって明確にされなかったが、それでも床面の二重構造B類が古い段階に位置したであろうことは予想された。

月の輪上遺跡-B地区一ではA類3棟（05・13・17）を認めたが確実な資料は05だけである。B類10棟（02～04・07・11・12・14～16・18）、C類4棟（01・06・08・09）、他は不明であり、B類が圧倒している。A類は検出数が少なく確実でないが、推測される範囲内では大形～小形と巾広い。B類は主体を占めることもあって、小形～大形住居跡まで分散され、C類は大形住居跡も含まれるが、一般にはやはり小形住居跡に多い傾向をみることができる。

したがって、両遺跡の対照から、胴張隅丸形住居跡は古い段階に位置して、床面の二重構造はB類が施されたと理解され、それから新しい段階に向うに従い、豎穴住居跡形状は隅丸形→方形へ、床面の二重構造はA類→C類へ、豎穴住居跡規模は大型・一般・小形・小豎穴→大型住居跡の消滅、方形住居跡の床面積20m²前後の規模均一化と、一様ではなく徐々に段階をもって変移していくものと考えられる。

炉の有無を検討できる豎穴住居跡は14棟であり、そのうち11棟に炉が確認された。炉を有さない豎穴住居跡3棟は05・06・08で、それらは06に小豎穴遺構が想定され、08は06に次ぐ小面積を測るもので、05は焼土はなかったが、炉石らしきものを有しており、住居跡機能を備えるものであった。占地は06が遺構外縁に05に付随する形で、08が他豎穴住居跡間に距離を隔てて単独で位置し、床面には日常使用された痕跡は認められなかった。月の輪平遺跡で炉の有無による検討は重複の激しい状況で問題を多く残したままであったが、炉を有さない小形、小豎穴遺構はやはり

日常使用された痕跡はなく、集落外縁に点散して、集落全体に対応する状況から貯蔵・収藏施設等の機能をもつ可能性が指摘された。同様の性格を有するであろう遺構は、月の輪上遺跡-B地区一において充分に高床倉庫が想定される掘立柱建物跡と併立する状況となったが、そこには形態の異なる貯蔵物・収藏物を考えてさしつかえないように思える。

炉石の有無による新旧関係は両遺跡とも不明確な部分が多いが、月の輪上遺跡でも指摘されたように、併存する可能性が強いと言えよう。ただ、月の輪上遺跡-B地区一において炉石を有する03・07・18の3棟は、規模は大形で、胴張隅丸形プラン、床面構造B類と共に通した竪穴住居跡構造を指摘できる。また、炉石は竪穴住居跡長軸に対して直交し、炉が長軸上を左右に奥まって配置されると、その反対側、すなわち壁に遠くなる側に設置される共通性をもつ。これは月の輪上遺跡にも指摘されたが、03の炉に對向するピットを梯子穴に想定すると、炉石側に出入口を想定できるかも知れない。

他に入口施設を検討できるものではなく、竪穴住居跡外縁部にピットは確認できなかった。さらに、竪穴住居跡内部施設は柱穴以外に確認されるものはほとんどなく、いわゆる『ベット状遺構』に類する遺構の確認もなかった。

掘立柱建物跡について

月の輪上遺跡-B地区一に得られた掘立柱建物跡は、調査区中央を南北に3棟が列状となって位置していた。3棟とも間口2間×奥行1間の形状を呈して、21が南北棟、22・23が東西棟であった。柱穴規模はいずれも径60~80cm、深さ50~80cmを測り、規模、形状とも近隣の沼津市目黒身遺跡（小野 1970）、同藤井原遺跡（沼津市教育委員会 1978）、静岡市登呂遺跡（日本考古学協会編 1954）等に対比され、いずれも高床倉庫、ならびに準ずる機能を想定することから、検出されたこれらの掘立柱建物跡も高床倉庫の可能性を認めてよからう。

月の輪上遺跡にも2棟（1棟は整理途上で確認された）の掘立柱建物跡が確認されている。掘立柱建物規模は間口1間×奥行1間、柱穴規模は30~50cm、深さ20~30cmを測り、それは月の輪上遺跡-B地区一に検出された中世掘立柱建物形状、規模に類似するものであった。さらに、類似例を近隣に求めると、富士市天間沢横道下遺跡（富士市教育委員会 1979）に高床倉庫として、前述藤井原遺跡に倉庫として認めるものがある。両遺跡とも掘立柱建物跡内外に特別な記述はないが、月の輪上遺跡では第1号掘立柱建物跡周辺に焼土跡、小堆群が、第2号掘立柱建物跡と想定した柱穴間内部に高杯・器台・S字状口縁台付甕等、限られた器種が集中して配置され、それは特殊であった。概して間口1間×奥行1間の掘立柱建物跡は貧弱であって、間口2間×奥行1間の掘立柱建物跡に高床倉庫が設定されると、同様の上屋構造を想定するには躊躇され、月の輪上遺跡例からも機能の違いを予想せねばならぬかも知れない。

しかし、いずれの掘立柱建物跡も竪穴住居跡群によって形成される内部に位置し、検出数も限られた状況であり、竪穴住居跡群を大きく集落として取らえた時、それは集落全体に対応する機能を有していたであろうことは想定される。また、月の輪上遺跡-B地区一に検出された3棟の掘立柱建物跡は棟向きに差はあるものの、15m程の間隔をもって、ある規則性を見い出せ、集落

構成のなかに小形住居跡、小竪穴遺構をあわせて、それらのなかでも重要性、規格性は高い存在であったと考えられる。

溝状遺構について

弥生時代後期後半における溝状遺構の検出は富士宮市にとって初例であった。溝状遺構の性格については集落の区画、あるいは防禦施設、さらに排水路等が想定されるが、不明な点も多々ある。ここでは古墳時代初頭例まで含めて、近隣遺跡に検出された溝状遺構についてみると、多くは土器溜りの如く多量の土器を出土することで共通する。形状については断面形がおよそ「V」字状を呈して、平面ラインに乱れがない直線的な例、つまり月の輪上遺跡-B地区一、沼津市藤井原遺跡・目黒身遺跡・御幸町遺跡（沼津市教育委員会 1979・80）・浜松市伊場遺跡（浜松市遺跡調査会 1975）、遠く埼玉県日の森遺跡（埼玉県児玉郡美里村教育委員会 1978）等と、断面形は舟底状を呈して、平面ラインには直線的な面をもたず、遺構全般に乱れをもって途切れてしまう富士市天間沢横道下遺跡、田方郡函南町向原遺跡（小野他 1972）等に分られるが、後者については不明の点が多く、形状、形態からすれば、おのづから前者との性格の違いは指摘される。

藤井原遺跡に検出された溝状遺構は、遺構群南側外縁を直線的に南東→北西に走っている。西端部で竪穴住居跡と重複するが、それより新しく、溝状遺構と対応するらしい遺構群より20~30m程離れている。性格については遺跡が標高0.7~1.4mの低地に存在すること、溝状遺構内に砂質層が含まれること等から排水路として考えられ、出土遺物が溝底より浮いた状態は、ある程度埋没後、廃棄されたものとしている。目黒身遺跡では第1・2号排水溝と個称され、第1号排水溝が西ブロック、南ブロックとされた中間に約10~20m程離れて東西に走り、約100m強が検出されている。御幸町遺跡は約90m強が竪穴住居跡と重複して東西に走り、當時水が流れていた痕跡はないが、排水施設に類した指摘がされている。伊場遺跡では環濠形態をなして、やはり竪穴住居跡群より30m程離れた外縁を巡る。遺物の出土状況も同様であるが、確実に環状となる点で、藤井原遺跡、目黒身遺跡、御幸町遺跡とは性格の差があるかも知れない。日の森遺跡では全体図がないため不明な点も多いが、竪穴住居跡群より約200m程離れて検出され、溝状遺構が大溝に合流する地点、さらに、大溝内より多数の杭列が確認され、それを堰、しがらみの痕跡として認め、藤井原遺跡同様に排水路を想定して、出土遺物も半分位埋没後、廃棄されている。しかし、いわゆる集落との関係は不明な点が多く、藤井原遺跡、目黒身遺跡、御幸町遺跡が集落に対する防災的排水路であるなら、日の森遺跡は生産を目的とした排水路として理解せねばならぬ。その場合、集落より約200m程離れた溝状遺構への遺物廃棄の行為をどのように理解したらよいのであろうか。

月の輪上遺跡-B地区一に検出された溝状遺構は上述遺跡と同様の形状、形態をもつものであるが、検出長がわずかであることから飛躍はできない。確認されることは杭列、砂質層は認められず、これには占地条件の差もあるであろうが、いずれにしても當時、水が流れていたとは思われない。さらに、構築場所はひろく月の輪上遺跡をとらえた場合、遺跡中央の馬の背状に高まっ

た場所、つまり分水嶺となる部分を縦断する形となって、水利に関する可能性は極めて少ないと言わざるを得ない。また、溝状遺構が若干はあるが、月の輪上遺跡-B地区一に背を向けて彎曲している状況は、それが部分的であったにせよ、月の輪上遺跡-B地区一に対応するものか否かは現状で把握できないものであり、対向して存在するであろう遺跡群を考えたとき、環濠的性格も肯定されるが、現状では集落の区面、防禦施設、あるいは排水施設等として、大きく『溝』本来の性格をあてておくにとどめておきたい。いうならば『溝』の機能が薄れはじめると、多量の土器が一時でないにしろ投棄（廃棄）される行為に対して何らかの意味を考えねばならぬであろう。

（馬飼野）

（2）歴史時代

月の輪上遺跡-B地区一の歴史時代遺構は竪穴住居跡1棟、掘立柱建物跡6棟、いわゆる円形墓とされる円形土塚跡22基が検出された。

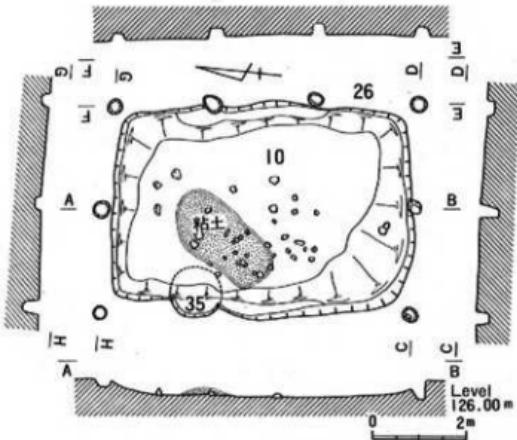
① 竪穴住居跡

竪穴住居跡10（第22図、図版第9）

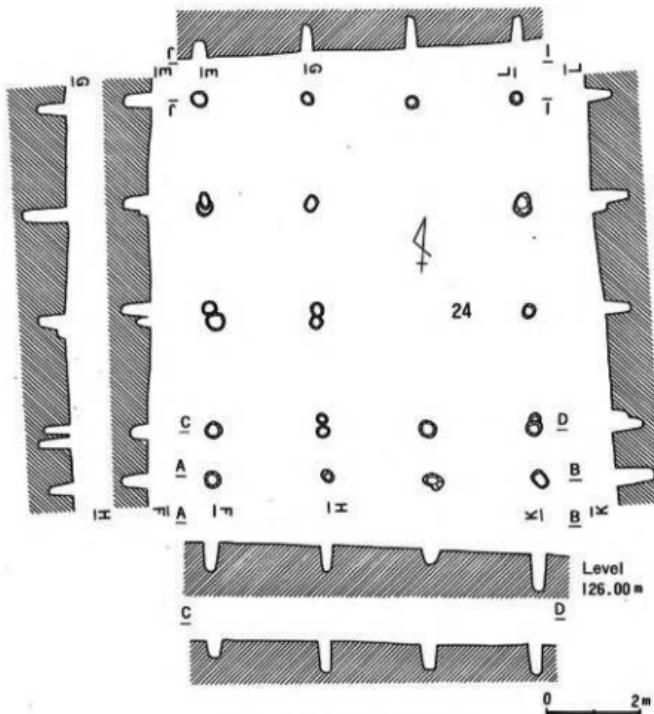
竪穴住居跡10は調査区中央東寄りに掘立柱建物跡26と重複し、掘立柱建物跡24・28に挟まれて検出された。調査途上では弥生時代遺構として扱ったが、埋土の状況が弥生時代遺構とは別で、むしろ歴史時代遺構と同様であり、構造的にも差異が認められるため歴史時代遺構とした。

規模は613×432cm、床面積約26.5m²を測り、形状は長方形に近いが壁は乱れていた。長軸方位はN-6°-Wを示し、ほぼ南北にとっていた。床面は軟弱で貼り床等の構築法はなされず、壁から緩やかに下って舟底状を呈していた。床面上には30個程の拳大の礫が散在しており、中央部から北西にかけて黄灰色の粘土が20~30cm程の厚さをもって流出していた。粘土内、および付近に焼土、灰等の確認はなかつたため明確ではないが、カマドの流出とも思えた。柱穴は竪穴内には検出されず、棟向が同様で壁に接するよう掘立柱建物跡26が検出され、西側列の確認はなかったが、同一遺構の可能性も指摘された。西壁北寄りに円形土塚跡35と重複するが、それより古い段階に構築された状況が伺えた。

遺物は埋土内より中世陶器、糸切り底をもつ土師器底部片、さらには弥生土器



第22図 竪穴住居跡10・掘立柱建物跡26実測図



第23図 挖立柱建物跡 24 実測図

等が検出された。

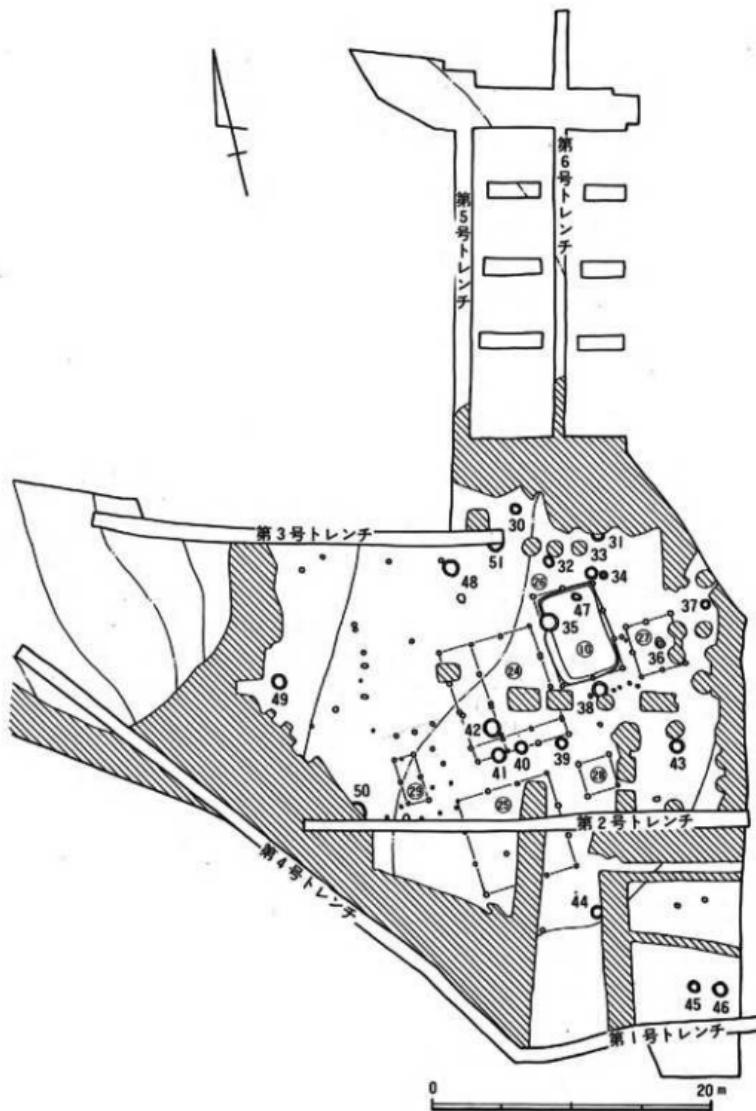
② 挖立柱建物跡

掘立柱建物跡 24（第23図）

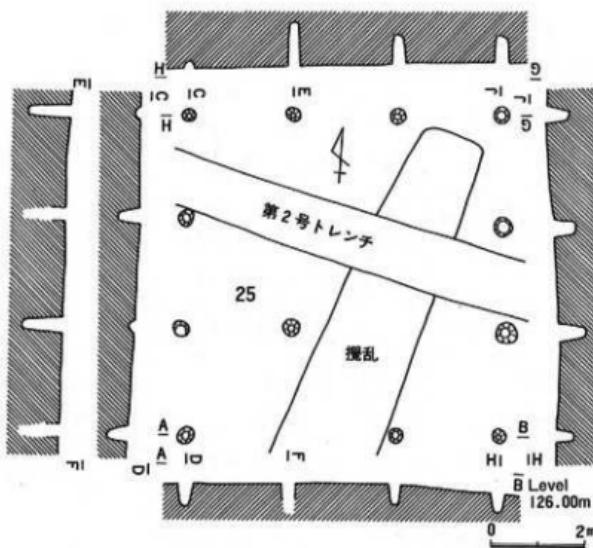
調査区中央に検出された。棟方位N-6°-Wを示す。桁行4間×梁間3間であるが、身舎と推される部分は桁行3間×梁間2間と思われ、南と西の両面に扉が想定され特異な形状となる。全長は桁行長810cm×梁間長700cmを測った。柱穴規模は径25~40cm程で、深さは30~90cmと差があるが、全体的にみると身舎柱穴が深く、廊柱穴が浅く感じた。柱間は220cmを基本間とするが、一部に10~20cm程長くなる箇所があった。西廊の柱間は同様であったが、南廊の柱間は110cmが基本間であった。

柱穴は重複によるものか「8」字状を呈するものが目立つことから、これを掘り抜き穴とするか、2棟の重複にするか判断に迷う面もあったが、一応、ここでは1棟として扱った。

遺物は2柱穴より鉄釘が検出されるとともに、他柱穴からも土師器片、弥生土器片等の細片が少量検出されたが、確實に伴なう資料は鉄釘のみと言えた。



第24図 歴史時代遺構全体図



第25図 挖立柱建物跡 25 実測図

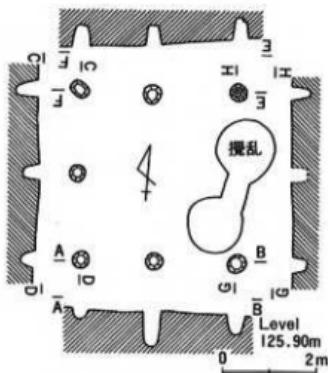
掘立柱建物跡 25（第25図）

掘立柱建物跡24の南側に検出された。第2号トレンチ、および擾乱溝によって2柱穴を削除されているため棟向は明確にできなかったが、残存する柱穴から西、または南側に扉が想定され、したがって、棟方向はN-4°-Wか、N-86°-Eを示すこととなる。規模は桁行3間×梁間3間で、西、南いずれかを扉として、身舎は桁行3間×梁間2間が想定された。全長は桁行長680cm×梁間長670cmを測って、柱間は220cmを基本間として一部に5~10cm程長くなる箇所があった。柱穴規模は径25~40cm程で、深さは15~90cmを測って差をもっていた。掘立柱建物跡24に指摘されたように、扉柱穴が浅いことと、西側柱穴列が浅いことから西扉である可能性もあり、棟向は南北に想定されるかも知れない。

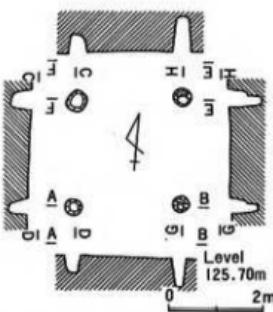
遺物は西南隅柱穴埋土より弥生土器の底部破片が検出されたが、掘立柱建物跡に伴なうであろうものは皆無であった。

掘立柱建物跡 26（第22図、図版第9）

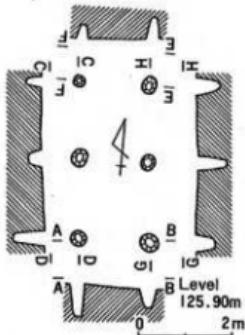
掘立柱建物跡26は前述したように、竪穴住居跡10と重複して検出され、同一遺構の可能性も指摘されるものであった。西側柱穴列が確認されず躊躇するが、棟方位はN-6°-Wを示し、竪穴住居跡10と同様で、規模は桁行3間×梁間2間となり、桁行長660cm×梁間長440cmを測って、柱間は桁行、梁間とも220cmを基本間としていた。柱穴規模は径30~40cm程で、深さは20~40cmを測って、他掘立柱建物跡に比して深い形状であった。



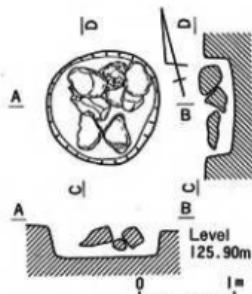
第26図 挖立柱建物跡 27 実測図



第27図 挖立柱建物跡 28 実測図



第28図 挖立柱建物跡 29 実測図



第29図 円形土塙 42 実測図

遺物は竪穴住居跡埋土内より中世陶器、土師器片、弥生土器片等が検出されたが、掘立柱建物跡26とした柱穴内には検出されなかった。

掘立柱建物跡 27（第26図）

竪穴住居跡10、掘立柱建物跡26に東側に隣接して、掘立柱建物跡群最東端に検出された。規模は桁行2間×梁間2間であるが、東側列中柱穴が擾乱によって削除されていた。全長は桁行長360cm×梁間長340cmを測って、棟向は南北が想定され、N-4°-Wを示した。柱間は桁行が180cm、梁間が西より160cm+180cmであった。柱穴規模は径40cm前後、深さは30~70cmを測って差があったが、南側列西柱穴を除けば比較的整っていた。遺物は皆無であった。

掘立柱建物跡 28（第27図）

掘立柱建物跡25の東側に隣接して検出された。規模は桁行1間×梁間1間で、桁行長が230cm、梁間長が220cmとなり、棟向を東西とする可能性があった。とすればN-85°-Eとなる。柱穴規模は径35~40cm程度で、深さは40~70cmを測って、東側柱穴が深かった。その東側柱穴には掘り抜き

穴と思われる段掘りがなされていた。遺物は皆無であった。

掘立柱建物跡 29 (第28図)

掘立柱建物跡群最西端に検出された。竪穴住居跡05の埋土内に重複することから、検出は困難であつて、周辺にも柱穴群が相当数検出されたが、建物形状を呈するとして認めた。したがつて、不確定要素は多分にある。棟方位はN-5°-Wを示し、規模は桁行2間×梁間1間、全長は桁行長340cm×梁間長160cmを測った。柱間は桁行が北より160cm+180cm、梁間が160cmであった。柱穴規模は径20~40cm程で、深さは30~70cmを測って、東側列が比較的整っているのに対して、西側列が不整いであった。遺物は皆無であった。

③ 円形土塙

調査区の中央から東寄り、すなわち平坦部分一面に22基が検出された。形状は円形を呈して、径80~120cm程、深さは検出面より5~60cm程を測った。遺物は皆無であった。

円形土塙 42 (第29図、図版第16)

調査区中央に検出された。径120×117cm、深さ60cmを測った。塙内には底面より10cm程浮いて、拳大から人頭大の礫8個が内包されていた。その状況は塙内を覆う形となっていた。遺物はなかった。隣接する円形土塙41にも同様の礫2個が内包されていた。

④まとめ

月の輪上遺跡-B地区一に検出された歴史時代遺構は竪穴住居跡1棟、掘立柱建物跡6棟、円形土塙22基であった。竪穴住居跡10と掘立柱建物跡26の関連性は不明であり、類例を待ちたい。

掘立柱建物跡について

掘立柱建物跡群は明確な伴出遺物をもたなかつたため、大きく歴史時代遺構としてとらえたが、竪穴住居跡10内出土土器類をあてることができれば、平安時代の終り頃が予想される。

規模は桁行1間×梁間1間から、扇をもつ桁行4間×梁間3間まで巾をもち、柱間は220cmと基本間とする掘立柱建物跡24・25・26・27と、180cmを基本間とする掘立柱建物跡28・29に2類される。棟向は南北棟が多く方位はN-4°~6°-Wを示し、唯一の東西棟であろう掘立柱建物跡27もN-85°-Eを示して、棟向に類似性をもち、おそらく1時期、もしくはそれに準ずる所在であったことが想定される。

円形土塙跡について

市内各所の遺跡を発掘調査すると、必ずといって良い程検出される普遍的な遺構で、本市では遺物が検出されない特徴をもつ。時期的には重複関係から掘立柱建物跡群より新しい段階に所在したことは確実であつて、近隣の富士市、駿東郡長泉町等では方形の土塙も検出されて、内部には人骨片、六文銭、かわらけ等が遺存することから中世~近世にかけての墳墓跡である把握が一般化している。月の輪上遺跡-B地区一例もそれらに準じておきたい。

(馬飼野)

2 遺 物

(1) 繩文時代

月の輪上遺跡は富士宮市遺跡地名表（富士宮市教育委員会 1979）によると、縄文時代・古墳時代遺跡として把握されている。本調査によって弥生時代後期に瀕ることが確認されたことから修正の必要があろう。

縄文時代の内容は早期、前期、中期の土器片とともに石鏃、磨石等が得られている。

本調査では縄文時代包含層の追求のため、調査区一帯に第1～6号トレンチを設定し、黄褐色地山層まで発掘したが、確認することはできなかった。しかし、竪穴住居跡05の壁面、すなわち、本地域における縄文時代中期～後期包含層である栗色土層中に1点の打製石斧を得たことは、月の輪上遺跡-B地区一帯に縄文時代包含層が存在することは確実であり、分布調査によれば、本調査区より南東付近に散布するらしい。

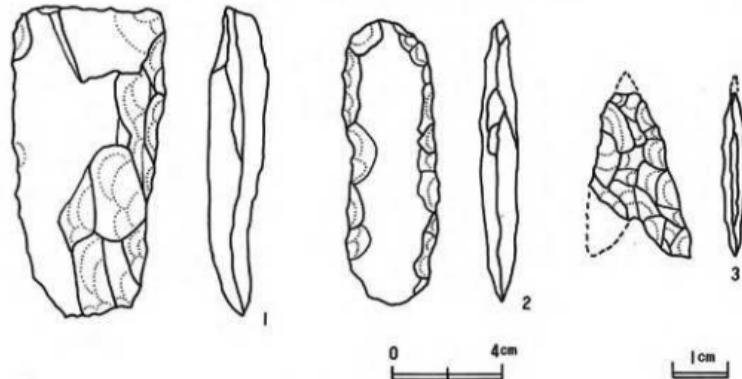
本調査では打製石斧2、打製石鏃1を得た。

打製石斧1は竪穴住居跡05壁面の栗色土層中より検出された。短冊形を呈して基部を欠損している。片面に自然面を多く残す。残存長10.8cm、巾5.3cm、厚さ2.0cm、重さ152gを測り、比較的入念な加工がなされている。石材は砂岩系である。

打製石斧2は表採品である。完形で短冊形を呈している。刃部は弧状を呈して磨滅している。片面には自然面を多く残し、入念に加工されている。長さ10.2cm、巾3.3cm、厚さ1.3cm、重さ61gを測る小形品である。石材は硬質砂岩である。

打製石鏃3は竪穴住居跡10埋土より検出された。黒曜石製の凹基無茎鏃で、先端部と片側脚部を欠く。残存長3.0cm、残存巾1.6cm、厚さ0.4cm、重さ0.95gを測る。比較的入念な加工がなされ、剥離は基部と先端部から行われて斜辺に最終剥離面が観察される。

（馬飼野）



第30図 縄文時代石器実測図

(2) 弥生時代

本調査によって得られた弥生時代遺物は壺、甕等の土器類と、竪穴住居跡04床面より検出された土製勾玉であった。

①土器類

() 現存

| 土器番号 | 器種形 | 器體高 (cm) | 特徴 | 調査・文様 | 備考 |
|------|-----------|--------------------------|--|---|------------------------|
| 0101 | 甕 D | 12.2 (5.0) — | 胎土 細かな砂粒を含む 焼成 普通 色調 <器表>淡茶褐色 <器里>青灰色 | 外面 口唇部ヨコハケメ、口縁部～胴部主にタテ のハケメ (10本／1cm) 内面 口縁部ヨコハケメ、胴部ヨコのナデ | 1／6存 スス全面付着 掘り方内 |
| 0301 | 壺 D | 17.6 (2.6) — | 胎土 砂粒を多量に含む 焼成 あまり良くない 色調 (淡) 桜褐色 | 外面 折返し部一部オサエ、口縁部タテハケメ後 ヨコナデ 内面 ヨコハケメ (8本／1cm) 後ヨコのナデ | 1／6存 北西隅燒土内 |
| 0302 | 無蓋 壺 | 15.2 (3.0) — | 胎土 砂粒をかなり多く含む 焼成 普通 色調 <器表>淡茶褐色 <器里>淡青灰色 | 外面 タテハケメ後主にタテミガキ、折返し部オ サエ 内面 口縁部ヨコミガキ、頭部ヨコハケメ (10本 ／1cm)、胴部ヨコのナデ | 1／6存 掘り方内 |
| 0303 | 台付 甕 D | 16.3 (5.6+5.7) — | 胎土 細かな砂粒をかなり多く含む 焼成 普通 色調 (明) 茶褐色 | 外面 主にタテハケメ (6本／1cm) とナデ? 胴下半部右下リナメハケメとタテハケメ 内面 ヨコハケメ後ヨコのナデ | 1／4存と1／6存 外面ス付着 |
| 0401 | 壺 D | 15.0 (1.4) — | 胎土 細かな砂粒を多量に含む 焼成 あまり良くない 色調 <器表>淡黄褐色～淡桜 色 <器里>淡青灰色 | 外面 亂あれ、口唇部タテハケメ痕 内面 亂あれ | 1／6存 掘り方内 L.R |
| 0402 | 壺 D | 13.8 (2.7) — | 胎土 砂粒をかなり多く含む 焼成 普通 色調 <器表>(淡) 桜褐色 <器里>淡青灰色 | 外面 折返し部ヨコのナデ、口縁部タテハケメ (8本／1cm) 文様 口縁部内面に1段の糸繩文 | 1／6存 床面 |
| 0901 | 台付 甕 - | — — — | 胎土 小石を混じて砂粒を多量に含む 焼成 あまり良くない 色調 <表>淡黄褐色 <裏>橙褐色 | 外面 タテハケメ 内面 胴部ヨコハケメ (8本／1cm)、台部乱あれ | ピット中 二次加熱あり |
| 1001 | 壺 - | — (2.7) 10.0 | 胎土 細かな砂粒をかなり多く含む 焼成 あまり良くない 色調 <器表>淡桜褐色 <器里>淡青灰色～淡桜 褐色 | 外面 亂あれ、底面木葉痕 内面 亂あれ | 完存 |

第3表 弥生土器個体説明(1)

| 土器番号 | 器形 | 径 成 立 高 度 (cm) | 特徴 | 調整・文様 | 備考 |
|------|-----------|-------------------------------|---|---|--------------------------|
| 1002 | 壺 - | — (2.2) 10.6 | 胎土 微細な砂粒を多量に含む 焼成 あまり良くない 色調 <器表>淡棕褐色 <器壁>(淡)青灰色 | 外面 肌あれ、一部タテハケメ痕 内面 肌あれ | 1/4存 覆土内 |
| 1101 | 台付 甕 - | — 13.3 (6.3) | 胎土 小石を混じえた砂粒を多く含む 焼成 普通 色調 <表>茶褐色 <裏>暗黃褐色 | 外面 ほりが浅いタテハケメ 内面 ヨコハケメ(9-10本/1cm)後タテミガキ | 一部欠 覆土内 外面スス一部付着 |
| 1102 | 壺 - | — (14.6) | 胎土 粗かな砂粒を多量に含む 焼成 あまり良くない 色調 <器表>淡棕褐色 <器壁>青灰色 | 外面 肌あれ、タテハケメ痕 内面 肌あれ、ヨコハケメ痕 | 1/3存 外面削下半スス付着 焼土内 |
| 1401 | 台付 甕 - | — (3.9) 12.6 | 胎土 粗かな砂粒をかなり多く含む 焼成 あまり良くない 色調 暗黄褐色-淡黄褐色 | 外面 端部ヨコハケメ後タテハケメ(7本/1cm) 内面 ヨコハケメ | 1/2存 床面 |
| 1501 | 壺 E | 15.0 (3.5) | 胎土 粗かな砂粒を多量に含む 焼成 あまり良くない 色調 <器表>淡棕褐色 <器壁>淡青灰色 | 外面 肌あれ、タテハケメ痕あり 内面 肌あれ、ヨコハケメ痕あり | 1/4存 か上面 |
| 1701 | 壺 E | 9.6 (3.9) | 胎土 粗かな砂粒をかなり多く含む 焼成 あまり良くない 色調 <器表>(淡)棕褐色 <器壁>淡青灰色 | 外面 タテハケメ 内面 ヨコハケメ(8本/1cm) | 1/4存 掘り方内 |
| 1702 | 甕 D | — 11.2 (3.2) | 胎土 粗かな砂粒をかなり多く含む 焼成 普通 色調 <表>淡茶褐色 <裏>(淡)棕褐色 | 外面 口縁部タテのハケメ、胴部ナナメのハケメ (6本/1cm) 内面 口縁部ヨコハケメ、接合部ヨコヘラ、胴部ヨコのナデ | 1/8存 外面スス一部付着 覆土内 |
| 1703 | 台付 甕 - | — (7.6) 10.6 | 胎土 小石を混じて砂粒を多量に含む 全容 焼成 普通 色調 茶褐色 | 外面 台部端部ヨコハケメ→台部タテハケメ→接合部補強土のナデツケ 内面 底部肌あれ(ヨコハケメ痕)、台部ヨコハケメ | 1/2存 スス一部付着 掘部 |
| 1704 | 台付 甕 - | — (4.0) 10.8 | 胎土 粗かな砂粒をかなり多く含む 焼成 あまり良くない 色調 <表>暗黄褐色 <裏>棕褐色 | 外面 タテハケメ(5本/1cm) 内面 ヨコハケメ | 1/3存 覆土内 |

第4表 弥生土器個体説明(2)

| 土器番号 | 器種・器形 | 口縁部径(cm) | 特徴 | 調査・文様 | 備考 |
|------|-----------|-----------------------|--|--|------------------------------|
| 1801 | 壺 D | 23.9 (2.3) — | 胎土 細かな砂粒を多量に含む 焼成 あまり良くない 色調 〈器表〉淡橙褐色 〈器壁〉淡青灰色 | 多面 肌あれ、折返し部ヨコ、口縁部タテのハケメカ(11本/1cm) 内面 肌あれ 文様 折返し部下端に刻み目(ハケメと同一原体) | 1/4存 覆土内 |
| 1802 | 甕 D | 21.0 (10.3) — | 胎土 細かな砂粒をかなり多く含む 焼成 あまり良くない 色調 〈器表〉黄褐色 〈器壁〉淡赤灰褐色 | 外面 肌あれ(タテハケメ?) 内面 肌あれ(ヨコハケメ?) | 1/4存 |
| 1803 | 甕 D | 22.7 (7.0) — | 胎土 細かな砂粒をかなり多く含む 焼成 普通 色調 淡茶褐色～淡茶褐色 | 外面 口唇部～口縁部ヨコ→口縁部タテ→胴部ヨコのハケメ 内面 口縁部ヨコハケメ(16本/1cm)、胴部ナデ? | 1/4存 外面ス一部付着 |
| 1804 | 広口 壺 | 12.65 (16.85) — | 胎土 細かな砂粒をかなり多く含む 焼成 良好 色調 黄褐色 | 外面 頸部右下にナナメハケメ後頸部～胴部中位タテのみがき、胴部下位ヨコのミガキ 内面 口頭部ヨコのミガキ、胴部粗いヨコミガキ? | 口縁部3/4存 |
| 1805 | 壺 — | — (2.2) 8.6 | 胎土 細かな砂粒をかなり多く含む 焼成 普通 色調 〈器表〉暗橙褐色 〈器壁〉(淡)暗灰色 | 外面 タテミガキ 内面 肌あれ | 1/4存 覆土 |
| 2501 | 大型 壺 — | — (2.7) 18.8 | 胎土 細かな砂粒をかなり多く含む 焼成 あまり良くない 色調 〈器表〉淡黄褐色～淡棕褐色 〈器壁〉淡黄灰褐色～淡青灰色 | 外面 タテハケメ(10本/1cm)、底部木葉痕 内面 ヨコハケメ | 1/4存 |
| 2001 | 平底 甕 D | 21.0 18.9 10.4 | 胎土 細かな砂粒を多量に含む 焼成 あまり良くない 色調 〈器表〉淡黄褐色～淡棕褐色 〈器壁〉赤灰色 | 外面 口唇部ヨコハケメとナデ、口縁部～胴部上位弱いタテハケメ(11本/1cm)→中位右下りナナメハケメ→下位ヨコのヘラ、底部タテのヘラ 内面 ヨコハケメ(9本/1cm)後粗いヨコミガキ | 口縁部2/3存 外面ス一部付着 二次加熱あり |
| 2002 | 甕 D. | 26.4 (16.9) — | 胎土 細かな砂粒を多量に含む 焼成 普通～やや良 色調 〈器表〉表赤灰色 裏黄灰色 〈器壁〉暗赤灰色 | 外面 口唇部ヨコ、口縁部～胴部上位ナナメ→中位ヨコのハケメ(8本/1cm) 内面 ヨコハケメ(口縁部8本/1cm(何回か重ねたため?)、胴部5本/1cm(上位はりが深い、中位はりが浅い)) りが浅い) | 1/2弱存 胴部ス付着 |
| 2003 | 壺 E | 8.2 14.4 6.5 | 胎土 細かな砂粒をかなり多く含む 焼成 あまり良くない 色調 〈器表〉表淡棕褐色 裏淡黄褐色 〈器壁〉青灰色 | 外面 肌あれ、頭部タテハケメ(11本/1cm) 内面 胎部ヨコハケメ、胴部下位タテハケメ 口縁部ヨコハケメ、肩部～胴部オサエ、 胴部下位ヨコハケメ | 胴部1/3欠 |

第5表 弥生土器個体説明(3)

| 土器番号 | 器形 | 傳 形 | 口縁 径 (cm) | 保 持 性 (cm) | 特 徴 | 調 整 ・ 文 様 | 備 考 |
|------|-----------|--------|---------------------------|---------------------|--|---|---|
| 2004 | 壺 E | | 19.0 (12.9) | 胎土 燒成 色調 | 細かな砂粒を多量に含む <器表>黄褐色 <器壁>淡青灰色~青灰色 | 外面 口縁部ヨコまたはナナメ、頭部タテのハケメ(12本/1cm)の後タテのミガキ 内面 口縁部ヨコハケメ、肩部オサエ 文様 肩部外面1段以上、口縁部内面羽状に2段の斜繩文 | 頭部完存 肩部LR 口縁部外側RL 内側LR |
| 2005 | 壺 C | - | 26.3 (21.6) | 胎土 燒成 色調 | 細かな砂粒をかなり多く含む (サビ色の夾雜物を混じえた) あまり良くない <器表>(淡)黄褐色 <器壁>淡青灰色 | 外面 折返し部オサエ、 口縁部~肩部主にタテハケメ(7~8本/1cm) 内面 口縁部~肩部上位ヨコハケメ、中位肌あれ? 下位ヨコハケメ | 1/3存 口縁部~肩部スースー 部付着 外面に凹凸あり(肌あれ) |
| 2006 | 呑付 壺 D | | 18.7 25.4 10.2 | 胎土 燒成 色調 | 小石を混じて砂粒を多量に含む あまり良くない <器表>暗黄褐色~暗橙褐色 | 外面 口唇部ヨコハケメ、口縁部タテ~肩部上位 中位ココ→下位タテのハケメ(8本/1cm) 内面 口縁部ヨコのハケメ、口縁部と肩部の接合部 オサエ、肩部ヨコのミガキ 台部ヨコのハケメ 文様 口唇部に刻み目 | 肩部スス全面付着 |
| 2007 | 壺 - | | — (27.1) | 胎土 燒成 色調 | 細かな砂粒のみを含む 良好なもの 普通 | 外面 頭部タテミガキ、頭部ヨコミガキ 内面 頭部ヨコミガキ、頭部肌あれ下位ヨコハケメ(10本/1cm) 文様 肩部外面羽状に3段の斜繩文、間に2段の 無文帯をはさむ、繩文2段目に棒状浮文 (1本×4)を加える | 頭部3/4存 上段LR 中段LR 下段LR |
| 2008 | 壺 E | | 16.6 (17.6) | 胎土 燒成 色調 | 細かな砂粒をかなり多く含む あまり良くない <器表>(表)黄褐色 (裏)淡黄褐色 | 外面 口頭部タテハケメの後タテミガキ、肩部上位ナナメミガキ 内面 口縁部ヨコハケメ→ヨコミガキ、頭部オサエ 文様 肩部ヨコハケメ(8本/1cm)カナリ凹凸あり 口唇部刻み目、頭部外面工具に横位に押捺した沈線1条と1段の擬繩文 | 頭部完存、肩部半存 |
| 2009 | 呑付 壺 D | | 19.8 29.3 11.4 - | 胎土 燒成 色調 | 小石を混じて砂粒をかなり多く含む あまり良くない <器表>(表)黄褐色~(裏)茶褐色 | 外面 口唇部ヨコ、口縁部タテ~肩部ナナメ~タテのハケメ(8本/1cm) 内面 肩部下位の各所にナナメあり。口縫上位タテ+下位ヨコのハケメ 文様 口縫部ヨコハケメ→肩部ナナメ凹凸あり 内面 口縫部ヨコハケメ~肩部ナナメ凹凸あり 文様 口唇部刻み目 | 頭部1/4存、脚部完存 |
| 2010 | 壺 D | - | 16.9 (16.7) | 胎土 燒成 色調 | 小石を混じて細かな砂粒を多量に含む あまり良くない (明)茶褐色 | 外面 口唇部ヨコハケメの後ナナメ 口縫部タテ~肩部上位~中位ヨコから右下りにナナメ→下位タテのハケメ 内面 肩部ナナメ後タテハケメ 内面 口縫部ヨコハケメ、肩部上位~中位ナナメ(?) ←下位ハケメ | 1/2弱存 |
| 2011 | 壺 - | | — (22.8) | 胎土 燒成 色調 | 細かな砂粒を多量に含む 普通~やや不良 (表)暗黄褐色だから1/3 ほど淡橙褐色 (裏)(淡)黄褐色 | 外面 頭部~肩部下位タテミガキ (頭部ヨコハケメ痕あり) 内面 頭部タテミガキ、頭部ナナメハケメ(7~8本/1cm)、底部ヘラミガキ 文様 頭部ヨコのハラ調整?頭部と肩部の接合部 ヨコハラ、肩部上位ナナメ、中位肌あれ 下位ヨコハケメ(7本/1cm) 内面 口縫部内面羽状に2段の斜繩文 上位中央内面浮文(3綱1ヶ所、2綱以上2ヶ所以上) | 2/3存 上段LR 下段L ^{r+1} |
| 2012 | 壺 - | | — (28.1) | 胎土 燒成 色調 | 砂粒を多量に含む あまり良くない <器表>淡橙褐色 <器壁>青灰色 | 外面 口縫部タテハケメ、頭部、肩部上位右下りナナメハケメ(6本/1cm) 内面 口縫部ヨコハケメ、肩部上位肌あれ、肩部下位ヨコハケメ 文様 肩部外面羽状に2段の繩文、上部に円形浮文(2綱×4)、頭部~肩部上位外面赤形 口縫部内面1段の斜繩文、赤形 | 略完存 上段LR 下段RL |

第6表 弥生土器個体説明(4)

| 土器 番号 | 器 種形 | 目 盛 底 径 (cm) | 特 徴 | 調 整 ・ 文 様 | 備 考 |
|----------|-------------|--------------------------|--|---|--|
| 2013 | 壺 - | — (26.9) 8.4 | 胎土 砂粒を多量に含む 焼成 あまり良くない 色調 <表>淡黄褐色～淡橙褐色 <裏>淡青灰色 | 外面 頭部ナナメハケメ後タテのヘラ調整、胴部上位タテ中位ヨコ→下位タテのハケメ(5本×1cm)の1枚羽状下位にヨコの粗い、 内面 リガキ、直面ノフ羽状 文様 口縁部ハケメ、頭部ナデ→ヨコハケメ、 底部ウズ巻状ハケメ、底面一方方向のハケメ 肩部外表面羽状に3段の擬織文(8本×1cm、 ハケメ原体と同一)、円形浮文(3個×3) | 胴部スヌ一部付着 |
| 2014 | 甕 D | 21.6 (17.0) — | 胎土 粗かな砂粒を多量に含む 焼成 普通～やや不良 色調 淡黄灰色 | 外面 口縁部ヨコ→頭部ナナメータテ→胴部ナナメータテのハケメ(9本×1cm)の後胴部下位にタチミガキ 内面 口縁部ヨコのハケメ、口縁部と胴部の接合部タテのナデ→胴部粗いヨコのヘラ調整 文様 口唇部削み目 | 胴部下位1/2弱欠 |
| 2015 | 壺 E | 18.5 32.0 10.4 | 胎土 粗かな砂粒をかなり多く含む 焼成 やや不良 色調 <器表>黄褐色 <器壁>青灰色 | 外面 口縁部タテハケメ後タチミガキ、胴部上位右下リナナメミガキ、下位ヨコミガキ、底面木葉痕 内面 頭部ノコハケメ痕、胴部下位ヨコハケメ(6本×1cm) 文様 胴部外表面1枚の斜織文、上端工具を横位に押捺した沈線1条、下端S字状結節文、円形浮文(4個×3) (外腹) 口唇部棒状浮文(6個×6) | 口縁部、胴部上位とも1/3欠 LR |
| 2016 | 壺 - | — 19.6 12.2 | 胎土 粗かな砂粒を多量に含む 焼成 あまり良くない 色調 <器表>淡黄褐色～淡橙褐色 <器壁>青灰色 | 外面 肌あれ、底面木葉痕 内面 肌あれ、胴部下位ヨコのハケメ(9本×1cm) | 胴部、1/2強存 |
| 2017 | 壺 - | — (13.2) — | 胎土 粗かな砂粒を多量に含む 焼成 あまり良くない 色調 <器表>淡茶褐色～暗茶褐色 <器壁>青灰色 | 外面 肌あれ、右下にナナメハケメ痕あり(10本×1cm) 内面 肌あれ、ヨコハケメ痕あり 文様 胴部外表面に羽状に4段の擬織文、上端に工具を横位に押捺した沈線1条、下端円形浮文(1個×4) | 頭部、1/2存 |
| 2018 | 無 頭 壺 | 12.3 13.55 5.65 | 胎土 粗かな砂粒をかなり多く含む 焼成 あまり良くない 色調 <表>淡茶褐色～暗茶褐色 <裏>暗茶褐色～黒褐色 | 外面 折返し部ヨコハケメ、胴部は上位タテ、中位ナナメ痕あり、下位タテのハケメ後右下リナナメミガキ 内面 口縁部～胴部上位にヨコハケメ後全面ヨコミガキ 文様 折返し部外表面に刻み目(ハケメ原体?) | 完形 |
| 2019 | 壺 - | — (24.1) 8.5 | 胎土 粗かな砂粒を多量に含む 焼成 あまり良くない 色調 <器表>淡黄褐色 <器壁>青灰色 | 外面 肌あれ、頭部タテハケメ(4本×1cm) 内面 肌あれ、頭部ヨコハケメ、底面木葉痕 文様 頭部ヨコハケメ 説明 胴部外表面、羽状に2段の織文で、ただしこだけ向方向 | 完存 上段 RL 下段 RL、一部 LL |
| 2020 | 壺 D | 16.9 (14.4) — | 胎土 砂粒をかなり多く含む 焼成 やや不良 色調 <器表>黄褐色 <器壁>青灰色 | 外面 口縁部ヨコハケメ(9本×1cm)後ヨコミガキ、同部ヨコミガキ 内面 口縁部ヨコハケメ後ヨコミガキ、胴部ヨコハケメ 文様 頭部～肩部外表面、羽状に5段の織文、下端に工具を横位に押捺した沈線1条、口縁内面に羽状に2段の織文、中央に円形浮文(1個×4?) | 口縫部1/3 胴部1/2存 頭部LR・RL・LR RL・LR 口縫部外側 RL 内側 LR |
| 2021 | 甕 D | 19.7 (15.4) — | 胎土 相かな砂粒を含むがあまり多くない 焼成 普通～やや不良 色調 (暗)黄褐色～(暗)橙褐色 | 外面 口縫部～胴部上位タテ～中位ヨコ、下位タテのハケメ(7～8本×1cm) 内面 ヨコのハケメ | 口縫部1/4存 口縫部凹凸あり |

第7表 弥生土器個体説明(5)

| 土器番号 | 器形 | 口径 深さ (cm) | 特徴 | 調整・文様 | 備考 |
|------|----------|---------------------|---|--|----------------------|
| 2022 | 台付 甕一 | — (5.6) 9.5 | 胎土 小石を混じえた砂粒を かなり多く含む 焼成 あまり良くない 色調 <器表>暗黄褐色 <器壁>暗緑褐色 | 外面 タテハケメ(9本/1cm重なりのため?) 内面 全体に肌あれ、ヨコハケメか? | 略完存 |
| 2023 | 壺 E | 18.4 (7.0) — | 胎土 細かな砂粒をかなり多 <含む> 焼成 あまり良くない 色調 <器表>淡黄褐色→淡橙 褐色 <器壁>淡青灰色 | 外面 タテハケメ(5~6本/1cm) 内面 ヨコハケメ 文様 口唇部矧み目、口縁部内面羽状に2段の繩文、S字状結節2条(上端と中央)と円形 浮文(2個×4?)を伴う | 1/3存 外側LR 内側RL |
| 2024 | 台付 甕一 | — (6.4) 8.8 | 胎土 細かな砂粒を多量に含む 焼成 あまり良くない 色調 <器表>淡黄褐色→淡橙 褐色 <器壁>(淡)青灰色 | 外面 肌あれ、台脚上位ナナメ、下位タテのハケメ (8本/1cm) 内面 接合部オサエ、台脚ヨコハケメ | 略完存 |
| 2025 | 壺 F | 15.6 (6.5) — | 胎土 細かな砂粒をかなり多 <含む> 焼成 あまり良くない 色調 <器表>淡橙褐色 <器壁>淡青灰色 | 外面 口唇部ヨコハケメ、口縁部肌あれ、タテハ ケメ痕あり(6本/1cm) 内面 口縁部肌あれ、ヨコハケメ痕あり 文様 口縁部内面赤彩痕あり | 1/2弱存 |
| 2026 | 台付 甕一 | — — — | 胎土 砂粒を多量に含む 焼成 あまり良くない 色調 (暗)黄褐色 | 外面 肌あれ 内面 肌あれ | 1/4存 |
| 2027 | 壺 D | 15.35 (9.5) — | 胎土 細かな砂粒をかなり多 <含む> 焼成 普通 色調 <器表>(暗)黄褐色 <器壁>淡青灰色 | 外面 口唇部ヨコハケメ、口縁部タテハケメ→頭 部ナナメハケメ→頭部タテミガキ 内面 口縁部ヨコハケメ(7本/1cm)→頭部ヨコ ミガキ 頭部と胴部の接合部ナデ? | 頭部2/3存 |
| 2028 | 壺 D | 15.9 (6.0) — | 胎土 砂粒を多量に含む 焼成 あまり良くない 色調 暗黄褐色 | 外面 折込部左下リナナメハケメ(7~8本/1cm) 内面 ヨコハケメ後ヨコミガキ 文様 口縁部内面に1段の斜繩文、下端にS字状 結節文 頭部内外面赤彩痕あり | 口唇部1/8存 RL |
| 2029 | 壺 E | 18.3 (11.0) — | 胎土 細かな砂粒を多量に含 む 焼成 あまり良くない 色調 <器表>淡橙褐色 <器壁>淡青灰色 | 外面 口唇部ヨコ?口縁部ヨコ 頭部タテのハケメ(8本/1cm) 内面 全体に肌あれ、口縁部ヨコのハケメ | 頭部2/3存 |
| 2030 | 壺一 | — (12.0) 7.8 | 胎土 細かな砂粒を多量に含 む 焼成 (やや)良好 色調 <表>淡茶褐色 <裏>青灰色 | 外面、胴部下位ハケメ(?)、底部タテのケズリの 後全周ヨコのミガキ 底面木葉痕後ハケメ 内面 胴部ナデ(かなり四凸あり)、胴下部ハケメ (8本/1cm) | 胴部2/3存 |

第8表 弥生土器個体説明(6)

| 土器番号 | 器種形 | 口縁底径(cm) | 特徴 | 調査・文様 | 備考 |
|------|-----------|----------------------|--|---|----------------|
| 2031 | 壺 F | 14.8 (2.55) — | 胎土 砂粒をかなり多く混じ る 焼成 普通～やや不良 色調 <器表>明黄褐色 <器壁>一部淡青灰色 | 外面 口唇部下りにナナメ、口縁部主に右下り にナナメのハケメ (9本/1cm) 内面 口縁部ヨコハケメ 文様 口唇部棒状浮文(1単位2本以上×?) | 1/8存 |
| 2032 | 壺 D | 15.4 (4.8) — | 胎土 細かな砂粒をかなり多く含む 焼成 あまり良くない 色調 <器表>淡黄褐色～淡橙褐色 <器壁>淡青灰色 | 外面 折返し部ヨコハケメロ頭部タテハケメ (8本/1cm) 内面 肌あれ、(ヨコハケメらしい) 文様 頭部外赤彩痕あり | 1/3弱存 |
| 2033 | 壺 D | 15.4 (4.0) — | 胎土 細かな砂粒をかなり多く含む 焼成 普通 色調 <器表>暗黄褐色 <器壁>淡黄灰色 | 外面 折返し部ナナメハケメ後一部ミガキ 口頭部タテハケメ(11本/1cm) 後タテミ ガキ 内面 ヨコのハケメ後ヨコのミガキ? | 1/3存 |
| 2034 | 台付 甕 - | — (6.4) 9.0 | 胎土 微細な砂粒を多量に含む 焼成 あまり良くない 色調 <器表>淡黄褐色～暗黄褐色 <器壁>(淡)青灰色 | 外面 台部上位主に右下りにナナメ→下位左下 リナナメのハケメ 内面 脊部肌あれ、台部上位肌あれ、下位ヨコハ ケメ | 完存 |
| 2035 | 台付 甕 - | — (4.5) 9.7 | 胎土 砂粒をかなり多く含む 焼成 あまり良くない 色調 <表>暗黄褐色 <裏>暗橙褐色 | 外面 右下りにナナメハケメ 内面 ヨコハケメ (5本/1cm) | 略完存 二次加熱あり |
| 2036 | — 甕 D | 19.8 (6.3) — | 胎土 微細な砂粒を多量に含む 焼成 あまり良くない 色調 <器表>淡橙褐色 <器壁>(淡)青灰色 | 外面 口縁部ナナメ→頭部タテ→脇部ヨコのハケ メ (7本/1cm) 脇部ヨコハケメ後タテハケメ (7本/1cm) 内面 肌あれ、口縁部ヨコのハケメ、脇部肌あれ 文様 口唇部丸み目 | 1/6弱存 |
| 2037 | 壺 - | — (11.6) 8.3 | 胎土 砂粒をかなり多く含む 淡灰色の夾雜物(粘土か?)を混じて 焼成 あまり良くない 色調 淡橙色～黃褐色 | 外面 脇部中右下りナナメハケメ、下位タテハケ メ (9本/1cm) →ヨコミガキ 内面 肌あれ、ヨコハケメ痕あり | 1/3存 スヌ一部付着 |
| 2038 | 台付 甕 - | — (7.6) 10.8 | 胎土 細かな砂粒をかなり多く含む (サビ色の夾雜物を混じて) 焼成 不良 色調 黄褐色 | 外面 タテハケメ (10本/1cm) 内面 ヨコハケメ (9本/1cm) | 略完存 |
| 2039 | 台付 甕 - | — (9.0) 10.3 | 胎土 細かな砂粒をかなり多く含む 焼成 あまり良くない 色調 <表>暗黄褐色 <裏>暗橙褐色 | 外面 タテ→右下りにナナメのハケメ (11~12本/1cm) 内面 底部ヨコハケメ? 古部ヨコハケメ | 1/3存 |

第9表 弥生土器個体説明(7)

| 土器番号 | 器種形 | 口縁高さ(cm) | 特徴 | 調整・文様 | 備考 |
|------|-----------|--------------------|--|---|--------------|
| 2040 | 白付 甕 - | — (8.2) 10.6 | 胎土 微細な砂粒を多量に含む 焼成 普通～やや不良 色調 暗茶灰色 | 外面 脊部タテハケメ、白部右下リナナメハケメ (7本/1cm) 内面 白部ヨコハケメ | 白部掘部3/4存 |
| 2041 | 壺 D | 15.6 (9.3) — | 胎土 砂粒を多量に含む 焼成 あまり良くない 色調 <器表>淡黄褐色～淡橙褐色 <器壁>黃灰色 | 外面 口縁部タテハケメ(8本/1cm)何回も重ねる 頭部タテハケメ 内面 口縁部頭部ヨコハケメ 口唇部剥み目 肩部外面、工具を横位に押捺した沈線1条 と羽状に3段の擬織文 口縫部内面1段の斜織文 | 頭部1/3存 LR |

第10表 弥生土器個体説明(8)

②土製勾玉

土製勾玉1点が竪穴住居跡04の南東隅床面上部より検出された。遺存状況は頭部中央で2分されて、約30cm程離れていたが、完形品であった。

計測値は長さ4.1cm、巾1.3cm、厚さ1.2cmで、断面形は方形の角がとれた、いわゆる胴張隅丸方形となっている。重さは9.1gを測る。

全体的な形状は頭部とする先端部から末端部に同様の巾をもって作られ、厚さは先端が若干末端部より厚い。湾曲度は外面より約5cm程の直径をもって湾曲するが、先端部に少なく末端部に近づくにしたがい湾曲度を増す。

胎土はサビ色の夾雜物を混じるが、微細な砂粒のみを含んでいる。焼成は普通で、色調は淡い黄褐色を呈している。

調整は不明な点も多いが、指頭等によってナデられているらしい。

穿孔は焼成前になされて、内径は0.35mmを測り、若干縦長である。

(馬飼野)

(3) 歴史時代

本調査によって得られた歴史時代遺物は竪穴住居跡10の埋土内、床面上を主体として、掘立柱建物跡柱穴内より若干検出された。量的には細片が20数片であり、資料的に満された状況とは言えなかった。

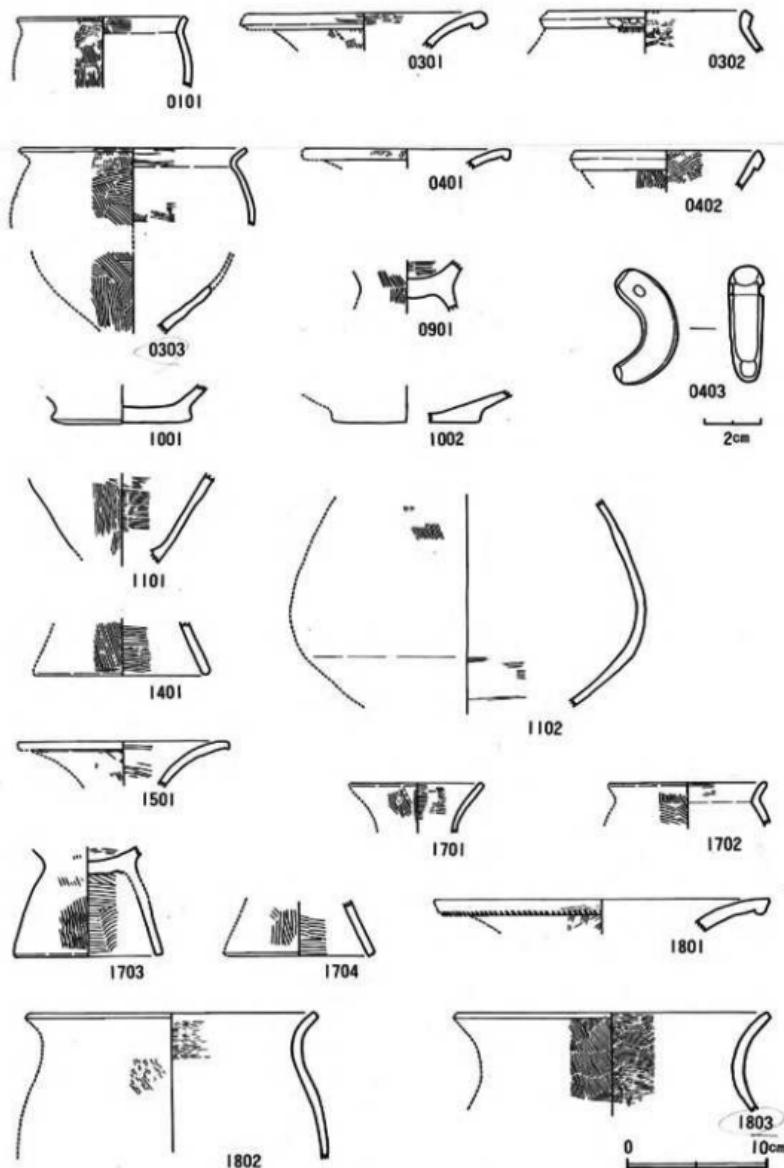
遺物は土師器、中世陶器と鉄釘等の鉄製品であった。

土師器は糸切り底をもつ壺底部破片であった。中世陶器は比較的量的にまとまっており、愛知県陶磁資料館の井上喜久男氏の御教授によれば、渥美の片口鉢の口縁部破片、常滑の片口鉢の口縁部破片、大妻の肩部破片、三筋壺底部破片等であり、時期的にははっきりしない部分も多いが12世紀末葉頃の所産と考えるのが妥当であろうと言う。

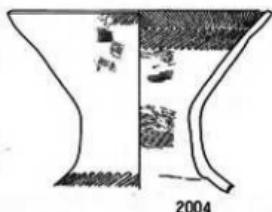
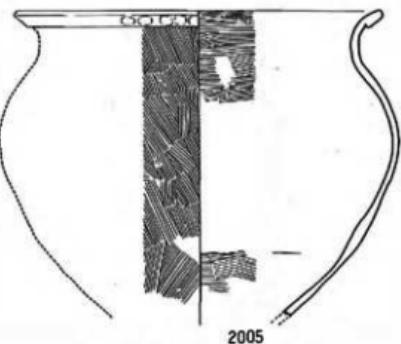
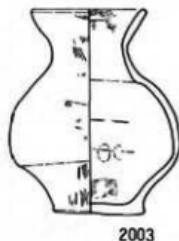
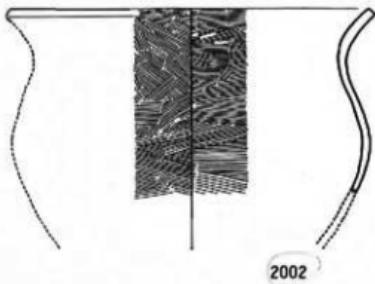
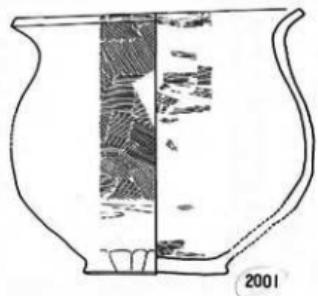
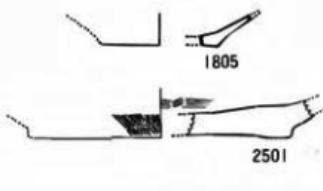
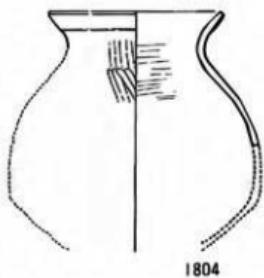
鉄釘は2点が検出され、1点は完形であった。頭部の形状から折曲頭形釘で、断面形は方形であった。長さは約10cm、巾は頭部に近い部分で0.7cmを測り先端に向って細くなっている。



第31図 鉄釘実測図

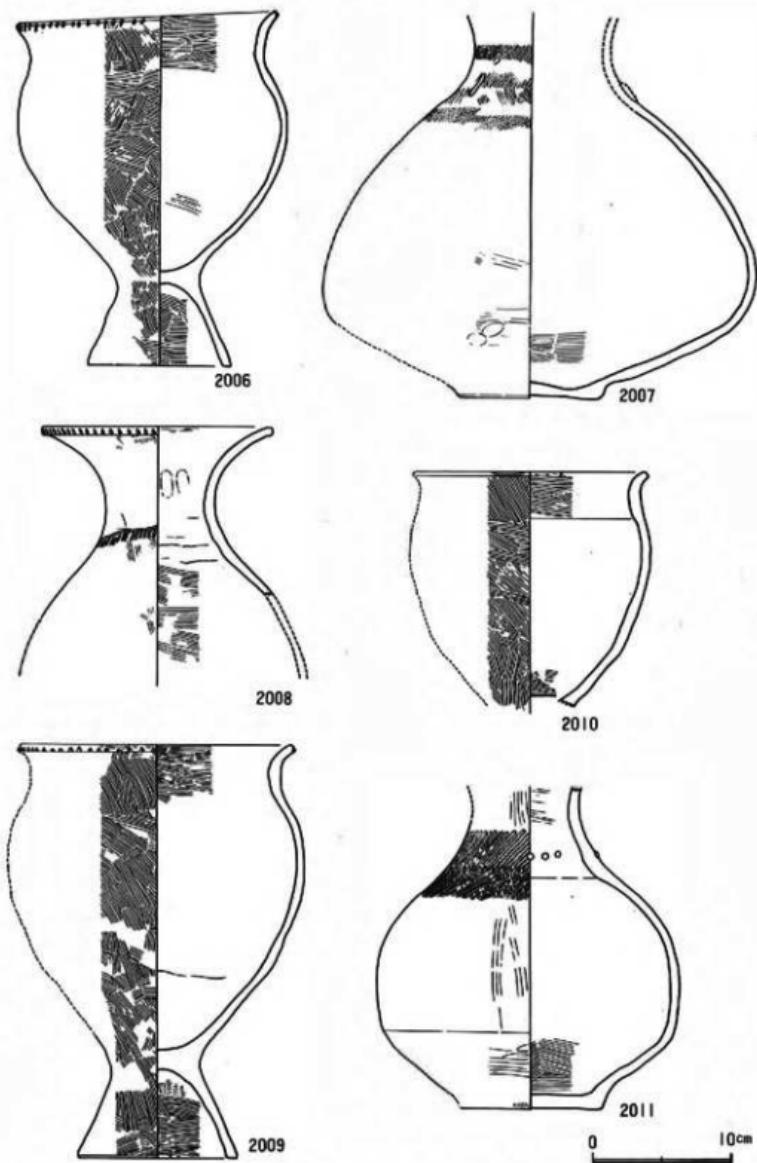


第32図 弥生土器実測図(1)

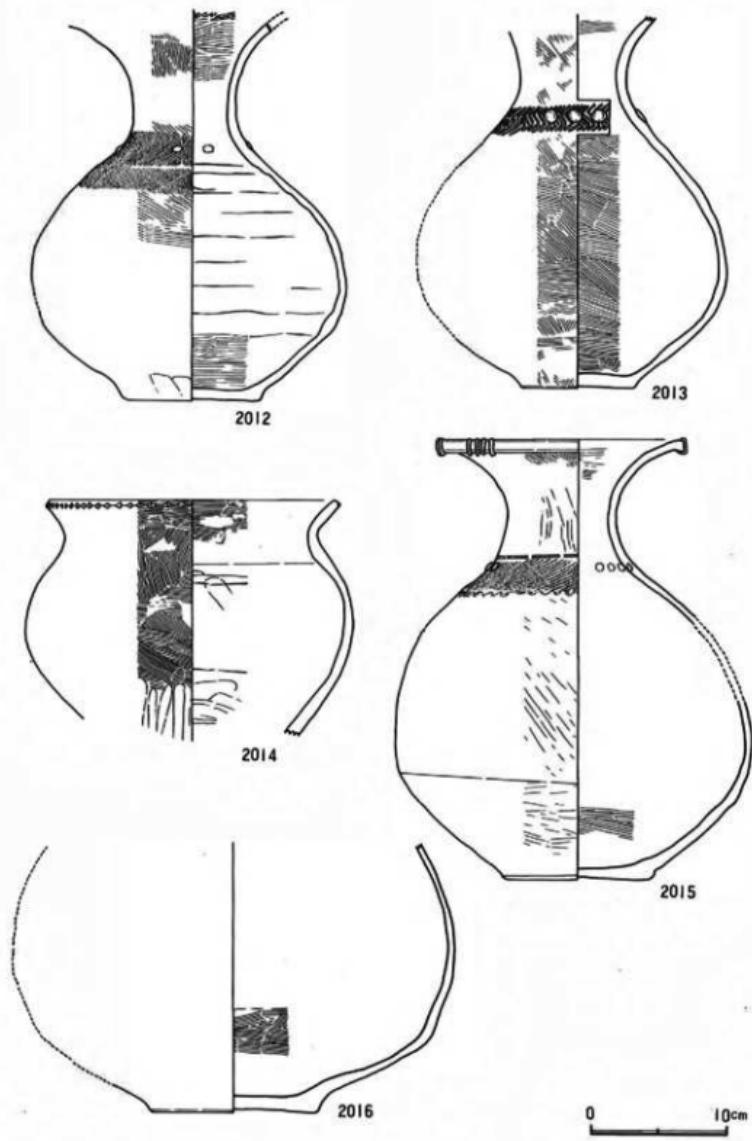


0 10cm

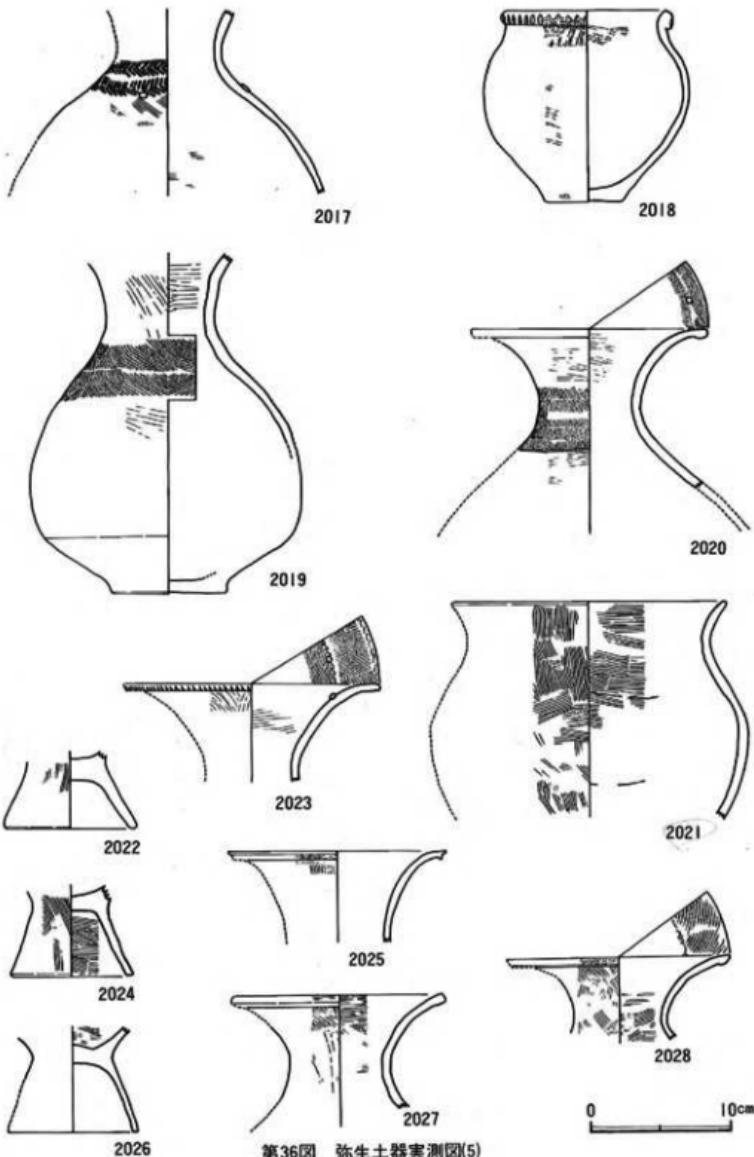
第33図 弥生土器実測図(2)

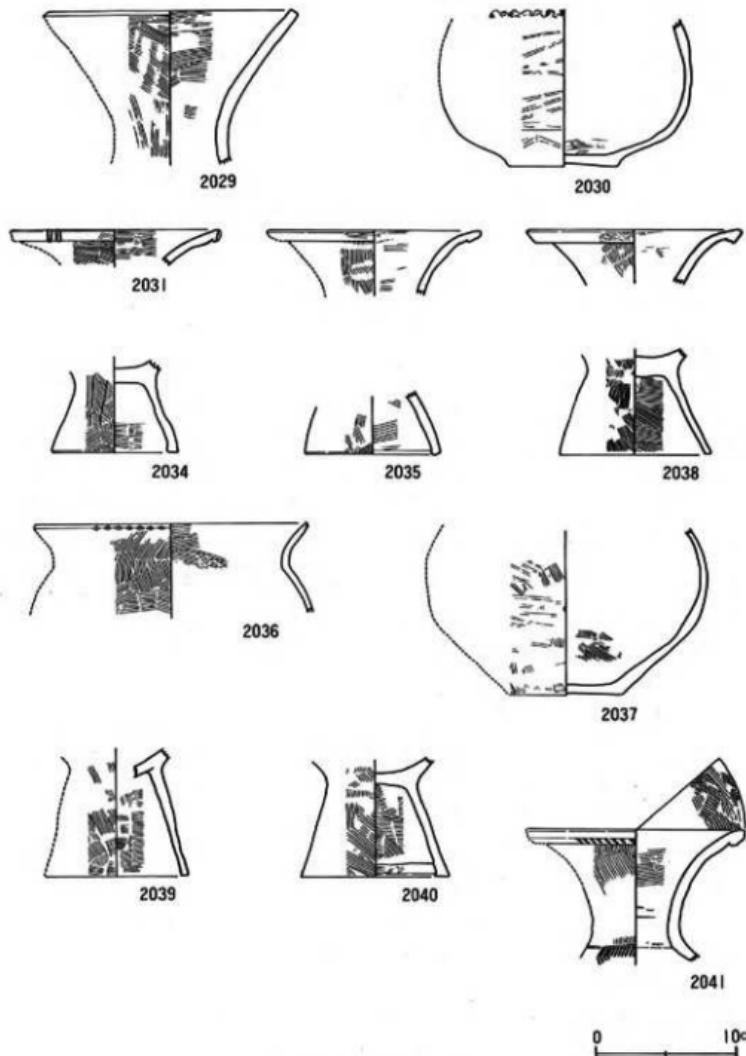


第34図 弥生土器実測図(3)



第35図 弥生土器実測図(4)





第37図 弥生土器実測図(6)

3 駿河湾東部の弥生土器編年ための覚書

(1) 月の輪上遺跡出土の弥生土器

① 月の輪遺跡群の土器分類

月の輪上遺跡-B地区一の弥生土器は、容量・形態・作り・装飾の違いにより、さまざまに区分することができる。けれども、その区分を何らかの原理に従って配列しなければ、分類を完成することはできない〔註1〕。われわれは、さきにも月の輪遺跡群出土の土器を分類する機会があったが、現在ではとくに配列に関して不十分な点があったことを認めねばならない〔註2〕。それゆえ、月の輪上遺跡-B地区一の弥生土器について記述するにさきだって、月の輪遺跡群の土器分類の新しい基準、およびそれと旧い基準との関係を明らかにしておこう（第11表）。

駿河湾東部においては、従来の小野真一氏等による幅年を清算して、新たな地域幅年を樹立することが急務となっている。そのため、後期弥生土器および同じ器種・器形を内に多く含む大廓式土器について、以上のような分類基準を統一して採用し、型式の変遷を考察する上で便宜をはかることにしたい。

なお補足すれば、器種・器形という用語は、かりに次のように使いわけている。つまり、大型壺・壺・小型壺・長頸壺・広頸壺・無頸壺等の段階を器種と呼び、壺A・壺B・壺C・壺D・壺E・壺F等の段階を器形という。そして器種をまとめるものとして壺類・甕類等を用いる。器種の区分では、用途推定に手掛りをあたえてくれる基本的形態と容量の相違を基礎に、一応明確な指標が認められるものを取り上げている〔註3〕。他方器形の区分においては、口縁部形態等の小異に着目し、胎土・焼成・色調や調整手法の違いに注意しながら、係累関係を探ることで、将来の分布論的研究に備えている。

② 溝状遺構20出土土器（第33図～第37図）

月の輪上遺跡-B地区一において検出された弥生時代の遺構には、竪穴住居跡18基、掘立柱建物跡3基、溝状遺構1基などがある。しかし、弥生土器がまとめて出土したのは溝状遺構20のみである。この溝状遺構20から出土した土器には、壺・無頸壺・台付甕・平底甕などがある。なかでは壺が多く、台付甕がこれに次ぐ〔註4〕。

壺 もっとも多量に出土した器種であるが、破損品が多く、同一個体で口縁部から底部までそろうのは2015の1点のみである。器形としてはD・E・Fの3種がある。壺Dは6個体で、壺Eが4個体、壺Fが3個体あり、壺Dと壺E+壺Fとほぼ等しくなる。

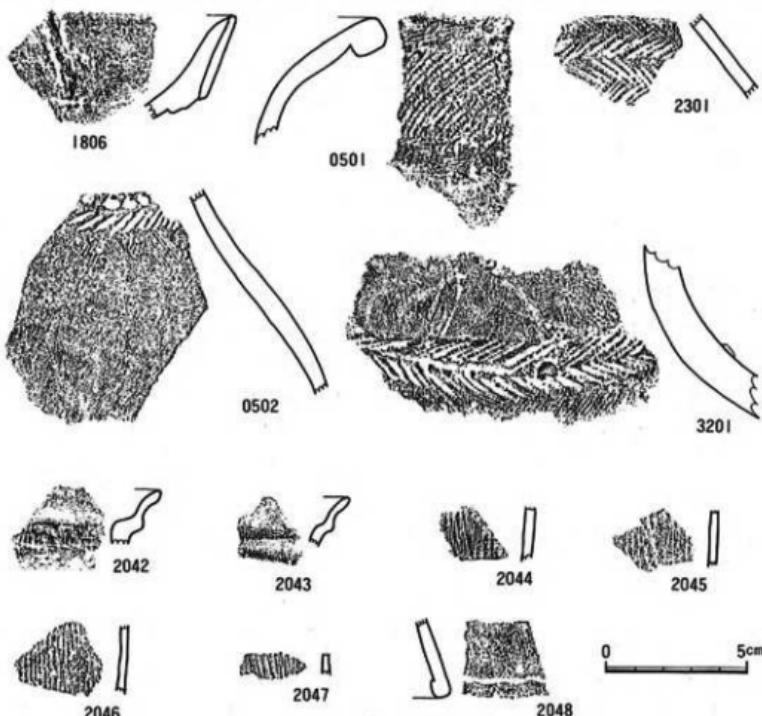
これらは、通常、窄まった頸部からゆるやかにラップ状にひろがる口縁部をもつが、壺Eのみ、他に、やや大形で短く立ち上がる頸部から外上方へひらく口縁部をもつ例（2004、2029）や、小形で短く内傾して立ち上がる頸部から口縁部が外上方へひらく口縁部をもつ例（2003）がある。調整は、前者が口頸部外面にタテ、内面にヨコ方向のハケメをつけて、後二者が口縁部外面にヨコナナメ、頸部外面にタテ、口頸部内面にヨコ方向のハケメをつけるが、さらに同方向のヘラミガキを重ねて入念に仕上げたものもある。一方胴部の形状は、やや肩のはった下腹れ形のもの

| | 新 分 類 | 旧 分 類 | 係 約 | 備 考 |
|----------|-----------------------|-------|--------|-------------|
| 壺 類 | 大型壺B (二重・複合、内面折返し) | 大型壺B | 駿河湾 | |
| | 壺 A (二重・二段) a類 (フ類) | 壺 A | 近畿→伊勢湾 | 大廓式 |
| | b類 (丁類) | | | |
| | B (二重・複合) a類 (フ類) | B | 駿河湾 | |
| | b類 (丁類) | | | |
| | C (二重・中広い折返し) | G | 不明 | 大廓式 |
| | D (二重・折返し) a類 (フ類) | C | 駿河湾 | |
| | b類 (短類) | | | |
| | E (単純) a類 (フ類) | D | 駿河湾 | |
| | b類 (短類) | E | | |
| | c類 (フ類) | — | | |
| | F (単純・面とり) | — | 駿河湾 | |
| 小型壺 類 | 小型壺A (二重・二段、胴部下位小孔) | 小型壺A | 近畿 | 大廓式 |
| | 長頸壺 (単純・直) | 壺 F | 近畿・伊勢湾 | 大廓式 |
| | 広頸壺 D (二重・折返し) | — | 駿河湾 | |
| | E (単純) | 小型壺E | 駿河湾 | |
| | 無頸壺 (二重・折返し) | — | 駿河湾 | |
| 甕 類 | 大型台付甕 (単純、鉢形) | 大 型 甕 | 駿河湾 | |
| | 台付甕 A (S字状) a類 (無花果形) | 甕 A | 伊勢湾 | 大廓式とその直前 |
| | b類 (球形) | | | 台付甕 D b類の影響 |
| | B (面とり) | B | 伊勢湾? | 大廓式(古)かその直前 |
| | C (折返し) | C | 駿河湾 | |
| | D (単純) a類 (無花果形) | D | 駿河湾 | 台付甕 A a類の影響 |
| | b類 (球形) | | | |
| | 平底甕 A (S字状、凹み底) | F | 琵琶湖 | 大廓式(古)かその直前 |
| | B (つまみ上げ、凹み底) | F | 近畿 | 大廓式(古)かその直前 |
| | C (折返し) | — | 駿河湾 | |
| 丸底甕 | D (単純) | E | 駿河湾 | |
| | (内面肥厚) | G | 近畿 | 大廓式 |

第11表 月の輪遺跡群の土器分類

が多く、肩のはらない無花果形のものは少ない。調整は、外面上位～中位がナナメ～タテ方向のハケメをついた後さらにヨコ～ナナメ方向のヘラミガキを加え、下位がタテ方向のハケメをついたものと重ねてヨコ方向のヘラミガキを施すものがある。内面上位～中位は器肌の荒れいることが多いけれどもヨコ方向のハケメまたはナデ等を行うらしく、下位にはヨコ方向のハケメをつける。

文様帶は、口縁部内面と頸部～肩部外面にあるが、さらに口唇部に刻み目（壺Dの2041、壺E a類の2008・2023）や棒状浮文（壺Fの2015・2031）を加える例もみられる。文様帶に施される主文様には繩文と櫛描文がある。けれども実際は、この2つの施文手法の相違がただ1つの装飾効果のために織一させられており、繩文の羽状配列と櫛描文の繩文的表現＝擬繩文（ハケメ原体と同一らしい工具の押捺を羽状に何段か巡らす）が文様帶を飾っている（小林 1939）。しかも、2041が繩文（口縁部内面）と擬繩文（肩部外面）をあわせもち、繩文を主文様とする2015、2020はS字状結節文に換えてS線（工具を横位に連続して押捺する）で文様帶を区画する。繩文の場合、普通、口縁部内面・頸部～肩部外面ともに1段または2段巡らすが、無花果形の2020は頸部



第38図 弥生土器拓影図

～肩部外面に羽状に5段巡らす。また、同じ無花果形の2007は羽状に3段巡らした後に磨消して間に2段の無文帯を挟む形にしており、円形浮文に換えて棒状浮文を文様帶に加える。この他では、2007、2012、2025、2028、2032が赤彩しており、結果として、繩文・擬繩文を巡らすもの、赤彩のみを施すもの、無文のものはそれぞれ14個体、2個体、7個体となる。

色調は〈器表〉淡橙褐色～淡黄褐色～黄褐色、〈器壁〉淡青灰色～青灰色または黄灰色を呈し、胎土に砂粒を多く含み、焼成のあまり良くない、粗質の土器が多い。

無頸壺 口唇部に刻み目を加える、小形品の2018である。調整は、外面が上位にタテ、中位にナナメ、下位にタテ方向のハケメをつけた後中位～下位にナナメ方向のヘラミガキを加え、内面は上位にヨコ方向のハケメをつけた後全面にヨコ方向のヘラミガキを重ねて、丁寧に仕上げる。色調は茶褐色を呈するが、壺と同様、胎土に砂粒を多く含み、焼成のあまり良くない、粗質の土器である。

台付壺と平底壺 全形をうかがい知ることができるのは、台付壺Dの2006（刻み目）、2009（刻み目）と、平底壺Dの2001の3点のみである。これら以外の、底部を欠損する、——壺Cの2005と、——壺Dの2002、2010、2014（刻み目）、2021、2036（刻み目）は、台付壺か平底壺かを識別することが不可能である。しかし、台部のみが数多く発見されていることからすれば、そのほとんどは台付壺と考えて大過あるまい。また、口唇部の刻み目の有無についていえば、有るもののが4個体、無いものが5個体で、両者はほぼ等しくなる。

胴部の形状は、最大径を上位～中位におき、胴のはった扁球形～球形の例が多いが、胴のはらない倒卵形の例もみられる。後者の場合口縁部が短い。調整は、外面が口縁部～胴部上位にタテ～ナナメ、上位～中位にヨコ～ナナメまたはナナメ～タテ、下位にタテ方向のハケメをつけ、内面は口縁部と胴部下位にヨコ方向のハケメをつけ上位～中位にはヨコ方向のヘラミガキやナデを重ねることが多い。台部は、丈の高い2039、丈の低い2022を除けば、形状の変化に乏しい。外面は端部近くにナナメ～ヨコハケメをつけた後全体にタテ～ナナメ方向のハケメを施し、内面はヨコ方向のハケメをつけることが多い。

色調は、壺と同じ〈器表〉淡橙褐色～淡黄褐色〈器壁〉淡青灰色か全体が（暗）橙褐色～（暗）黄褐色を呈するのが一般的であるが、なかには無頸壺と同じ茶褐色や異例の赤灰色を呈するものもある。前者は、胎土に砂粒を多く含み、焼成のあまり良くない、粗質の土器であることが多い。**器種構成** 以上のような器種・器形によって構成される溝状遺構20出土土器は、小野真一氏によって設定された、沢田式土器→目黒身式土器→尾ノ上式土器→大崩式土器という編年にうまく適合しない（小野1969）。つまり、壺類に刻み目のあるものとないものが併存するのは、目黒身式の特徴とされている。しかし、壺の文様に繩文と擬繩文が併存し、S字状結節文（単なるS字状細線を鎖状に連ねたのではなくて繩文手法による）で文様帶を区画するのは、目黒身式に先行する沢田式の特徴とされているのである。そうした両者が共存した溝状遺構20出土土器を一括遺物として認める立場からいえば、従来の編年が誤っているとしなければなるまい。

③ 水道工事出土土器（第39図）

前述のごとく、月の輪上遺跡-B地区においては、溝状造構20出土土器を除くと、弥生土器がまとまって出土することはなかった。しかしこれを補うものとして、昭和46年水道管理設工事に際して壺4個体と台付甕7個体が一括採集された、月の輪上遺跡（水道工事）出土土器がある（I-3-(5)参照）。

壺 壺Dが1個体、壺Eは2個体あり、他に不明の1個体がある。壺Dは窄まった頸部からゆるやかにラッパ状にひろがる口縁部をもつが、壺Eは窄まった頸部からまっすぐ外上方へひらく口縁部をもつ。しかし、いずれもやや肩のはった下脹れ形の胴部をもつ。調整は、器肌が荒れていってよくわからないが、(2)と(5)が口頸部外面にタテ方向、内面にヨコ方向のハケメをつける(7本/1cm、8本/1cm)。また(4)は、胴部外面の中位にタテ方向、下位にヨコ方向の粗いヘラミガキを加え、内面もヨコ方向の粗いヘラミガキを施す。(3)は、胴部内面の中位～下位にヨコ方向のハケメをつける(8本/1cm)。

(3)と(4)は、胴部外面の上位～中位に赤彩を施し、肩部に円形浮文を貼付するが、(3)はさらに波状文風の櫛描山形文(?)を連続させている。一方(4)は、口唇部に刻み目を巡らし、端部に2個1単位で2ヵ所に小孔を穿っている。色調は〈器表〉淡橙褐色～淡黄褐色、〈器壁〉白灰色～淡青灰色を呈し、胎土に砂粒を多く含み、焼成のあまり良くない、粗質の土器である。

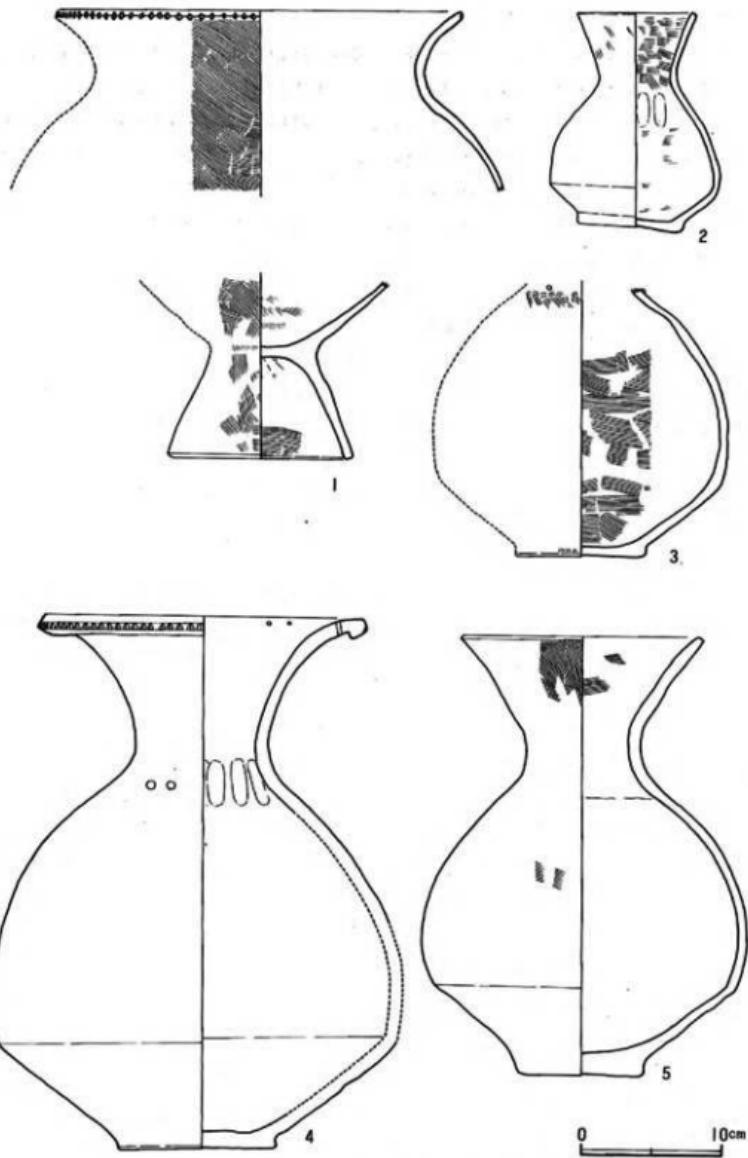
台付甕 (1)は、復原口径29.5cm、底径13.5cmをはかる、甕Dの大形品である。球形らしい胴部に外湾しながら短く外上方へひらく口頸部をついている。外面は、胴部にヨコ方向のハケメをついた後、口頸部にナナメ方向のハケメを施す(9本/1cm)。一方内面は、全面にヨコ方向のヘラミガキを加えて平滑に仕上げている。また口唇部は、ヨコ方向のハケメをつけた後、同一工具によるらしい刻み目を巡らす。台部外面はタテ方向のハケメをつけた後端部のみヨコナデを重ね、内面はヨコ方向のナデが主体であるが端部のみヨコ方向のハケメを残す。色調は暗黄褐色～茶褐色を呈し、胎土に細かな砂粒を多く含む。二次加熱あり。

器種構成 以上のような器種・器形によって構成される水道工事出土土器は、形態的特徴からみて、溝状造構20出土土器と同一の様式に含めて考えることができよう。では、その様式は何か。と聞かれると、從来の編年中に見出すことができないのは残念である。

（2）駿河湾東部における後期弥生土器の実態

① われわれの立場

駿河湾地方の東部地域においては、これまで後期中葉の弥生土器とされてきた壺などと、古墳時代初頭の標準遺物である小型精製土器群とを、一括遺物の形で発見する実例が確実に増している。このことは、一括遺物によって様式や型式の組列の検証をすることなく体系づけられた小野真一氏等の編年がもはや破産したこと、それに換えて正しい方法に基づく新しい地域編年を樹立する必要のあることを、如実に示しているといえる〔註5〕。とすればわれわれは、まず相対的年代の解っている若干の様式内容をしっかりと把握し、つぎにそれらを基準として個々の器種・器形における型式の変化と同時期の器種構成たる様式の変遷とを追究する、のことから始めねば



第39図 月の輪上遺跡（水道工事）出土土器実測図

ならない。

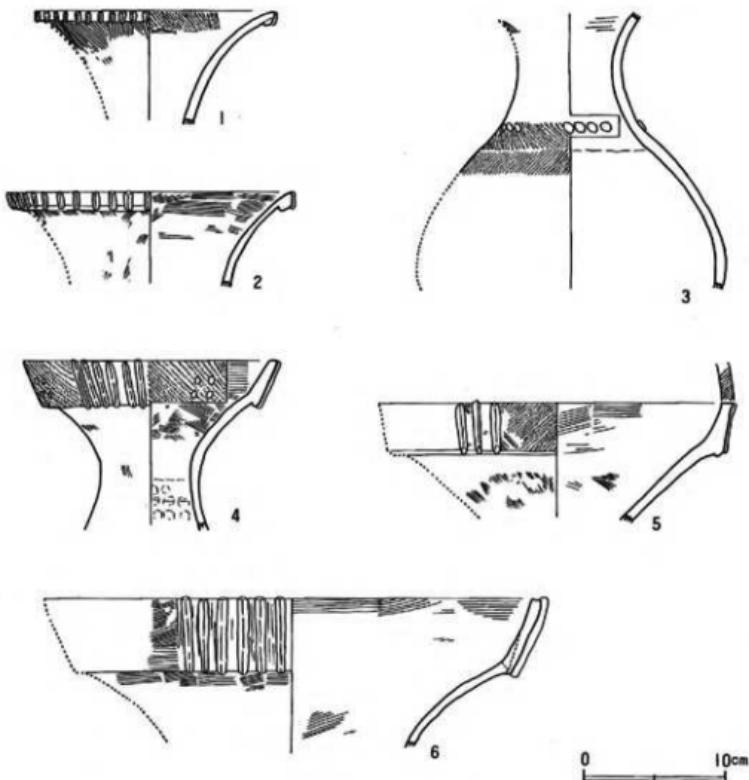
後期弥生土器を検討する上で、もっとも確かな基準となる様式は、上記の小型精製土器群を内に含む多数の一括遺物によって実在の検証された、古墳時代初頭の大廓式土器である〔註6〕。また、基準とすべきもう1つの様式には、今のところ、田方郡函南町向原遺跡の溝状遺構出土土器などとしてその一部を露呈した（小野他1972）、中期後葉とされる有東式土器〔または向原式土器〕を考えるのが妥当であろう（向坂他1968）。したがって、向原式土器を大廓式土器の対極におく中で、後期弥生土器の型式の変化と様式の変遷の問題を考えていくことになる。

② 各種壺の組列と組合せ

ここでは、新しい地域編年を樹立するための作業の1つとして、さきにも少し検討することのあった、壺の器形別の組列とそれらを横断する組合せについて整理しておこう。

折返し口縁の壺Dの組列 大廓式の壺Dは、大きく外上方にひらく口頸部に、球形かやや下脹れの肩をもつ。口頸部高が相対的に低く、口縁部の先端に重ねる粘土帯は、//や△の例が多い。文様帶は口縁部内面と肩部外面にあり、肩部外面の文様帶には繩文を1~2段巡らし、1条のS字状沈文〔繩文手法によるものでなく、単なるS字状細線を鎖状に連ねたもの〕で区画するものが多い。他方、折返し口縁壺のもととなる向原式の単純口縁壺は、中位かやや下位に最大径のある長球形の肩部と、細い頸部からゆるやかにひろがる口縁部をもつ。文様帶は口縁部外面または頸部~肩部外面の他に、口唇部にも持つことが多い。折返し口縁はこの口唇部文様帶に厚みを持たすことから発生したという（菊地1954）。主となる文様には繩文・櫛描文〔直線文・波状文等〕・竪描文がある。以上のような両者を対極におき、形態・文様帶・文様などを指標にして、壺Dの型式の変化を辿ると、両者の中间に少なくとも壺D₁・壺D₂の2者を認めることができる。壺D₁は、細長くゆるやかにひろがる口頸部と、下位に最大径をおく無花果形の肩部をもつ。口頸部高が相対的に高く、口縁部の先端に重ねる粘土帯は厚手の//の例が多い。文様帶は口縁部内面と頸部~肩部外面〔幅広く文様を何段も巡らす〕、および折返し口縁部〔小棒状浮文のみならず繩文等も施す〕にある。主となる文様には繩文と櫛描文〔直線文・波状文等〕がある。一方壺D₂は、窄まつた頸部からゆるやかにラッパ状にひろがる口頸部と、下位に最大径をおく下脹れか無花果形の肩部をもつ。口頸部高はやや低くなり、口縁部の先端に重ねる粘土帯は薄手の//の例が多い。文様帶は口縁部内面、頸部~肩部外面〔幅狭くなり繩文では2段の場合が多くなるが、なお1条のS字状結節文で区画する〕、および折返し口縁部〔小棒状浮文に代わって刻み目がふえ、繩文等は施さない〕にある。主となる文様には繩文と櫛描文の繩文的表現=擬繩文がある。

複合口縁の壺Bの組列 形態と文様の変化は壺Dに準じるので、文様帶の変化を中心に述べる。向原式の壺には、口縁部の先端を上方もしくは内方へ短く立ち上がらせる一群がある。複合口縁はこうした土器の系譜上に出現したものであろう。文様帶は、壺Dと同じ頸部~肩部外面と口唇部の他に、立ち上がり外面にも持つ。これに後続する壺B₁は、複合口縁部の幅が相対的に狭いものが多く、その外面には繩文・櫛描文を施し棒状浮文を加える。頸部~肩部外面の文様帶は幅広く、繩文・櫛描文を何段も巡らす。壺B₂は、複合口縁部の幅がやや広くなる一方で、その外面に



第40図 泉遺跡出土土器実測図

は棒状浮文・沈文を加えるのみで繩文・擗描文を施さない。頸部一肩部外面の文様帶は幅狭くなつて、繩文では2段のものが増える〔これを欠くことも多くなるらしい〕。そしてこの段階から、壺の中に占める割合が小さくなると思われる。対極に位置する大廓式の壺B₃は、くの字状や丁状の頸部が出現するとともに、口頸部高が低くなる。相対的に幅の広い複合口縁部の外面にはなお棒状浮文・沈文を加えるのが普通だが、肩部外面の文様帶はますます欠くことが多くなるらしい。単純口縁の壺E・壺Fの組列 口頸部形態は壺Dに比べて変化に富むが、胴部の形態・文様帶・文様等の変化は大略壺Dのそれに準じているようなので、組列も壺Dと同様のものを考えてよさそうである。壺Eと壺Fについていえば、月の輪上遺跡-B地区-溝状遺構20出土土器において壺Fと棒状浮文・壺Eと刻み目が対応し、大廓式では壺Eが多くて壺Fをほとんど見ないことが注意される。口唇部を面とりすることは、そこに文様帶をもつことと関係するのであろう。

組列の検証 上記した各種壺の組列を検証し、当地域における様式の変遷の順を追究する上で、一括遺物の果たす役割は大きい。ところが当地域では、発掘されたものが多いにもかかわらず、報告されたものがきわめて少ない状況にある。そのため、正しく組列を検証し、様式を設定することは困難であるが、その数少ない一括遺物の中の沼津市目黒身遺跡の第1排水溝出土土器（沼津市教育委員会1970）に壺B₁と壺D₁が共存する〔註7〕。そして上記した月の輪上遺跡一B地区一溝20出土土器、同（水道工事）出土土器に加えて、沼津市二本松遺跡の第1号方形周溝墓出土土器（瀬川他1978）や沼津市八兵衛洞遺跡群のB—2号住居址出土土器（沼津市教育委員会1979）でも壺D₂と壺E₂が共存している事実は注目に値する。色眼鏡で見るわれわれには、こうした事例が、各種壺の組列の正しさと、それらの組列を横断させた諸型式の組合せに変遷のあつたことを、暗示しているように思われるからである。

③ 様式の変遷

資料の乏しい壺類の壺以外の器種や、見掛けの特色に乏しい刷毛目調整の甕類の型式の組列は、今のところこれを編成するまでに至っていない。したがって、新しい様式の設定やその変遷の順を提示することはとてもできないのが現状である。それらのことはこれから課題として、今後も、月の輪遺跡群の資料を中心に駿河湾東部の弥生土器の検討を続けてゆきたい。（加納）

註1 この分類をめぐる問題については、拙稿「弥生土器研究のための覚書」（考古学基礎論3、未刊）で検討しているので、参照されたい。

註2 湯川悦夫・加納俊介「月の輪遺跡群出土の土器」（富士宮市教育委員会『月の輪遺跡群』）は、同じ1981年3月の刊行となるが、原稿は1979年2月に提出したものである。

註3 大型壺Bが相対的に大形であるのみならず内面折返しや器厚の違いによって容易に識別でき、小型壺Aは相対的に小形であるのみならずしばしば腹部下位に小孔を穿つことで区分できる。これに比べて、前稿で区分した小型壺Eは、類似する頸部を壺にも認めたので、今回は保留しておきたい。

註4 第38図2042～2048の台付甕Aも、同じ溝状構造20から出土したものである。しかし、すべて小破片で、最上層にしか認められなかった。本土器群からは除外すべきであろう。

註5 これに対して、一部の人たちは、登呂式土器—飯田式土器—曲金式土器という杉原莊介氏の編年を採用することで、お茶を濁そうとしている。しかし、小野真一氏等の方法的欠陥が、実はその杉原莊介氏の弥生土器研究に由来していることを忘れるべきではない。

註6 大廓式土器の器種構成については、前稿で検討しているので、参照されたい。

註7 富士宮市内においては、この時期の一括遺物をいまだ確認していないが、泉遺跡採集の土器などから様相の一端は知ることができる（第40図）。

引用参考文献

- 小野真一 1969 「東海地方東半の弥生文化」 信濃21-4、5
- 小野真一 1970 『目黒身』 沼津市教育委員会
- 小野真一他 1972 「北伊豆函南町向原遺跡発掘調査報告」 駿豆考古第13号
- 菊地義次 1954 「南関東弥生式土器編年への一私見」 千葉県教育委員会 『安房勝山田子台遺跡』
- 小林行雄 1939 『弥生土器聚成図録(正編)・解説』
- 埼玉県児玉郡美里村教育委員会 1978 『日の森遺跡』 -県営美里は場整備事業地内遺跡-
- 瀬川裕市郎・山内昭二・小野真一 1978 「二本松遺跡の土器と方形周溝墓」 沼津市歴史民俗資料館 『沼津市歴史民俗資料館紀要2』
- 日本考古学協会編 1954 『登呂(本編)』
- 沼津市教育委員会 1970 『目黒身』
- 沼津市教育委員会 1978 『藤井原遺跡発掘調査報告書I』 遺構編 沼津市文化財調査報告第13集
- 沼津市教育委員会 1979 『八兵衛洞遺跡群発掘調査概報』 沼津市文化財調査報告第16集
- 沼津市教育委員会 1970 『目黒身』
- 沼津市教育委員会 1979・80 『御幸町遺跡第1・2次発掘調査概報』 沼津市文化財調査報告第17・21集
- 浜松市遺跡調査会 1975 『伊場遺跡第6・7次発掘調査概報』
- 富士市教育委員会 1979 『天間沢遺跡第7次(F地区)発掘調査概報』
- 富士宮市教育委員会 1981 『月の輪遺跡群』
- 向坂鋼二・永房照 1968 「有東式土器」 遠江考古学研究2
- 湯川悦夫・加納俊介 1981 『月の輪遺跡群出土の土器』 富士宮市教育委員会 『月の輪遺跡群』

図 版

図版第1

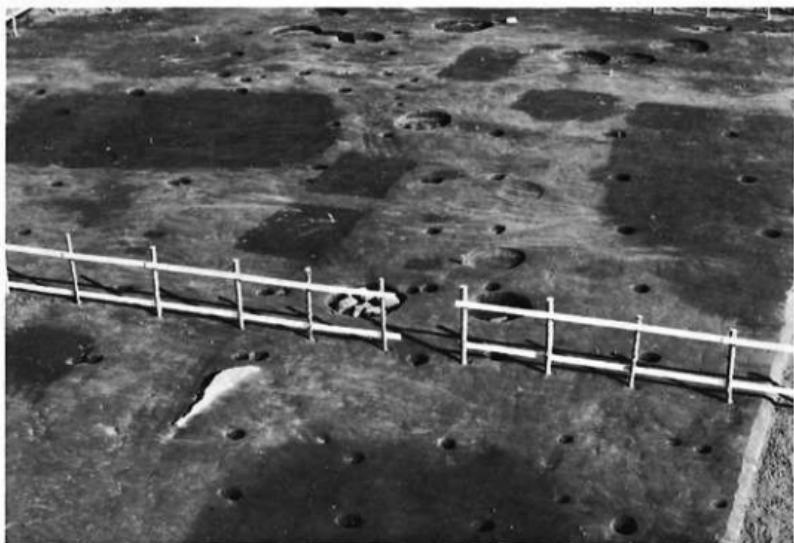


A. 歴史時代遺構全景



B. 弥生時代遺構全景

図版第 2



A. 歴史時代遺構近景



B. 弥生時代遺構近景

図版第3



A. 竪穴住居跡01床面



B. 竪穴住居跡01・02・16掘り方

図版第4

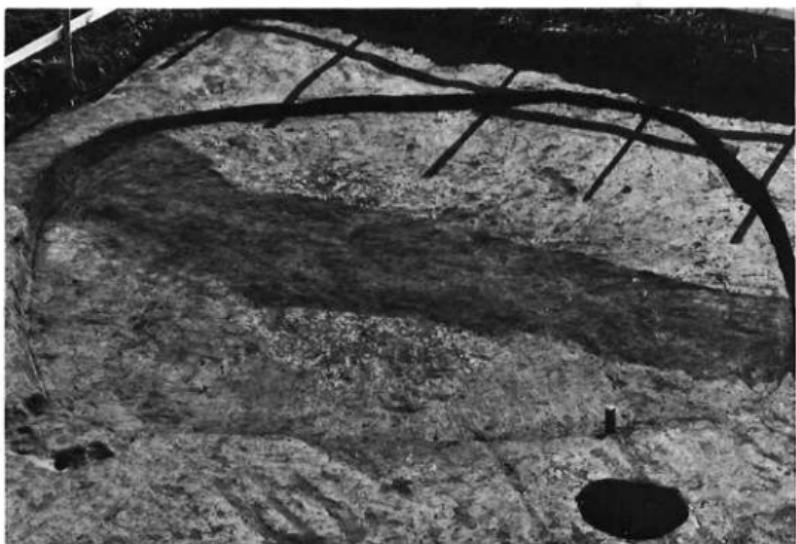


A. 竪穴住居跡03床面



B. 竪穴住居跡03掘り方

図版第5



A. 竪穴住居跡04床面

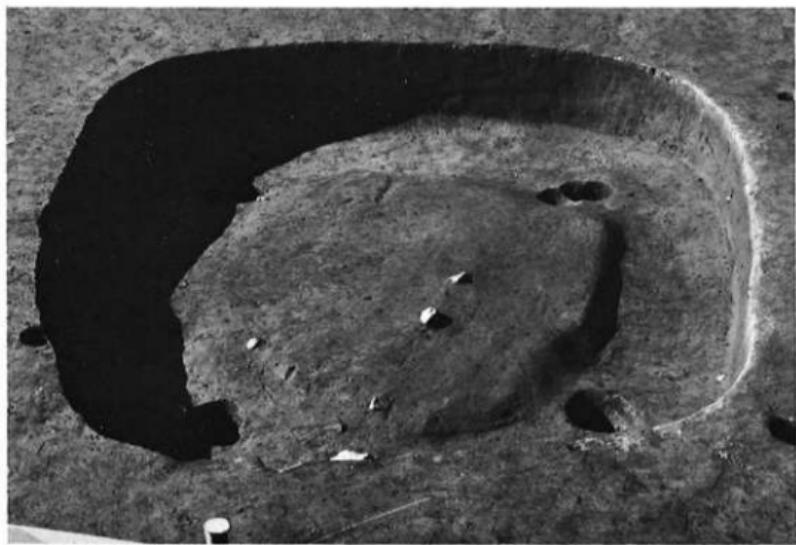


B. 竪穴住居跡04掘り方

図版第 6

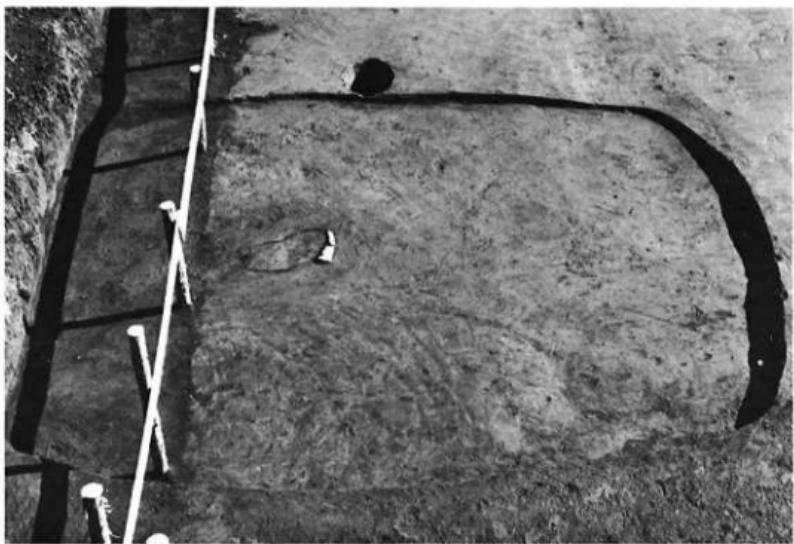


A. 積穴住居跡05床面



B. 積穴住居跡05掘り方

図版第7

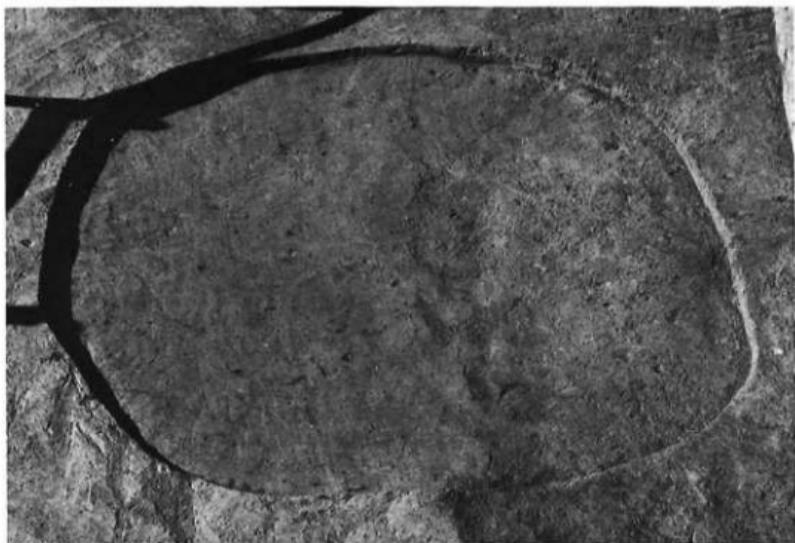


A. 竪穴住居跡07床面

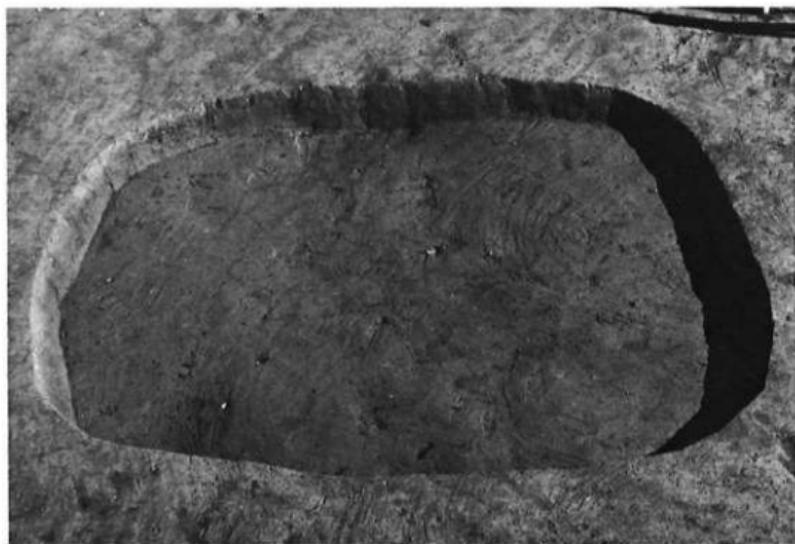


B. 竪穴住居跡07掘り方

図版第 8



A. 竪穴住居跡06床面



B. 竪穴住居跡08床面

図版第9

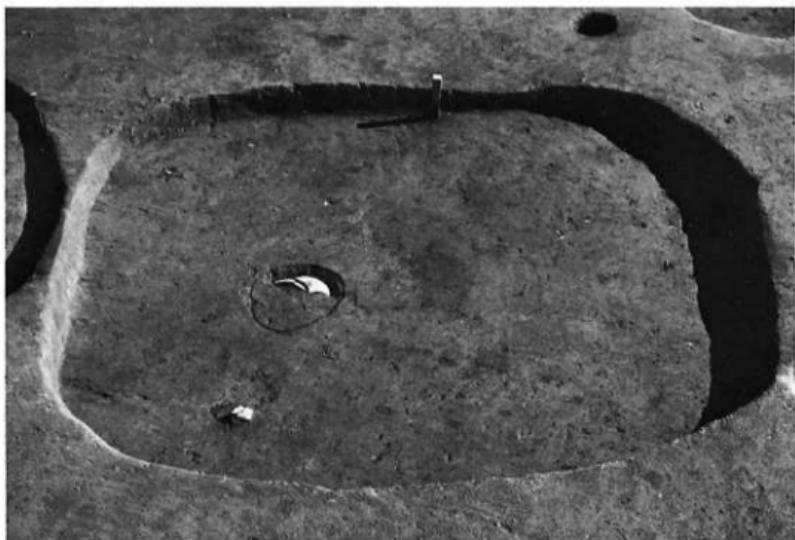


A. 積穴住居跡09・17掘り方

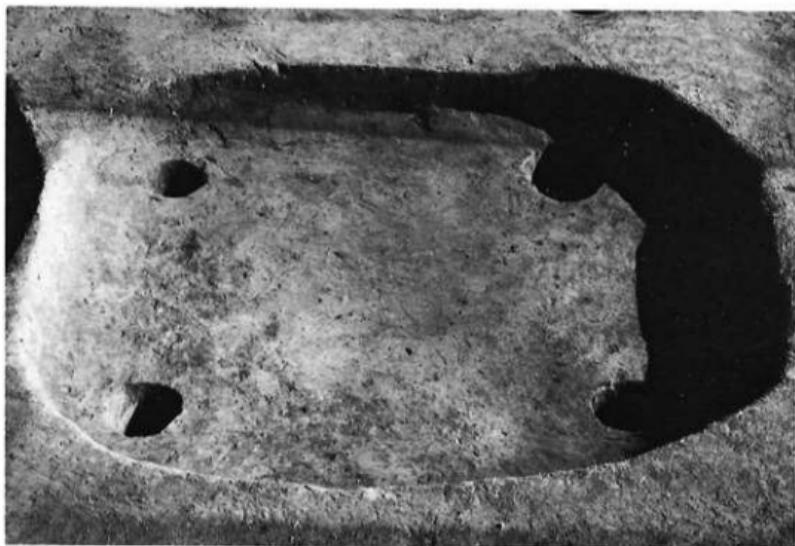


B. 積穴住居跡10床面・掘立柱建物跡26掘り方

図版第10



A. 竪穴住居跡11床面

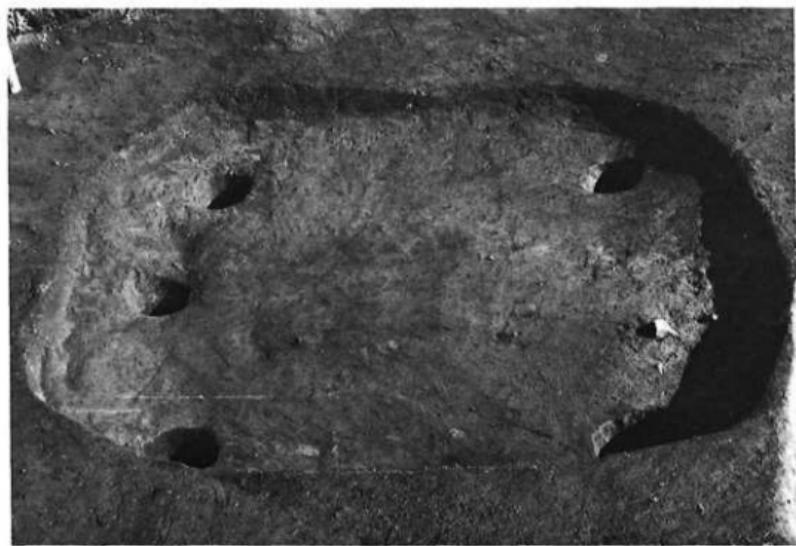


B. 竪穴住居跡11掘り方

図版第11

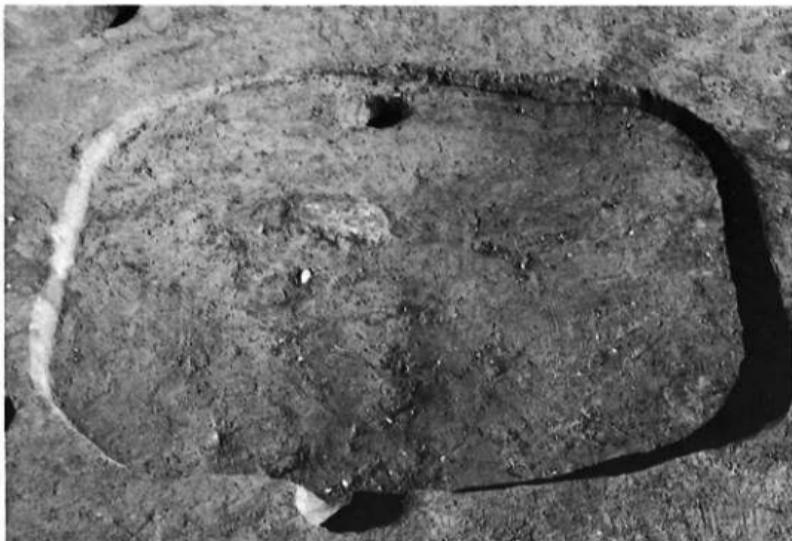


A. 積穴住居跡12床面



B. 積穴住居跡12掘り方

図版第12

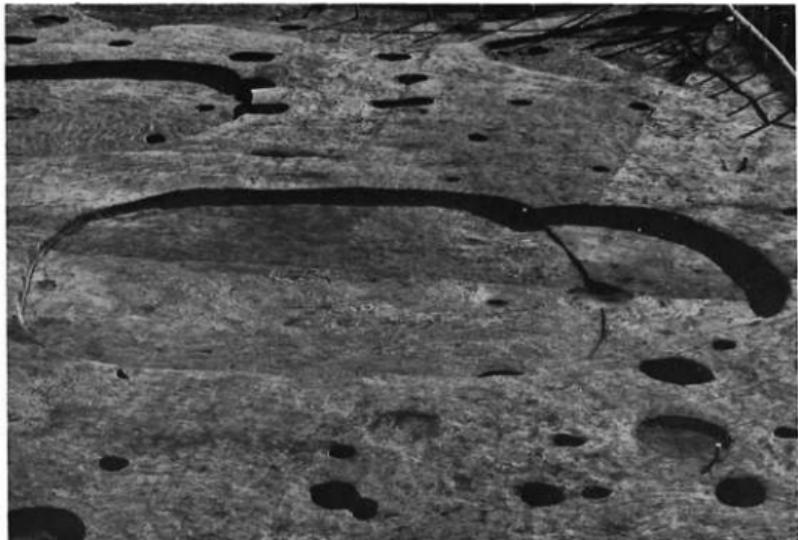


A. 竪穴住居跡13掘り方



B. 竪穴住居跡14・15・19床面

図版第13



A. 竪穴住居跡14・15・19床面



B. 竪穴住居跡14・15・19掘り方

図版第14

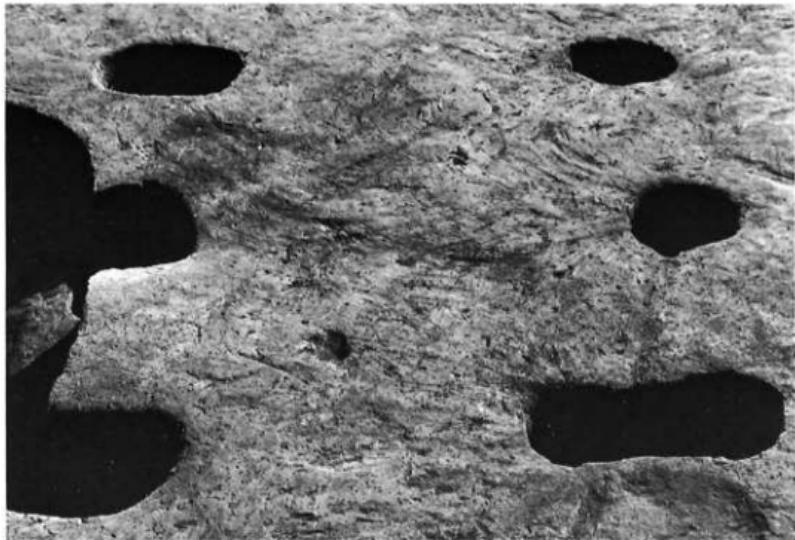


A. 竪穴住居跡18床面



B. 竪穴住居跡18掘り方

図版第15

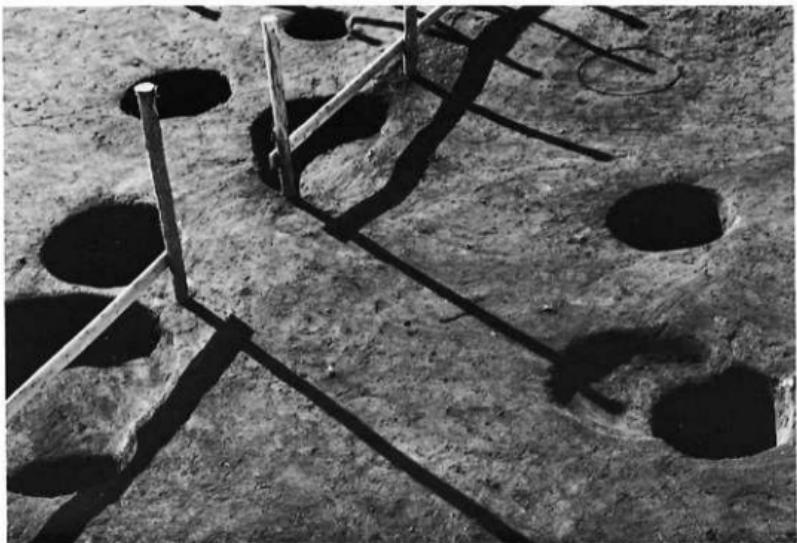


A. 掘立柱建物跡21掘り方



B. 掘立柱建物跡22掘り方

図版第16



A. 掘立柱建物跡23掘り方



B. 円形土塁42検出状況

図版第17



溝状遺構20遺物出土状況

図版第18



A. 溝状遺構20遺物出土状況



B. 溝状遺構20完掘状況



C. 溝状遺構20出土土器



D. 溝状遺構20出土土器

図版第19 出土土器(1)



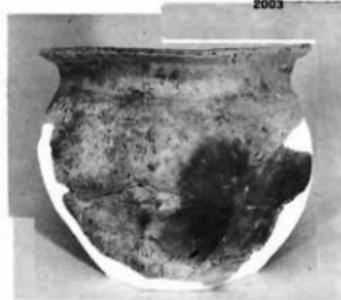
1804



1804



2003



2005



2001



2002



2004



2004(部分)



2004(部分)

図版第20 出土土器(2)



2006



2008



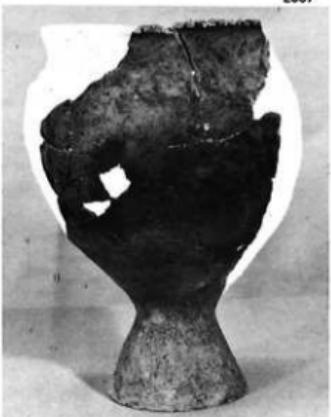
2008(部分)



2010



2007

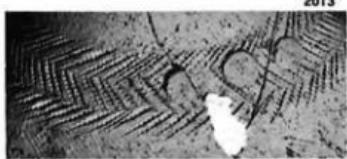


2009

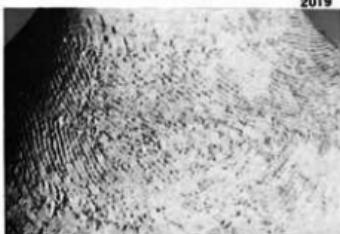
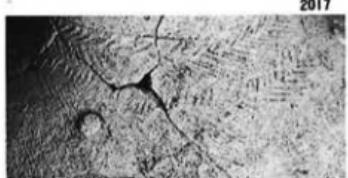


2011

図版第21 出土土器(3)

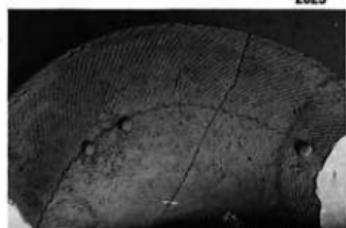
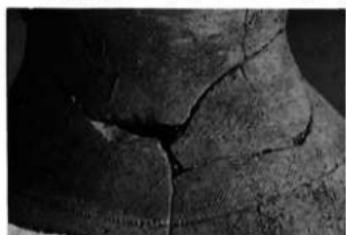


図版第22 出土土器(4)



2020 (部分)

圖版第23 出土土器(5)



図版第24

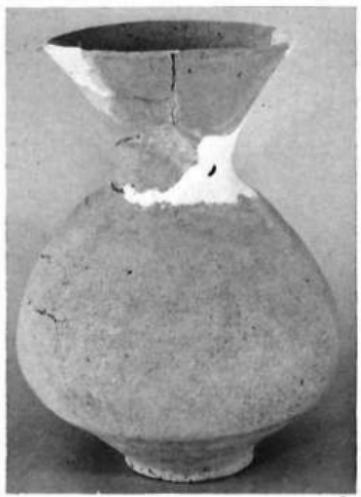


A. 繩文時代石器、および弥生時代土製勾玉



B. 歴史時代遺物

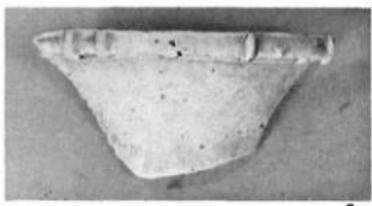
図版第25 月の輪上遺跡(水道工事)出土土器



図版第26 泉遺跡出土土器



1



2



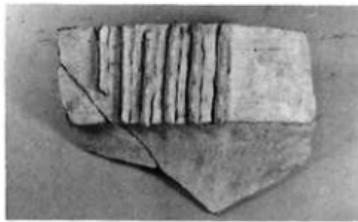
3



5



4



6